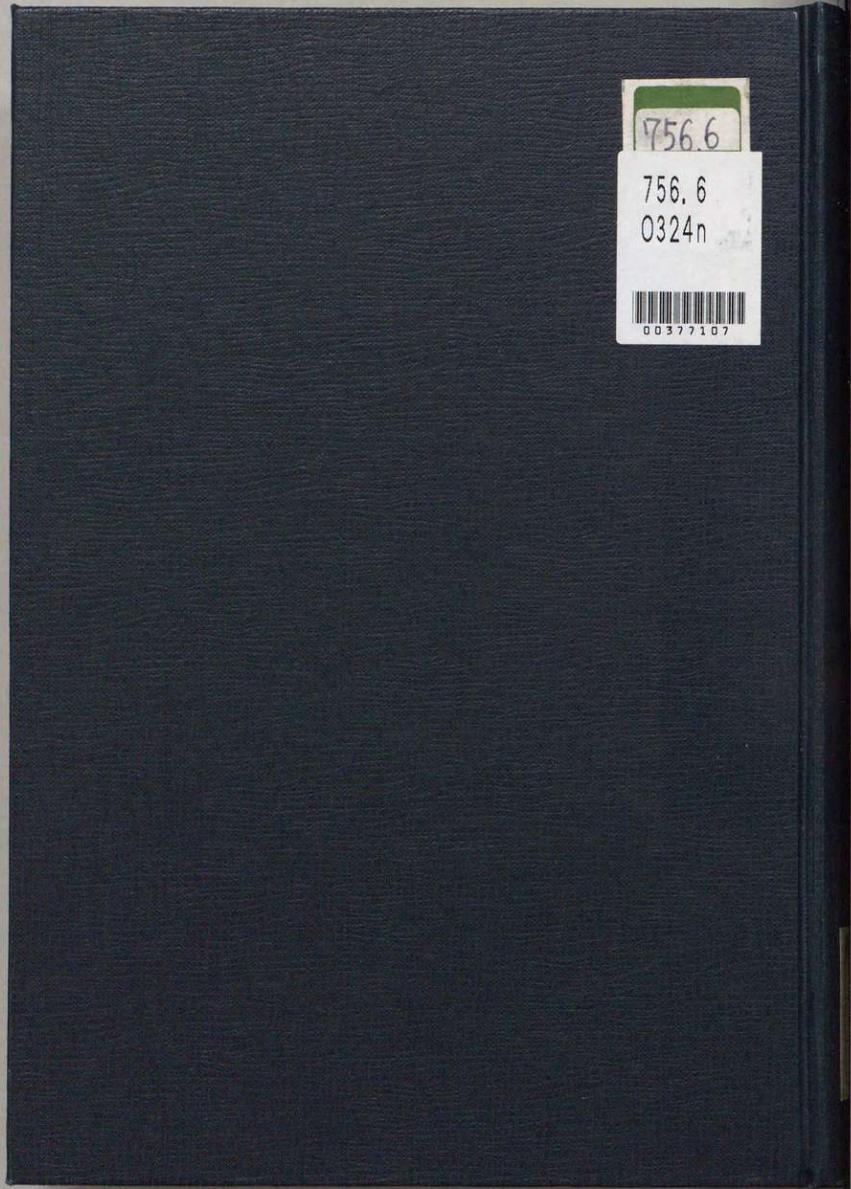
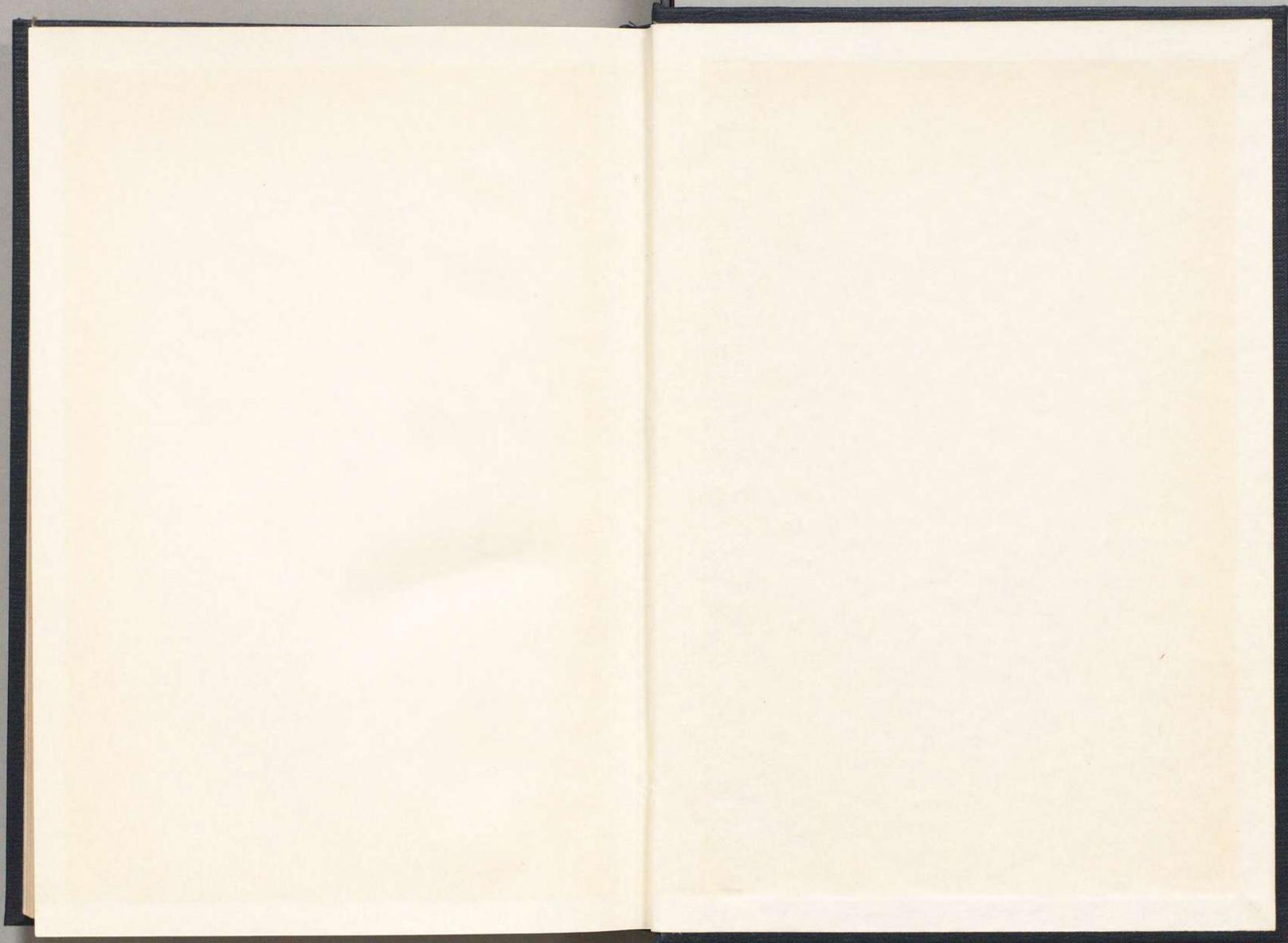
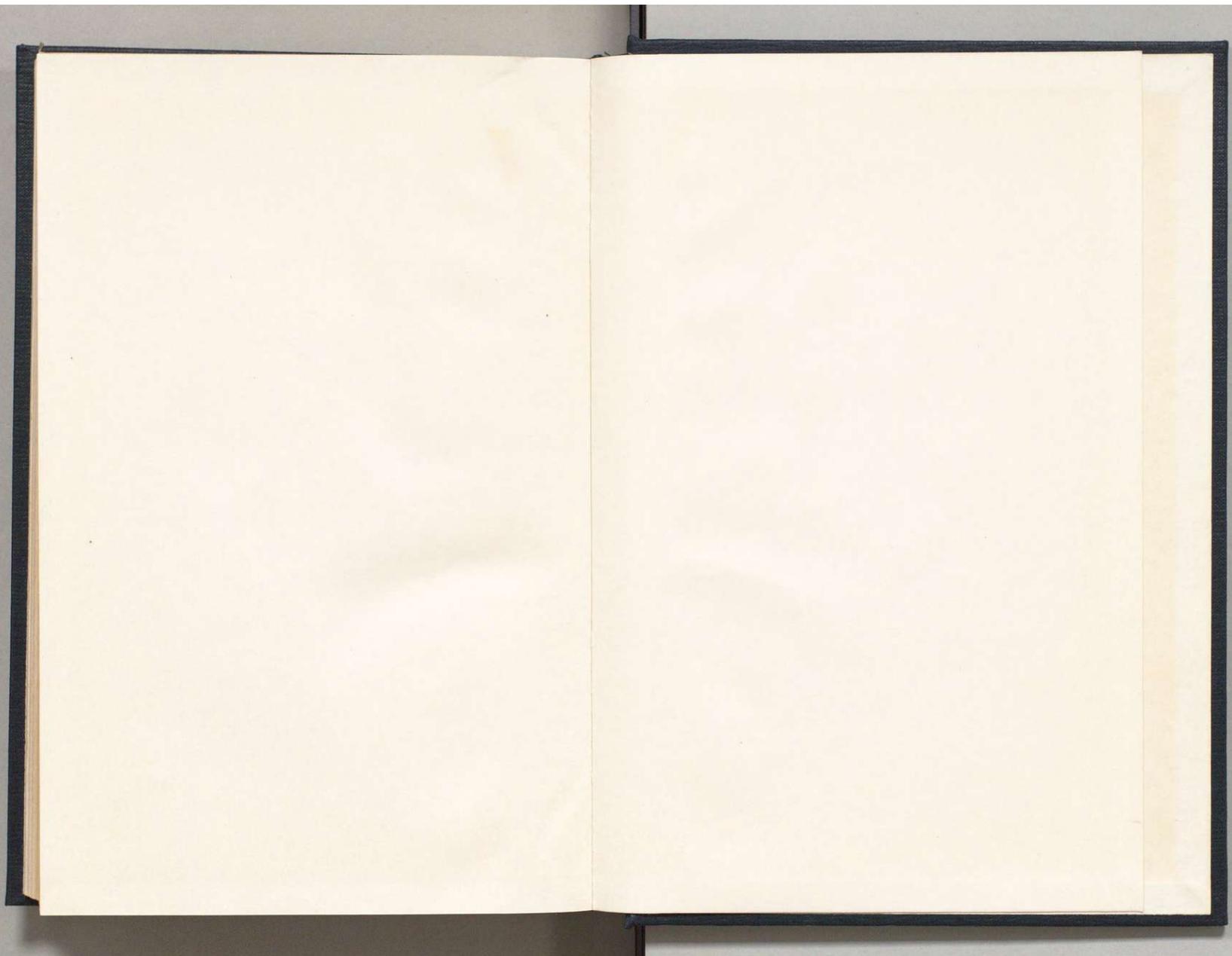




756.6
756.6
0324n
00377107







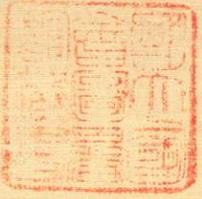
IKZT:32



IT-2T-32

1756.6

0324n



377108

寄贈
小林須賀殿

日本鑛工録

合野右衛門著

緒言

鑛工、金工に就き良書なきの故を以て何がな好伴侶となるべきものを發表されたいとは、かなり以前より屢々承はりました處であります。私としては研究中の未定稿を發表致しましては、却つて疑惡を深くする様な事がありはしまいかと懸念に堪へなかつたのであります。然るに先輩諸先生も亦た御同感と見へまして、どなたからも御意見の發表と云ふ事は承はらないで居つた處、此頃に至りまして其聲は益々盛んになる斗りとなりましたので、未だ勿論研究中ではあります。茲に腹藏なき原稿を掲げまして諸彦の忌憚なき御斧正を願ひましたなら、或は従前よりも一層正鵠に近きものが得られ、他日完全なる良書の前提となる光榮に浴する事が出来得るかも知れぬと思ひ、又要するに有は無よりも良いと考へまして先づ鑛工より初め順次金工にまで及ぼふと思ひます。此の

如き擧は元とより私の適任でないといふ事は自身もよく承知致して居りますので、先輩諸先生に對しましては先づ以て潜越不遜の罪を御詫申上げ、それと同時に一般大方諸君と共に何卒斧正に吝ならざらん事を御願ひ申上げて置きます。

從來の著書としては某家より出版されました、勿論之れは非賣品でありますが、故和田維四郎博士の本邦裝劍金工略誌が最も良いと思ひますので、御出版になりました御家の御諒解を得まして此書を經とし之れに聊か私見を加はへまして發表致す事に致しました。

鐔の起原に就きましては甚だ明確を缺いて居りまして、古代の現存物中には考古學の範圍にある直刀附屬の寶珠形の鐔、又は飾太刀の案鐔、或は練り革の鐔等夫々古代を物語るものもありませんが、茲に書き出します鐔は所謂鐔家の觀賞する物を目標と致しますので、夫れより以前と思はれますものは總べて省く事に致しました。

金工略誌總論の内に

『裝劍具中防禦上最も必要なるは鐔なり、其鐔の最も古きものは刀匠の製作に成れるものにして、之に次けるは甲冑師の作なり。』
とありますので、作より初め、之も略誌を基礎と致しまして分類及順序を次の如く致しま

鐔工分類

- 一 刀匠
- 二 甲冑師
- 三 鎌倉
- 四 應仁
- 五 平安城象嵌
- 六 與四郎
- 七 金家
- 八 信家
- 九 山吉
- 一〇 法安
- 一一 貞廣
- 一二 平安城透
- 一三 古萩
- 一四 金山
- 一五 尾張透
- 一六 埋忠
- 一七 正阿彌(京及伊豫)
- 一八 正阿彌(各地)
- 一九 明珍
- 二〇 甲乙女
- 二一 春田及蓬萊
- 二二 駿河

- 二三 伊藤
- 二五 記内
- 二七 柊屋
- 二九 金家派
- 三一 南壁
- 三三 肥後(林及春日派)
- 三五 肥後(甚吾及其他)
- 三七 刀匠及切物師
- 三九 江戸鐺工
- 四一 越前、加賀及佐渡
- 四三 丹州定正
- 四五 奈良鍛冶
- 四七 中國鐺工
- 四九 雲州鐺工
- 二四 赤尾
- 二六 間
- 二八 宗典
- 三〇 天法
- 三二 赤阪
- 三四 肥後(平田及西垣派)
- 三六 長州
- 三八 奥羽東北
- 四〇 尾張鐺工
- 四二 大五郎及京師鐺工
- 四四 攝州次重
- 四六 紀州貞命其他
- 四八 其阿彌
- 五〇 八阪永閑

- 五一 肥前鐺工
- 五三 薩摩鐺工

以 上

- 五二 若芝
- 五四 其他各地

解 說

第一 刀匠(第一圖参照)

和田先生の金工略誌に

『第一期古鐺足利義教將軍以前(西曆一四二七年以前)』

第一期の鐺は刀匠及甲冑師の作にして銘を刻めるものなし其古きものは大形にして圓鐺なり
 第二刀匠作 圓形の板鐺にして圓耳なり簡單なる透(多くは一個)あるものあり現存品中最古の
 ものは約六七百年以前ならん地鐵鍛鍊共に良好なれども毫も美術的の意匠なし』

以上の如くでありまして、次項に出します甲冑師作と酷似の物であります、只だ異なりす點を
 申しますと、甲冑師の板鐺の角耳薄手なのに對して刀匠作は圓耳なる處と厚手なる點であります。
 元來刀匠の鐺作の考証に就きましては、文献方面の智識に乏しい私としては其方面の事は何共申上

六
げ兼ねますが、刀身に鐵の鏝のついたものがありまして、而かも其鏝は金具師の手に成つたものではなく、刀匠自身作りました様に思はれますものがあり、而して此等のものは源平時代より南北朝頃ののものに見へる様に思はれます。傳説によりますと刀匠が一刀を作る時は必ず一鏝を添へた事實があるとの事でありますが、現代の研究程度では刀匠の誰が何年頃一刀に一鏝を添へた確證があるかと聞かれますと、傳説以外何の據り處もないと申すより外ないと思ひます。殊に該鏝には在銘の物は絶対にないのであります故、一層一般各位の御注意と御研究を願ひ度いと思ひます。後世になりまして末相州綱廣作の鏝に慶長九年の年號あるもの其他肥前忠廣作、豊後高田本行の本目鍛の鏝、其他の刀匠鏝も見た事がありますが、此等は茲に申上げます古代の刀匠即ち第一圖に掲げましたものとは全然一致して居らぬ物であります。

第二一 甲冑師（第二圖參照）

金工略誌に

『現存品中最も古きは六七百年以前のものなり圓形の板鏝にして角耳、土手耳、又は鋤返あり

通常少許の透あり其古きものは簡單なる花葉等壹個を櫃の稍々上部に透せり、木瓜形にして全面に梅花等を散せるものは最も多くして年代稍々降れり、爾餘の形狀をなせるものも亦尠からず、甲冑師作は刀匠作に比すれば稍々薄く且つ透彫等稍々美術的にして兜、面頬等に於けると同一の意匠を施せるを観る地鐵鍛鍊共に良工なり、

甲冑師中康治、建久の頃紀の宗介と云ふもの明珍の一派を興し爾來甲冑師の宗家となり連綿として後世に至れり此宗介を初代として第拾代までを上拾代又宗類と稱す即ち現存最古の鏝は上拾代中の作に係るものあり、然れども其多くは七代以後の作ならん』下略

甲冑師鏝の作風は前掲中にもある如く板鏝が原則でありまして、角耳になしたると、耳を高くなたる土手耳と、土手耳を丸くしたる鋤返しとの三種類あります。形狀は古くは殆んど眞丸形のみであります、後世になると長丸形のものを見る様になります、此頃木瓜形にて土手耳になし平に阿彌陀鏝のかゝりたるものを見ましたが、之れは信家近邊の作の様と思はれました。而して此部類の鏝の地鐵は鍛鍊良巧なる物と、稍々粗雑なる物とあり、地造りは磨き、鏝目、點々等を打込みたるもの、又唐艸や其他のものを毛彫風に彫刻したるものなどがあります。尙ほ透し摸様は普通は紋様を表の中心穴の右手下部に透すのであります、中心穴の右の上部に透しのある物が古いとの事で

後世になると鐔の全部に紋様を透したものもあります。紋様の種類は櫻、梅、桔梗、四ッ目、花菱、巴、雪花、三ッ鱗、茸、雲、等を普通とし、其手法が面頬の耳の邊にある紋様の透しと全然一致して居ります、稀れには九字の如き字形を残し地を透した物も見つあり、紋様の代りに劔を透したのも見つありあります。大きさに於ては直徑三寸位を普通とし、小なる物即ち二寸六七分位の物には片櫃のある物があります。最も三寸以上の大形に兩櫃のある物もありますが、これは多くは後にあけられた様に思われます。故人別役先生愛藏の南無八幡の文字を左右に、猪を上下に透したる摩利支天の名鐔は直徑三寸七分五厘と云ふ大形のものでありますが、之れは南北朝時代の様に思われます、それは其頃の刀身には長大なるものが多くある故であります。而して之れと同様の大形のものも往々見る物であります。

甲冑師作の鐔にも明珍信家以前には在銘の物は皆無であります故に、時代を明らかに知る事は到底不可能であります。夫故に形狀、地造り、紋様等に就ても、其何れが果して古いかと云ふ事も具體的には判明しないのでありますが、之れは要するに其物に就き種々の方面から推定するより外ないのであります。一體甲冑師鐔の年代を考察するに就て現存鐔を調査して見ますと、古い所は鎌倉時代よりは下り、足利末即ち永正頃の名工明珍信家出現以前と思はれる物が多い様に思ふのであり

ます。勿論長丸形の様式の鐔は其以後迄もありますが、信家出現と共に鐔の作風に一轉期をなしました事は争ふべからざる事實であります。

附圖寫眞第二圖一號の三光蜻蛉透しの名鐔は無銘であります、古來明珍十代宗安(嘉慶頃、嘉慶元年は自今五四年前)作として有名なる物であります。又第二圖二號の輪寶透しは、樋目仕立て全面透したる處が珍らしく、時代は少なくとも南北朝頃と思はれますが、實際は或は猶ほ夫れ以上古い物かも知れません。

和田先生の略誌には、明珍家は甲冑師の宗家として其家譜を委しく掲載してありますが、前記の如く此期の甲冑師作は悉皆無銘でありまして、参照する必要を認めませんので之れは略します。

第三 謙倉(第三圖參照)

金工略誌を抄録致しますと先づ前書に

『秋山氏の説に依れば鎌倉鐔及應仁鐔は元同一の名稱にして京都に於て應仁鐔と唱へたるもの東京にては鎌倉鐔と稱へたるものにて此種の鐔は(一)薄き板鐔に淺き彫刻あるものと(二)次に

記せる象嵌鐺との總稱なりと云ふ然れども此二種は之を區別するを便とするのみならず現今概して前者を鎌倉鐺後者を應仁鐺と稱するか故に本書亦之に従ふ

以上の如くありまして、鎌倉と應仁とを同種としたる説を是認された様に思はれますが、單に名稱の上に就きまして、東京にて鎌倉と唱へるものを京阪にては關東鐺と稱し、又京阪にて應仁と唱へたるものを東京にては昔日與四郎と稱したる等一致しない點もあり、又手法、圖様に於ても假令鋤出し彫と据物象嵌の差はありまして、同種のものなれば同圖でなくとも似たものはある筈で、同時に又共通點もなくはならぬ様に思はれますが、未だ同圖同様のものを見たことはありません、只だ形狀に於て眞丸形の同様のものはありますが、單にそれのみでは同種のものとは申されぬ様に思はれます、故に此鎌倉と應仁とは引き放して説明する事が至當の様に考へられます。それで略誌本文には左の如くあります。

『鎌倉鐺は薄き板鐺にして圓形多く耳は角又は土手耳なり應仁鐺と同時代の作と認むへし簡單なる草花又は月兔等の高彫あり眞品稀にして應仁鐺の傳存多きに比し奇と云ふへし

今世に多く見る鎌倉鐺は其製作の年代に先後あれど古くも三百年を超えざるものにして何れの地にて作られたるやを審かにせず蓋し其佳作は鎌倉鐺の眞品を摸したるものに始まり遂に此一

種の制を生ずるに至りしならん圓形、木瓜形、隅切角形等種々の形狀を爲し角耳にして薄く地鐵は他の鐺に認めざる一種のものなり即ち手入れを施すも光澤を發せず且容易に錆を生ぜず表面粗糞なり淺き高彫を以て山水等を現はす、固より深く賞すべきものに非ざれども傳存頗る多きを以て茲に之を附記す其製作地不明なり其地鐵の清國輸入の南蠻鐺に類似せるより推考すれば少くも清國よりの輸入にあらざるか考證を俟つ

以上の如くありまして鎌倉と唱へる鐺は應仁同時代の物に限り、其後と思はれる大部分の鐺は皆偽物と御認定になりました様に思はれます。そこで先づ鎌倉鐺の作風を申し上げますと概ね眞丸形、角耳で、鋤返し土手耳は眞に僅少であります、それから木瓜形も見ましたがそれは後代と思はれる物でありました、又た菊形とも云ふべき十二木瓜形のものを見た事がありますが、此方が却つて余程時代が古く、其木瓜の一つづゝに丸穴を透してありつまり十二丸穴がありまして、地には松葉が鋤出してありましたがこれは稀な鎌倉鐺であります。薄き板鐺に櫻花とか雁金とか蜻蛉とか又は菱菱等の簡單なる透しをなし、其透しに多くは小縁をとり、淺き鋤出し高彫にて山、水、橋、浪、塔、又は菊唐艸、枝梅、丁子、千鳥、雁金等の頗る氣拔な圖様を而かも大摸様に數種混同して顯はしたものを普通としますが、或は扇面を重ねて其一は鋤出し高彫に又他の一は毛彫になしたる等のものが

あります。圖様に於ても委しく調査しますと猶ほ此他にも種々ありまして、鋤出し高彫と毛彫とを混同した圖様もかなり多くある様に思はれます。それから又後代となりますと金或は銀で露を象嵌したものもあります。切羽臺は丸く頗る大形で鋤出しにしたものが多くありますが、之れは後の正阿彌に共通點がある様に思はれます。形ちは三寸以上の大形の物も往々見ます。又小形のものには片櫃のあるのを見ますが、此櫃穴にも多くは小縁が鋤出されてあります。時代の考證に至りましては之れも亦た在銘がなく全部無銘でありますので、作者も年代も勿論解らないのでありますが、昔日は其名稱によりまして鎌倉時代と考へて居りました人もありました様で、又東にて鎌倉と云ひ西にて關東又は小田原と唱へる故に、北條時代小田原にて製作されたものではあるまいか、又其作者は勿論甲冑師より出たる人の手に成つた様に思はれるといふ人もあります。而して此鎌倉鐔は地鐵に於ても良好なるものと、粗雑なるものとの二種ありまして、其粗雑なものはこれを如何に手入れをなしても、他の鐔に見る様な光澤は決して出ないものであります、これは或は彫刻をなす爲に鍛錬したる鐔を焼き戻す故に、粗雑に見ゆる様になり従つて光澤の出ぬ様になるのかも知れませぬ、又錆色も赤みを帯びて居りますのは南蠻鐵を用ひた故かとも考へられます。それから時代に就て應仁鐔と比較して見ますと、圖様手法共に著しく巧みに見えます事は年代の下る故ではあるまいかと

思はれます。和田先生が一部は清國よりの輸入ではあるまいかと云はれましたが、其理由は圖様が明人の手になりました畫圖其他の物に見る山水塔橋等に共通點がある故と察せられますが、之れは一面には足利中世以後盛んに大明の文物を取り入れ、唐物ならでは世人の承知の出来ない時代の反映と見ても差支へない様に思はれます。又徳川期に入りましてから盛んに偽作をなし又摸造されたとありますが、偽作とか摸造とか云ふ事は顯著なる名人名作がありまして始めて有り得る様に考へられ、又た時代の風潮即ち流行に應じても多く顯はれる様に思はれます。而して此鎌倉鐔の如き作者の判明せざる場合には、第二の時代流行の感化の爲めと見るべきであります、徳川期の理忠とか正阿彌とか其他數多居りました鐔家の中に、共通の圖様手法等を見ませんので流行の感化とも云はれない様に思はれます。勿論摸造されたものもないではありませんが、之れは猶ほ一層の研究を要する事の様に思ひます。由來鎌倉鐔と稱せられますものは昔日は餘り貴重視せられたものではなく、却つて近年に至つて一種のものとして賞翫されると云ふ次第であります、されば粗造品の多數にあるのも無理ならぬ様に考へられます。時代も最古を應仁とし徳川初期迄の間を往來したものと様で、後の正阿彌派に共通した所があり、又古くは桃山式の圖様の前提となりました様にも思はれますが、私一個の意見としては最古の物も應仁よりは遙か時代の下つた物ではあるまいかと思つ

て居ります。第三圖一號の土手耳橋に浪の鐺は鎌倉鐺の名物でありまして地鐵も良好で總てが甲冑師鐺に似て居り、彫刻は巧みで圖様も御覽の通り奇抜飄逸を極め此鐺の代表的傑作であります。又同第二號の山に鳥居を毛彫にし扇面の内に塔を鋤出し高彫にしてある鐺は、普通世に多くある鎌倉鐺であります。

第四 應仁（第四圖参照）

金工略誌に

『透鐺を作る専門鐺工の興れると略同時即ち應仁の頃又從來の板鐺に他の金屬を以て象嵌を施す鐺工興れりこも亦透鐺の如く官府の命に因りて起りしものか圓形の板鐺（少許の透あり）にして圓耳なり是れに黃銅（後又素銅）を以て据紋象嵌を施せり其模様は唐草又は紋等を多しとす地鐵は甲冑師作に類せり此据紋象嵌に三種あり（一）黃銅を以て模様を作り之を据紋象嵌にしたるもの（二）線を以て模様を作るもの（三）點を以て模様を成せるものは是れなり多くは此三種を併用したれとも亦其一種のみを用ひたるもの尠からず其古きものには櫃孔なきか又は

壹個のみなり其二個あるは稍後期のものなり』

以上の如くあります。而して略誌には此の前に平安城透鐺を讀きて、足利義教將軍の命に因り透し鐺を作らせた事を説かれてありますれば、夫れと略ぼ同時と云ふ譯であります。茲に應仁鐺の作風を説明致しますと、以上略誌にもある如く据紋と、線模様と、點の象嵌との三様があります。それで先づ据紋より申しますと、形ちは圓形の板鐺でありますが、概ね直徑二寸八九分位の眞の丸形で、中には縱二寸九分餘横二寸八分五厘と云ふ位の差のあるものもあります。鐺の厚さは一分二三厘位が普通見る處で地作りは甲冑師其儘でありますが、耳が丸耳で刀匠作に共通して居り、耳際に眞鍮にて一線を嵌入して區劃し、又切羽臺の外側に下張りの橢圓形の一線を同様眞鍮にて嵌入し、其中間に丸に三ツ引紋、枝橋、又何と云ふ模様でありますか解り兼ねますが、源氏形の中に見る様な櫛の齒形の如き紋様等を、眞鍮にて案配よく配列して据紋象嵌されて居ります。櫃穴は一個又は左右二個あるものもありますが、之れは切羽臺外の線に懸つて居りまして其多くは後にあげられたものであります、尤も初めよりあります櫃穴もありますが、これは必ず耳際同様眞鍮の線が嵌入されてある様に思はれます。又耳際と切羽臺外側の線の中間、鐺の表の右手に蝶とか雲とか又紋様と云ふ様なものを透したものがありますが、紋様の内でも甲冑師にある櫻、梅等はなく輪達の様なものをよく

見ます。而して此透しにも區劃線が嵌入されてあるものでありまして、透しの形式は全然鎌倉鐺にあるものと同圖同様の共通點があります、併し透しのある物より古い物が古い様に思はれます。此据紋の應仁鐺には形ちの大小の差のあるものは先づないと申してもよい様で、大抵同様の大きさのものであります。又此種のものには稍時代の後れたるもの、様に思はれるものでも、他の金屬を混用したのを見ません。應仁の三種の内では此据紋の様式が最も古い様に思はれます、それで模様幼稚なる細工の蕪雜なる點は、即ち時代の古い事を物語るものではありますまいか、前項鎌倉鐺に於て時代に差異のある様に申しましたのも全く之れが爲めであります。第四圖に此据紋の寫眞がありますから御參照下さい。

次は線模様でありますが、之れは何としたものか形狀に於て据紋とは一致を缺いて居りまして、圓形の板鐺の形式ののを見ませんが、多くは長手の撫角形土手耳であります。撫角形にも角の餘分に丸いのと丸くないのがあります。之れには耳際に線のあるのを見ませんが、切羽臺の外側には線のあるものとなないものがあります。土手耳の中は廣く、線は平の凹所より耳の両面まで据紋の如く嵌入されて居りますが、耳にはないのが普通であります。模様は水の如く又繩の如くで何の模様であるか解り兼ねるもので、此線模様の内には眞鍮と素銅の線とを混用したのもあります。

土手耳は平より一倍位の高さであります。此種のもは概ね脇指用と思はれる小の鐺でありまして大抵片櫃があります。それから此種のもは應仁と云ふよりは寧ろ平安城象嵌に屬する様のもが多いのは時代の後れる爲めではあるまいかと思はれます。私は不幸にして未だ大形のものを見せないので、或は此感を深くする様になりましたのかも知れません。それから水に鴛鴦の圖のある鐺を和田先生は應仁鐺として愛藏して居られましたが、圖様が繪畫化して居ります點より申しますと、寧ろ平安城象嵌の初期に入るべきものかと考へられます。

點の象嵌は線模様を反し總べてが据紋に類し、形狀も眞の丸形で、厚さは据紋よりは猶ほ薄く一分位のものが多くあります、耳も丸耳でありますが耳際には線の區劃はなく、切羽臺の外側に眞丸形の一線を嵌入し、其外側と耳との間に點々相連なつて四側位象嵌されて居ります處は宛然兜の星の如く見えます。古きものは點の大きさ及配列が揃はぬものが多い様に思はれます。此點象嵌には形の上に大小種々ありますが、二寸六七分位の眞丸形を多く見まして、夫れには片櫃のあるものが最も多く、又表中心穴の右手の稍々上部に透しのあるものが多くあります。此透しは据紋と共通した紋様が多いもので、此透しの周圍には眞鍮の線が嵌入してあります。而して此點象嵌はかなり古くより稱美されたものと見へまして、此頃早乙女家久作在銘の模造鐺を見ましたが、點の製作及

配列が著しく器用に見へますのは、作者時代の關係で又己むを得ぬもの様に考へられました。

此應仁鐔も亦た在銘のないもので作者の名を知るに由ないものであります。昔日の江戸に於ては鐔に應仁と云ふ稱呼はないのであります、之れは上方即ち京阪地方で使つた名稱と思はれます。時代に於ても現物に因りますと、古いものは其年代が猶ほ一層以前とも思はれ、若い物は余程時代が後れる様に考へられます、正確の事が判明致し兼ねます事を遺憾に思ひます。以上申しました様に三種の應仁鐔中では据紋の様式が最も古く、點象嵌之れに次ぎ、線模様又之れに次ぎ、續いて平安城象嵌に傳來されたと見る事が最も至當の様に思はれます。

それから應仁鐔の地鐵も亦た鎌倉鐔の如く、如何に手入れを致しましても光澤の出ないものであります。地には樋目を打つたものでありますか、凸凹があまゝりして稍々粗雑なる様に見えます。之れは或は甲冑師作の様に鍛錬したものに、象嵌をなす事は頗る難事でありますので、上鐵の燒きを戻して象嵌した結果ではあるまいかと考へられます。只だ不思議に思ひます事は、同種のものと言來云はれて居ります鎌倉鐔と圖様に於て一致して居らぬ事で、鎌倉に見ます唐山水は應仁には全然ないのであります、又紋様の透しに就ても、鎌倉には櫻花の紋様が甲冑師に共通して居るものを往々見るのであります、應仁には櫻花の紋様はない様に思はれるのであります。

第五 平安城象嵌 (第六圖参照)

金工略誌には過度時代(西暦一五七三年乃至一六〇二年)の内に

『平安城象嵌鐔。應仁鐔漸く轉化して平安城象嵌鐔と爲り据紋と平象嵌とを併用し素銅黃銅の外金銀を用ひ又透彫をも併用するに至れり且始めて其工人の銘を刻むに至りぬ其作風と銘とに三種あり

甲、銘に平安城と刻めるものは應仁鐔よりも厚くして且稍小なり耳に圓味あり据紋象嵌多くして平象嵌は比較的少く黃銅、素銅の外に金銀を用ひ且つ其模様は山水、人物、動物等をも彫るに至れり多く見る所の銘は略左の如し

平安城住政重、平安城住宗利、平安住住重光、平安城住信光、平安城住重幸、平安城住忠正、平安城住正則、平安城住長吉。

乙、銘に山城住と刻めるものは平象嵌多く且つ角耳なり其銘左の如し

山城國住吉長、山城國住長吉、山城國住吉久、山城國住政重、山城國住吉家、山城國住貞

次、山城國住正秀、山城國住盛重。

二〇

是れに由り考ふるに此の種の鐶工には京師に住したるものと山城國內に住したるものとありしこと明かなりとす』

以上の如くありまして、次いで丙として與四郎鐶がありますが、當稿にては此次即ち第六に與四郎を掲ぐる事になつて居りますので茲には省きました。

さて應仁鐶の傳統を、平安城象嵌に遺されたといふ事は何等疑ひないものでありますが、平安城象嵌の製作に就きましては略誌にもある如く大別して据紋と平象嵌の二様があり、又其構圖に就きましては應仁の紋様のものが著しく圖様化した事でありませう。時代の進化と共に單純のものが複雑になります事は今も昔も同じ事でありまして、形状、大小、厚薄等も種々多様になり、又手法製作にも据紋、平象嵌、線模様等も併用する様になり、金屬に於ても金、銀、黃銅、素銅、山金等を併用したるものも尠なくないのであります。殊に名人名作のない平安城象嵌に於きましては、標的とすべき作品がないので、之れが平安城象嵌の原則であるとして御話し致し兼ます事を遺憾とします、故に現存鐶に就て其説明を掲げまして、平安城象嵌と稱する物の概略を御會得願ひます事が最も捷徑の様に考へられます。平安城象嵌の時代に就いて和田先生は、應仁（即ち西曆一四六七年）

に後れる約百年の天正元年（西曆一五七三年）乃至慶長七年（西曆一六〇二年）の間と斷定されたのでありますが、私は平安城象嵌の始めはそれより猶ほ七八十年前で、應仁鐶に追まつて居る様に考へられますと同時に、平安城象嵌の後期に屬するものは慶長七年以後までも繼續した様に考へて居ります。而して此一派より出で、轉化したものに名工金家あり、又正阿彌、理忠も亦た假令此一派より出ないとしても之れを参照した事には疑ひなく、又肥後甚五の如きも此派に屬するものではなくとも、共通點のある事は争はれぬ事實であります。而して此平安城一派には在銘も稀れにはありませふが、矢張り無銘のものが多いのであります。尤も先年某先生が平安城長吉在銘の唐山水模様鐶に、文明年號のある物を御所持になり拜見した事がありました。何分昔の事で正確に眞偽の別が出来なかつた時代の私としては、それが果して良かつたかどうかとも記憶して居らぬ事は眞に遺憾でありまして、他日再び拜見の折もあらばと楽しみに致して居ります。和田先生は平安城住とあるは京師に住し、山城國住とあるは市外の住居の様に御斷定になりましたが、之れは如何でありませふか、而して平安城の肩書のあるものと山城國の肩書のあるもので同名のもの、即ち略誌の内にも長吉と政重の二人がありますが、之れは勿論同人の様に考へられます。又先日平安城住吉長銘の

二一

二二

鐔を見ましたが、之れも略誌の内にある山城國住吉長と同一人である様に思はれます。さて之れより現物の説明に移ります。先づ略誌の圖録とも云ふべき裝劔金工圖譜の寫眞の内にある平安城象嵌鐔より始めます。

一鐵、長手丸形、手厚、真鍮及素銅象嵌、蛇籠に浪の鐔には、柳に枯木の圖を配し、象嵌は据紋と平象嵌とを併用してあります。之れには往久作の銘があります。

一鐵、丸形、柳に蛇籠及浪の圖の小鐔には生ぶの片櫃があり、真鍮据紋で寧ろ色繪の様に思はれますもので、平安城住重光在銘でありますが、之れも稍々長手丸形で厚手であります。

一鐵、長手丸形、地に凹凸があり、生ぶの片櫃のある小鐔で、唐人物の彫があり、銀と真鍮を色繪の如く併用して居り、銘の平安城住忠正の文字は頗る古雅なるものであります。

一鐵、稍々長手丸形で、生ぶの片櫃のある小鐔に、真鍮と素銅とを平象嵌にした、枝菊の圖のものには平安城住長吉の銘があつて、耳際を布袋腹の様に落してあります。

一鐵、撫角形、厚手、生ぶの兩櫃のある刀鐔には、撫角形の隅になる四方に雲形を透し、真鍮据紋にて獅子に牡丹の圖がありまして耳も透し際も肉をもちて居ります。之れは山城西陣住貞次の在銘であります。

一鐵、眞丸形、真鍮据紋で栗穗に鶉の圖の兩櫃の刀鐔には、耳際と兩櫃に線の區割が嵌入されてあり、大形の割合には薄手であります。之れは無銘でありますが圖様が著しく繪畫化して精巧でありますので、或は平安城と云ふよりは加賀象嵌の部に入るものかも知れません。兩櫃の穴も亦た著しく丸くなつて居ります。

裝劔金工圖譜にあるものは以上の通りであります。之れより私の所藏して居ります中で参考となるべきもの二三に就て説明致します。

一鐵、木瓜形、真鍮据紋で、圖様は表左右に牡丹獅子、上に紅葉に鹿、下方に竹に虎が居り、裏は上方に竹に虎、左右及下の三方は牡丹獅子の圖でありまして、生ぶの片櫃があり、木瓜の入り込みが頗る深く、厚さは一分六厘で、縦二寸五分五厘、横二寸四分五厘の小鐔であります。之れは無銘であります。平安城象嵌の参考として良いものであります。

一鐵、眞丸形、土手耳。真鍮線模様様の平象嵌で耳に劍繫ぎの模様あり、平の表に雲と流れに水草、裏は鳳凰と雷紋及唐草がありますが、今は殆んど毛彫のみが遺つて居り象嵌は極く僅かになつて居ります。之れも無銘であります。大體から申しますと應仁の線模様様の参考になるものの様に考へられます。併し耳の土手耳の丸肉が勝れて居り又圖様も進化して居る様に思はれますから、

或は甲冑師の下地に後に象嵌されたものではあるまいかとの疑ひがありますが、假令後象嵌としても平安城平象嵌より若い時代のものではないと思はれるものであります、而して之れは直径三寸一分五厘の眞丸形でありまして、耳の厚さは一分四厘、平の厚さは九厘位であります。

一 鐵、眞丸形、上下に梅花の地透しの模様あり、其左右は短冊形二個鑿きを遺して地透しとなし、短冊形の内に眞鍮平象嵌にて表裏に「とし越へてまたこゆへきと思ひさやいのちなりけりさよの中山」の和歌を嵌入し、他の短冊二枚の表裏には高山、松風、青山、山人等の文字が嵌入されて居りまして、生ぶの片櫃があり、耳は角耳小肉で、直径二寸八分弱の眞の丸で、厚さは一分三厘あります。

一 鐵、眞丸形、丸耳の板鏢に櫻花と木瓜の丸紋三個を、眞鍮を丸形に嵌入して透し彫となし、平は表裏及耳迄眞鍮平象嵌にて藻の様な又唐草の様なものゝ所狭き迄にあります、而して製作の手法萬端は後の興四郎其儘であります、時代が相當に古く或は之れ等が興四郎の前提となつたものではないかと思はれますものであります。此鏢には木瓜形の片櫃がありますが、之れは勿論後にあけられたものであります。又此鏢は直径三寸二分半、厚さ一分三厘あります、之れも亦た無銘であります。

一 鐵、丸形、丸耳で、左右なまこ透し、眞鍮と素銅の平象嵌で菊水の模様があり、又透しの内は素銅で埋めて浪の彫がありますが、之れは勿論後に入れられたものであります。これは縦が二寸七分半、横二寸六分半、厚さが一分五厘あります。

一 鐵、丸形、丸耳で、同じ鐵と赤銅とを据紋にして頗る高肉に雲龍を彫刻し金を以て配色してあります。之れは縦二寸四分五厘、横二寸三分、厚さは一分五厘で、紋の最も高い所は三分あります。而して兩櫃があります。此鏢は無銘でありますが古來平安城と云はれて居るものであります。而して製作の手法其他も以上掲げました平安城象嵌とは相異して居るものであります、平安城も後代になりますと此の如きものに變化したのでありますから、茲に掲げました次第であります。

其他記憶をたどりまして三四點申上げ様と思ひます。先づ國寶として加賀の白山神社にあります前田利家公佩刀の大小に懸けられて居る鏢は、左の二枚であります。

一 鐵、丸形、土手耳で、左右なまこ透し、平より耳に懸かり眞鍮と素銅の据紋で百足の模様があります、之れは長手丸形で耳は相當厚い様に覺へて居ります。

一 鐵、丸形、車透し、丸耳に眞鍮据紋で技菊の模様のある片櫃の小鏢。之れも稍々長手丸であつた様に覺へて居ります。

以上貳鐔は之れ亦た無銘でありますが、此鐔の付いて居る大小は其昔前田利家公が犬千代時代彼の桶狭間の戦に指されたものといふ由緒があるものであります。此外に

一 鐵、撫角形、眞鍮据紋、枝菊模様、片櫃の小鐔。長手で相當厚いもので之れも無銘であります。
 一 鐵、撫角形、眞鍮と素銅据紋の葛摸様の片櫃小鐔。前掲技菊の圖のものと全く同形同様のもので、之れも亦た無銘であります。

一 鐵、眞丸形、土手耳で、平に眞鍮据紋で梅樹に竹があり、耳に平象嵌で唐草の模様のある片櫃小鐔。之れも無銘でありますが、或る時代には据紋と平象嵌とを併用したといふ参考になります。
 一 鐵、撫角形、土手耳で、平に松竹梅の眞鍮据紋ある片櫃小鐔。之れも無銘でありますが、相當古い様に思はれますものであります。

一 鐵、菊形、眞鍮据紋で、桐紋と太公望が山を背にし釣りを垂れて居る圖様の刀鐔がありました
 が、相當厚いものであります。

一 鐵、菊形、眞鍮紋透し、眞鍮及銀の平象嵌で葉唐草のある片櫃脇指鐔。これは平安城住吉長在銘でありましたが、總べて奥四郎の形式のものであります。

一 鐵、撫角形の板鐔に、眞鍮据紋で人形を配列した様な珍圖のもの。これは平安城重光の在銘であ

りましてかなり厚手のものであります。

以上掲載したものは多くは普通見る處のものとは相異したものであります、之れで統計を取る
 と云ふ事も如何かと思はれますが、假りに統計を取つて見ますと、形に於て眞丸形五枚、夫れに近
 い丸形二枚、長手丸形六枚、撫角形五枚、菊形二枚、木瓜形一枚で、在銘は丸形に多く、板鐔で丸
 耳が最も多く、眞鍮の据紋も亦た多く、平象嵌には眞鍮と素銅とを併用したものが多くいのでありま
 して、刀鐔が十枚、小鐔が十一枚であります、而して大の鐔と小の鐔と何れが多くあるかと云ひま
 すと、小の方を多く見る様に思はれます。又在銘よりは無銘の物が著るしく多いのであります、又何
 れが古いかと云ふ事も全く解り兼ねるのであります、應仁の關係より考察致しますと、据紋より平
 象嵌となりそれから漸次色繪の様な手法となつた様で、又模様にも紋様より圖様となり漸次繪
 畫化した様に思はれるのであります。平安城象嵌は前後通じて約百年位の命脈があつた様に考へら
 れますが、正確な事は猶ほ皆様と共に研究しまして、他日確定するの日に樂しみに致し度と思ひ
 ます。作者銘は略誌にある外前記「往久」銘を追加致して置きます。而して此中著名の作工は平安
 城長吉であります。刀工にも同名のものがありますが、或は刀工の子孫が鐔工となつたのではない

かとも思はれます。

第六 與四郎 (第七圖參照)

和田先生は此與四郎鐔を平安城象嵌の一種として同派に入れて説明されました、勿論之れは至當の事ではありますが、昔日江戸時代に於きましては與四郎と云ふ名稱は最も著名なもので、眞鍮象嵌は皆與四郎と云はれた程でありましたから、其因襲より與四郎と云ふ一派を引離して爰に出しました譯であります。先づ例の金工略誌與四郎の部を抄録致しますと、平安城象嵌鐔の項に

『丙、與四郎鐔と稱するものは即ち山城住鐔工小池與四郎を祖とせるものにして本期の末に起り後に加賀に移住せり其作圓鐔多く木瓜形稀なり板鐔、圓耳にして黄銅を以て紋、唐草等の平象嵌を施せり銘に小池與四郎和泉守直正とあり又是れと同一の作にして筑州住永盛、國平等の銘あるものあり蓋し其門弟か』

以上の如くあります。又徳川時代慶長八年(西暦一六〇三)以降、加賀鐔工の項に

『(一)、與四郎式の象嵌鐔工

此種の象嵌鐔は與四郎を除く外皆無銘にして未だ加賀作の在銘を見ず其平安城若くは京師作象嵌鐔と異なるは角耳なるに在り與四郎の如く紋を専らとせずして唐草、草花の象嵌多く主として黄銅を用ひ稀に素銅及銀を交へ地鐵不良にして良作尠し』

以上の如くあります。近來は京與四郎又加賀與四郎等の名稱がありまして、其異なる最要點は丸耳と角耳とで別けられて居りますが、昔日に於ては與四郎と云へば皆加賀と思つて居りましたのであります。小池與四郎在銘のものに國名を切り添へた物はないので、現今の研究者に云はすれば、與四郎は果して京師居住の人で晩年加賀に移住した工匠と斷定する譯には參り兼ねると云はれるかも知れませんが、残念ながら之れに對して正確なる證據となるべきものは未だ見當らないのであります。又近來小池與四郎と和泉守直正とは同一人でないとの説もあります、之れ等も猶ほ一層研究を進めまして正確に極めねばならぬ問題と思はれます。

さて與四郎の時代に就きましては和田先生と御同感で足利末期の工匠と思ひます。猶ほ與四郎は加賀の鍔象嵌師より出た者との一説もありますが、之れは矢張り平安城象嵌より傳來されたもので、其手法に則とも鍔師が與四郎式の象嵌を創始したと見る方が宜しき様に考へられます。與四郎の作風としては略誌にもある如く鐵地丸形の物が多く、而して此丸形のものには概ね眞丸形、丸耳

で、板鐺に丸形の穴を繋ぎて圓形を作り、其穴の中に眞鍮を入れ、櫻花、木瓜、花菱、桔梗、三ツ柏等の紋を透し彫りなし、其紋以外の地は眞鍮平象嵌にて葉唐草の模様を所狭き迄嵌入してあります、之れが多くある與四郎の様式でありまして、大さは大の鐺より小の鐺が多く、兩櫃もあり又片櫃もありますが、不思議に思はれますのは小池與四郎和泉守直正の在銘に、丸形の鐺は少なく、木瓜形が多い様に思はれるのであります、此木瓜形も上下は角張り左右は角のない丸形の形式で、紋様の透し葉唐草の模様は前記の通りであります。與四郎在銘のものは精巧と云ふよりは古雅な趣味あるものであります、後世のものは地鐵の鍛錬もよく、製作も亦た精巧で、眞鍮、素銅又銀を併用して平象嵌にしたものを見ます、此時代になりますと獨り前記紋唐草の様式のみではなく、板鐺に蕙唐草の圖様又桐唐草の模様等があります、又只今私の手許にあります物に眞丸形、二重菊の圖で、外側の花辨を全部透しになし、内側の花辨を一ツ置きに線と平とを眞鍮象嵌とし、平の眞鍮地に輪の打込みがあり、耳際に線象嵌の區劃がありまして兩櫃がありますが、此櫃穴は正阿彌式の丸いもので、耳は角耳、直徑二寸七分五厘弱の眞丸形、厚さ一分六厘強であります。これは勿論徳川期の物で加州物と見ゆるものであります。猶ほ此與四郎に共通して居りますものに吹寄象嵌と稱する物があります、私の所持して居ります物に鐵、眞丸形（直徑二寸九分五厘弱）、四方に末廣形を透

し、板鐺の四方に眞鍮の据紋で、何だか解らぬ模様がたさつた様に所狭き迄あります、模様が何共解らぬ爲めに吹寄と名を付けられたのかも知れませんが、此鐺には片櫃があり、厚さは一分八厘あります、これは勿論仕入物と稱する物であります、何處で出来た物か解り兼ねます、或は與四郎派に屬する後代の物か又正阿彌派に屬する物か、勿論徳川期元録頃の物と思はれますが、眞鍮を用ひてありますので筆の序に茲に出しました。又與四郎に共通した製作の物に筑州住永盛又國平等の銘のある事は、金工略誌にある如くであります、此他に紋唐草の同形同様の鐺に、備前岡山住三郎太夫又は三郎大輔の在銘物を往々見ます。之れには大の鐺もあり又小鐺もありますが、之れも丸耳で全然與四郎在銘と酷似して居りまして、時代も略ぼ同時代と思はれますが、之れには丸形のみで木瓜形を見ません、猶ほ此三郎太夫在銘で、鐵地に桐と鳳凰の圖を眞鍮平象嵌にした小柄を見ます。此三郎太夫は與四郎に由縁のあるものか但しは無縁のものか、之れも他日研究を要するものであります。徳川期に入りまして以來の京都には、此種の鐺工はない様に思はれます、之れは畢竟其工人が加賀に移住した結果と考へられますが、此加賀に移住した與四郎象嵌が、加賀象嵌に傳來されたのであります。

第七 金家 (第八、九、十、十一圖參照)

金工略誌に

『從來鐔の裝飾は紋様のなりしに金家一派新に興りて、地鐵に繪畫的圖按を高彫することを創めたり圓形又は木瓜形の板鐔にして、耳は多く鋤返しとし、地鐵鍛鍊共に良好なり、人物山水等を高彫し、且黃銅金銀を以て象嵌を施せり、世多くは大初代及名人初代の二人を區別するに過ぎざれども、其作品に就て考究するに、其余尙二三人の同時、又は相續で輩出せしもの如し、初代金家は即ち、創意者にして絶世の名工なり、其作を観るに大形の圓鐔にして、耳は鋤返し地鐵鍛鍊共に甲冑師の良作に比すべく、且樋目を存し人物等を高彫せり、圖按は僧雪舟の下繪なりと云ふ、城州伏見住金家(城州の代りに山城國とせるものあり)と銘し、又多少の象嵌を施せり、圖按は簡單にして高尙なる作とす、只壹面にのみ彫刻し裏面は無地にして樋目あるものあり、初代金家は應仁鐔工より進化したるものならんと推考せらる。

二代金家は初代に比すれば地鐵厚く毫も甲冑師作に類せず、圓形又は木瓜形にして表面に精密なる山水人物等を高彫し且黃銅、金、銀を以て美麗なる象嵌を施し、裏には簡單なる山水蘆雁又は山に瀟等)を高彫す一見初代よりも精巧なるを以て名人初代の稱あれども初代作の雄大高尙なるに及ばず山城國伏見住と銘せり此初二代の外地鐵の二代よりも尙厚く且全體の製作初二代と異なるものあり又卒塔婆、茄子等を透彫せるものあり銘は二代と同一なれども別人の作と認めらる初代には横孔なく二代以下も片横にして其兩横あるは後代之を穿たるものなり』

以上の如くあります。要するに金家は眞に空前絶後の名人にて、鐔工として第一人者なる事は誰も異議のある筈のない處であります。

金家の作風に就いては右の略誌の内にもある如く、地鐵の鍛鍊は殊に勝れて居りまして、昔より金家の見所として、其音を聞く事が一の條件として居ります。形に於ては丸形、撫角形、及木瓜形等で、其他には拳形と稱する金家獨特の形があります。大初代は丸形、撫角形、木瓜形共に、横縦の寸法が略々同様でありますので丸形は即ち眞丸形であります。名人初代以下は長手になりませんが總べて薄手であり、耳は鋤返し形式で、地は全面樋目仕立であります。圖按は雪舟下繪と古來云ひ傳へられて居るだけに、唐山水仙人等の模様を多く見ます。人物の顔面手足は銀色繪、着衣の模様は金銀の象嵌あり、唐松の葉は多く眞鍮を据紋にし、下草とか浪とかは毛彫にしてあります。又遠山は高肉にして多く塔を配し、鳥居のある場合は大略銅を用ひて居ります。而して不思議に思は

れます事は、此作は刀鐔よりも脇指鐔の多い事であり、尤も脇指鐔と申しましても後世の刀鐔程の大きさで、中にはもつと大形のものもあります。櫃穴はあるものもないものと何れもありませんが、勿論脇指鐔には片櫃のあるもので堅長の穴であります。圖様は現物に就いて知る限りを後に掲げますが、金家の鐔は梁楷、雪舟等の繪畫の小點を見る様な感がありまして余情雅趣に富む事は正さに鐔工中の異彩であります。金家の代數に就きましては種々な説がありまして、東京にて大初代、名人初代と分けますに反し、上方にては初代一人と極めて居ります様に思はれます。現物に就いて考察致しますと、圖様は簡明で高肉にて露はし古雅に見へますものを大初代とし、之れには多く城州伏見住金家と銘が刻まれて居ります。精密なる圖様にて金、銀、眞鍮等の色繪象嵌美事に、彫刻も亦た精巧にして高からざる適度な肉彫で露はしたるものを名人初代とし、之れには山城國伏見住金家といふ銘が多くある様に思はれます。又無色にて卒塔婆等の簡單なる透しをなしたるものには、金家作の三字銘をよく見ますし、稍々厚手の長丸形の鐔で耳を鋤返したもの又は鋤返さぬものに、人物花鳥等肉を低くして象嵌を配し、山城國伏見住金家とあるものがあります。猶ほ二代と稱する鐵仁又鐵人等は余程後代に屬するものと思ひますので茲には省きました。

以上述べました四様のものも果して四人存在致しましたものか又代の續きましたものかも判明致

し兼ねますが、金家鐔上代に於て作風に四種ある事は事實であります。又時代に就きましても、昔は雪舟と同時代にて其下繪により創作したと云はれて居りますが、雪舟は永正三年に八十七歳にて入寂した人で、永正三年は應仁を去る約四十年でありまして、其住所等より考へましても同時代に其下繪を乞ひて作りましたとは断定致し兼ねる様に思はれます。金家の傳系は平安城象嵌より出で、其紋様の圖按を繪畫化したといふ事は事實であります。時代に就いては先年原震吉先生が、桃山時代以前の伏見は一寒村に過ぎざるに、蓋世的の名人が居住し而かも夫れが一世を風靡したとは何とても請取れぬと説かれた事がありました。夫れは全然理由のない事でもない様に考へられますが、又た遽に桃山時代と断定する事も、傳統的に永正、天文頃の人と思ひ込んで居ります私共には直ちに贊成も致し兼ねる様に思はれます。現鐔には一も年號を明記したものがないので、正確に其年代を決定致し兼ねます事は甚だ遺憾に思ひます。故に今後大方各位と共に一層研究を重ねまして他日決定致したいものと思つて居ります。勿論時代が如何に決定致しましても、金家の名工たるは其作品の重器名實たる事には何の關係もないのであります。猶ほ金家に就いて故別後能山先生の談及秋山先生の説の二三を左に掲げて御參考に供します。

別役先生の談

『伏見金家は名工にして世の賞翫する所なり、未だ年號を切りし確實なる物を見ざれども、初代は永正、天文の頃なる可し、或は云ふ、金家鐺の下繪は僧雪舟の筆なりと、確實ならざれども兎に角名工の手に成し事は疑ふ可らざるなり、山水圖の如きは高尙にして凡ならざる所、或は雪舟の下圖なるやも知る可からず』下略

秋山先生の説

『伏見金家の下圖は釋の雪舟なりとは、世に云ひ傳る如く大初代金家に依て初て了解せらるるものあり、此作は時代古く作込、彫、象嵌に至るまで總べて高尙優雅、鐺中の鐺と云ふは此作なるべし、銘は山城國伏見住金家（城州伏見住金家とあるを見たり）。

名人金家と云ふ物あり作込、圖取り等右の金家に比すれば其細工一層密に行届き、大初代に相違する約束ありて自から別人なるを知るを得、然し此作は寧ろ大初代よりも存在する物寡少なり銘は前に同じ。

又金家作の銘を切り右兩人以外のものあり、されども其作込、銘振、同一に見へ小透物多し、強て代敷を立つれば名人初代を二代とし此人を以て三代に當つ可きか。

鐵色赤く白味、耳小打返、樋目深く、模様初代に比して低き物、世傳へて之を二代金家となす、實は四代にはあらざるか、彫一風あり奇に見ゆる點ありて他作に異なるものとす銘は、山城國伏見住金家なり。

以上の四人は作込、彫、銘、小異大同年代も初代と四代の間凡七八十年の相違あるは疑ふべからず。

城州伏見住金家（世に云ふ大初代）角耳小肉、作込薄手、樋目に肉彫をなし、眞鍮、金銀の象嵌をなす、形は丸あり拳形とも見るべき一種の形あり、極めて精工、下畫は僧の雪舟なりと口碑に傳ふ、年代は爲に明記せし物を見ざれども、雪舟は永正三年八十七歳を以て終りたりとあれば、應仁前後に涉る人と見て可ならんか。一新軌軸を出したる名工の一人たるや疑ふ所なし、金銀象嵌も亦此人に至つて多く之を見る、名人金家以後、古正阿彌、埋忠一派に至つて専ら之を用ゆ、（中略）肉彫も亦金家に至つて初めて之を見る、其後二三代連續す』下略

猶ほ秋山先生の説鐺鑑定方の仕様の項に

金家には大初代、名人初代、及二代と唱ふる三人あるが、實は四人ある様に信じます、大初代と云ふ物は作り込長味ある丸形。角味ある丸形、外に一種金家形とも云ふべき特殊の形があります、皆薄手にして地は樋目、耳は角肉、櫃はあるもなきもある、模様は大概淋敷方です、

其内最も偽作の難事らしく見ゆるは長味ある丸形です。

金家は三人とも其真偽を見分くるには鐔の形、地の樋目、耳、模様、櫃穴、銘等であるが、正作を二三度も見て之を記憶すれば多くは見違ひなきものです、名人初代も大體同様で、少し鐵取りが厚く、模様が賑やかで、時代が若からうかと思ふ物を名人初代と云ふ、之には耳の丸いのもあります。

二代と唱ふる物も大體は同一です、前二者に比して唯模様の肉が高く、且つ彫の上に何處か奇に見ゆる點があるのと、樋目も稍自然ならざるのと、鐵色の赤豆色に白味を含むなどは相違の點であります、耳は打返し角の小肉です。

右三人の外に金家作と三字銘を切る人がある、是も前者と粗ぼ似て居るが、多くは小透して肉彫は尠し、此の四人は皆家の字の尻が丸く切る内に角味を持つて居る、他作ならば花押に類する如きものです、此他金家銘の物は随分多いが、此四人の外は年式も下り、作り込みも厚く、樋目も故意に見へ、山の彫などは肉が低くて卑しくなり、大事の家の字も丸で變つて居る下略

次に金家の圖様に就いて、今迄に私が拜見した物を記憶をたどりて左に掲げます。

第八及九圖にあります春日の鐔及達磨の鐔は、大初代傑作中の双絶でありまして、實に大初代の代表であります。春日は撫角にて上部に山と銅の鳥居を露はし、下部に雌雄の鹿を無雜作に並べ、鹿の背の斑紋は銀象嵌とし、裏は左右耳際に無色の紅葉の技を彫刻し、其奇抜飄逸なる圖様は此匠獨特の壇場で、誠に他の追隨をゆるさぬ氣味があります。此鐔は昔は何處に傳來された物かは存じませんが、維新前安政の頃私の祖父が秘藏して居りまして、其頃近火にて類焼の災に遇ひ、而かも丸焼けになりました節も、此鐔だけは手より離さず共に避難したと云ふ歴史付で、維新後明治二十年頃北岡文兵衛氏の懇望により御譲り致しましたが、其後私が取出しまして清田直先生に御願ひ致したものであります、其時は代金百參拾圓で明治三十二年頃と記憶して居ります。清田先生歿後細川侯爵家の御藏となりました。

又第九圖の達磨は丸形の脇指鐔で、表面の右に面壁の半身像いかめしく、無色にて只だ耳環に金の配色かあるのみで、裏も全然無地でありますが、夫れが却つて余情があり正さに九年の面影を想像される様に思はれまして、大初代金家の面目躍如たる様に考へられます。此鐔も先代即ち祖父が土屋少將に御願ひ致しましたのを、後年和田先生が五百金を投じて手に入れられ、其後古河家の御藏となりましたものであります、大初代の寫眞に此名物代表作を共に掲載するの事の出来ました

事は誠に光榮の至りで、茲に御愛藏二家に敬意を表し厚く御禮を申し上げたいと思ひます。

又第十及十一圖には、名人初代の代表とも云ふべき張果老、と樓閣人物とを掲ぐる様になりまし
た事は、是れ正さに錦上花を添ゆると云ふ次第であります。張果老は木瓜形、赤銅覆輪で、表は枯
木に人物其下に山道に瓢箪があり、左の上に雁が三羽居り、人物の顔面と手は銀で着衣に銀象嵌が
あります、裏は上に雁が三羽、下に舟の中釣人物で、肉彫に浪の毛彫が配されて居ります。樓閣人
物は表の上と左に樓閣、右の上に立樹、其下に三人の人物が立つて居り、一人は眞鍮の据紋、二人
は顔面銀にて着衣に金銀象嵌があり、裏は左に立樹、其下に二羽の雁を配し、右に芦が鋤出してあ
り、形は撫角形で耳に赤銅の覆輪があります。

猶ほ此外に左の名鐘數枚も掲ぐる事になりました。

一鐵拳形牛引人物の圖

一鐵拳形毘沙門天の圖

一鐵拳形橋上釣人物の圖

一鐵撫角形猿猴に水月の圖

一鐵拳形野晒の圖

一鐵拳形 石塔透し

此以外知つて居る物を申し上げますと左の如くであります。

一鐵木瓜形半引の圖、之れは仙人の半引であります。

一山水釣人物の圖は數枚ありまして、舟中釣人物と岩上釣人物等の圖があり、形も丸形、木瓜形、
拳形共にある様に思はれます。

一猿猴の圖も數枚ありまして、皆枯木を配し下に水月があり、猿猴が水中の月を取る圖であります
が、猿猴を木の上に置きたると、木の枝より下がりたるとの二様あります。之れも丸形、撫角形、
拳形等あります。

一野晒の圖も拳形の外に木瓜形で五輪の塔を配し、其塔に高砂の文字を金象嵌になしたる名人初代
と見ゆるものがあります。

一破瓢燈籠の圖

一龍頭船の圖

一松下船人物の圖

一月下船人物の圖

一唐松仙人の圖

一六韜三略の圖

一柴舟の圖

一梅花の圖

一 三日月に兎の圖

一 薄に狐の圖

一 寒山の圖

一 茄子の圖

一 木賊刈の圖

一 蘆雁の圖

一 福祿壽の圖

一 愛宕の飛脚の圖

一 熊谷熟盛の圖

一 猶ほ此外にも見たものは随分多くある様に思はれますが、正確な記憶を缺いて居りますので略します。右の内最後の熊谷熟盛の鐔は名人初代の壓巻とも云ふべき名品で、他に比類のない圖様であります。撫角形表右手の上部に山上松の立樹あり、松の葉は極めて精密に真鍮象嵌を施し、山の下に馬上の熊谷が扇を上げて居る圖で、鎧武者には金銀の色繪あり、又鐔の下部は過半銀を入れ立浪を丁寧彫刻し、其中央に馬乗の熟盛を顯はし、之れも金銀色繪で頗る優美艶麗なる鐔であります。仔細に見ますと、老人と若武者の容態顔面等を美事に彫り分けてあります點など、實に用意周到とも云ふべきものであります。又裏は御座船を顯はし山を配してありますが、曾て某會で此鐔を見られた故今村先生及故別役先生は、共に此鐔の浪の形は後藤榮乘に手傳はせた様思はれる、と云はれた程精巧なる作であります。

金家鐔が名高くなりましたのは何時の頃でありますか正確に解り兼ねますが、相當古い頃より賞翫され自然其價格の高値でありました事も事實であります。天保十年に田中一賀が著はしました金工鐔寄の内にも「世上一統に是を好む價貴き事無類なり」とありますが、其流行につれて偽物贋作の多い事も比類ない様に思はれます。古くは上方にては月山喜六と云ふ者偽物を作り、之に續いて仕入物が盛んに作られたものであります。金家の偽物と思はれますものは、其多くは京阪地方にて作られたものであります。彼の有名な橋辨慶の圖の鐔は未だ實物を拜見致しませんが、上方仕入れの同圖の鐔は屢々拜見致しました、全體上方仕入れでも亦た他處の偽物でも、真正正銘の金家とは全然似ないと申してもよい位に懸隔のあるものであります。勿論圖様とか形状とかは同様であります。其何處かに懸隔のあるのが名作と偽物との相違で、又己むを得ない處であります。江戸時代に金家の真正で圖様の淋しい鐔に、東龍齋清壽が人物其他を補いまして賑やかな圖様になした鐔があると云ふ事は、先輩より聞いた事がありますが、どんな鐔が夫れであるか今判明しないのは、まことに遺憾の事ではありますが、他日判明する時もあらむと其日を期待致して居る次第であります。

第八 信家 (第十二、十三、十四圖參照)

第八は鐔工として最も有名なる信家の順番であります。例により金工略誌を抄録致しますと、第二期、足利時代(西暦一、四二八年乃至一、五七三年)の内にありまして

『信家銘の鐔は甲冑師作の古鐔と全然其趣を異にす、其異なる點を舉れば(一)甲冑師作よりも厚きこと二倍已上なると、(二)彫刻及透し等全く其意匠を異にせるとに在り、只甲冑師作と認むべきは數枚の鐵板を合せて鍛錬したることす。』

信家鐔は圓形又は木瓜形にして厚し、耳は多く鋤返し且骨を露はせり、板鐔多きに居れど透鐔もなきに非ず、其模様は龜甲形、文字、草花等を彫りたるもの多し、地鐵皆相同じけれど模様、刀法及銘は必しも同一ならずして數人の作者ありしものたること疑を容れず、秋山氏の研究に依れば其銘に(一)甲冑銘即ち信家が甲冑に銘せると同一なるもの、(二)放れ銘、(三)肉太き銘、(四)之と字體を同くして肉細き銘、(五)同字體にして鑿澁りたるもの、(六)同字體にして人と言との中間に一點を加へたるもの等區別ありと云ふ、其著く異なるは甲冑銘と他の銘との相違に在り、是に由りて考ふるに甲冑銘は信家自身の正作にして、其他は同一の工場に於て同一の地鐵を用ひたる數人の製作に成れるものに非ざるか、古來正作と認められしものに於て此相違あるは、徳川時代に於て既に公認せられたる事實にして、信家は即ち此種の鐔の總稱

と認むるを妥當とす、此他藝州信家と稱する類似の作あり、正作よりも厚くして毛彫太し、蓋し同名にして藝州に居住せる別人とす(尙加賀、小田原等に信家と銘せるものあれども拙作なるを以て特記するの價值なし)。

信家鐔は徳川時代に於て大に尊重せられき、而して鐔工としての信家は一代にして絶えて繼承者なし、其門弟に信秋、信貞等あれども後期の人なるを以て茲に記さず』

以上の如くあります、猶ほ第三期、過度時代(西暦一、六〇二年乃至一、五七三年)の内に左の如くあります。

『信家派、信家は前代に絶えて後繼者なく其門人と稱する信秋、信貞等の作風は信家に類するもの少けれども佳作あり、又織田信長の抱鐔工と稱する山吉及法安は俱に信家に有縁のものなるべけれども詳ならず』

以上の如く信家一派の事が記されてあります、信家は明珍家十七代の當主であります故其系圖を調べますと

十七代、左近將監信家上州稚水又、甲州府中住
水正、享祿、弘治、大永、天文の頃

初安家後ち信家と改む大隅と云ひ又覺意入道と號す

以上の如くありまして、傳説によりますと明珍家が武田晴信公に召されて甲州府中に移住と共に

に「信」の名字を賜はり信家と改名したと云はれ、又信玄公の有名なる諏訪法性の兜は信家の作と云はれて居ります、信家の鐔作に就きましては昔日は金家と共に双壁とし、本邦鐔作の代表として尊重されたものであります、作風に就きましては前記略誌中にある如く、其以前の甲冑師作とは全然一致しない物で全く獨創の新天地を開いたものであります、鐔は著しく厚手になり形状に於ては木瓜形最も多く木瓜形の内にても葉の入り方の多いもの、入りの少ない角木瓜の如きもの、上下は角強り左右は丸くとりたるもの等があります、耳を鋤返しに如く深くとりたると、打返しに少ないもの等があり、又全く耳を打ち返さないものも稀に見ます、丸形は眞丸形と長丸形の二種あります、丸形は多く耳を打返さない様に思はれます、又八ツ木瓜形も稀にあります、耳には鐵骨のあるもので、多分にあるものと多分のないものとあります、又龜甲を耳に鑿いで彫りましたものと破れ龜甲に間を置いて彫りましたものがあります。板鐔で平には龜甲、阿彌陀鐔、蔓朝貝、蔓瓢箪、文字、菊の打込、海草、桐唐草、等の毛彫があるものが多いのであります、稀には高肉に彫り上げたものもあります、放れ牛、櫻花、松葉、等も見た事があります、中には露を金銀で象嵌したものもあり、之は後に加工されたものと思はれます、斧、鉞、松葉等を小透しにしたものは却て風情があまりまして面白く思ひます、又全然地透しにしましたものも稀にあります。

以上の如く其以前簡單の物が多し時に、複雑な面かも紋様が漸く圖様化した意匠により作られた鐔が、世上の好評を博して一般を風靡した事は無理ならぬ様に考へられます。鐔が著しく厚手になりました事は武用の必要に迫られた結果だと云はれた人もあります。鐔の鐵鑄の仕上げに就きましては、鐔の兩面一體に槌目を打ち焼手腐らしと云ふ手法によりましたので、なめらかのものはなく小さき凸凹がある様に見へまして、これが益々風情を増して居ります、大きさに就きましては大小共にありますが割合いに小の鐔が多い様に思はれます、作風の上に兜銘と稱する物と鐔銘と稱するものとの二種あります、兜銘と唱へます物は一名放れ銘と稱しまして、銘の字が細整で堅てに長い書體で、鐔の彫刻も細整で美しいが弱い感じがします、昔日に於ては之れが信家の正作と云はれたもので、此作でなければ高價には賣れなかつたと承はりました、他の一種の鐔銘と稱するものは、信家の字體も太と鑿にて横廣に切られて居り、又彫刻も太と鑿にて頗る豪壯の感がありまして武張りて頑固に見えます、此作風が却て理想に合致する様に思はれます故か、現今では此鐔銘の方が珍重される様になりましたが、之れは畢竟昔日珍重された兜銘には偽物が多いと云はれた結果かとも考へられます。大別すれば以上の兜銘と鐔銘の二種でありますが、金工略誌の内にもある如く同種異様のものが數様ある事も事實であります、大略異なるものは略誌に畫されて居ります

が、其以外に銘字の上に三の字を切り添へた「三信家」があります、之れ等は皆手法作風等は同一のものでありますが、個性の相異で各特殊の所があります、而して此事に就ては一々説明で明らかにする事は困難の様に思はれますが、結局以上の兜銘と鐔銘の作品に數種の類似品があると云ふ次第であります、それで夫れが偽作ではなく各個性を發揮してよく出来て居りますので、昔より信家には弟子が數人ありて、各自鐔作をなして銘を切り出したものにて、信家は宛かも細工場の名なりしに依り、同種異様の鐔があるのだと公認されて居りますが、果して此解釋が良いかどうかは他日の研究に譲らねばならぬ様に考へられます。猶ほ信家に就きましては、鐔の作者の信家と甲冑師即ち明珍信家と同人であるか又別人であるかと云ふ事も、かなり以前より問題とされて居ります、要點は甲冑にある銘と鐔にある所謂兜銘とは一致して居らぬこと、又甲冑中多く兜にある銘は明珍信家として其下に花押があり、永正又は大永の年號ある物を多く見ますが、鐔の銘には明珍を冠したるもの、又花押年號等を切り添えた物は絶へて見た事がないのでありまして、之れ等が疑問の要點と思はれるのでありますが、之れ亦た他日の研究を要する次第であります。

信家中に藝州住と切り添へた物があります、これは作風手法とも全然一致して居ります。金工略誌にもある如く、鐔は一層厚手で彫刻が太と鑿であります、彼の秋山先生舊藏の竹に虎の圖の鐔

は、藝州信家の白眉で良き参考品であります、該鐔は鐵撫角形の厚手で、耳は打返さずに、竹に虎の毛彫でありますが、之れは太と鑿とも云ひ兼ねるものであります。又藝州信家銘で鐵撫角左右に澤瀉を透した良い鐔を見た事があります、之れも耳は打返してなく一見信家とは思はれぬものであります。而して藝州信家なるものは其弟子の一人が藝州に移住したものではないかと思はれます。それから此藝州信家の二字銘の鐔は、甲州信家として立派に通用したのみならず、名物として珍重された内にも混同致して居る様に考へられるのであります、之れに反して弟子と稱する信秋、信貞等には信家に似た物は尠ないのであります。金工略誌の圖譜を調べて見ますと、

一 信貞作鐵木瓜形耳打返し蔓瓢箪の毛彫丸と丁子の透しある鐔

此鐔は信貞としては傑作で、よく信家の作風が寫されて居りますが、信家と比較しましては問題にならぬ程の差があります。

一 信吉作鐵木瓜形左右梅花透し鐔

此鐔にある地の凸凹の様態は天法に酷似して居りまして、信家の地紋とは雲泥千里の相違があります、此外に信吉作鐵不二木瓜形に山の文字を透した鐔を見た事がありますが、耳を自然に薄く取つてありまして、良い鐔ではありましたが信家には似て居らぬものであります。

一 信秋作鐵丸形具の肉彫透しの鐔
一 桑名住信時作鐵眞丸形梅木透しの鐔

信秋は耳を薄手になし、平に肉がありまして理忠に似て居りました。

信時は梅木を影に透した手法は面白く出来て居りましたがこれも信家には似ぬものであります。以上の如く弟子作は多く似て居らぬもので、之れは手法作風が六ツヶ敷い故でありますか、或は時勢が信家に共鳴しなかつた爲めか、頗る面白い現象であります。

信家鐔は舊幕時代文化文政頃は頗る珍重されましたが、石黒政美が摸した物を見た事があり又莊司直勝、塚田秀鏡の師の直鏡等は盛んに之れを摸作したものであります、併し時代と箇性の相違で摸作と云ふよりは、信家ねらひの一種の物となりりました。以上で信家及其一派の大様が盡されたのであります、之より故神田氏及秋山先生の信家の説を掲げて御参考に供します。

故神田息胤氏の説

『鐵細工に於ては明珍信家を以て最とす（信家作の甲冑等近時歐洲人の稱讃せること普ねく人の知れるが如し）、信家が甲冑を製作するや矢玉を防護せんの工風を凝らし、其厚さ僅か五厘に過ぎざる薄鐵を鍛ふるに、表面は剛鐵を用ゐる裏面は録鐵を用ゐ、矢玉を受る時は表剛鐵にて之

を受け止め、而して裏の録鐵にてべこりと窪みて留まる發明を爲したりと、抑此の如く技術者の意を竭し慮を究めしこと、後世に於て唯射利を事とする徒の絶て及ぶべきところにあらず』

秋山先生の信家の鐔に就きての疑問

『裝劍奇賞等に云ふ、明珍信家は元上州白井住明珍十七代安家なりしが、甲州の武田晴信に招かれて甲州に移住し、信の一字を晴信より賜はりて茲に信家と改めたりとあり、然れども甲冑に安家と銘のある物は未だ嘗で見聞せず、是れ第一の疑問なり。

鐔に明珍信家作と甲冑の如く銘ある物を見ず、是れ第二の疑問なり。

其作り込、楯目、耳際の肉置、鐵骨等は皆一樣に見ゆれども、彫に至ては各鑿の強弱あり、且つ銘も亦鑿の弱さあり強さあり、透しに異同あり、龜甲に差別あり、又銘に文字の大小ありて、其の區別判然として體に四五人以上の作なるが如くなるに、一人なりと傳ふは如何、是れ第三の疑問なり。

信家同名四五人以上ありとすれば、其時代に前後なきは如何、是れ第四の疑問なり。右四五種中一人を正作として其他は皆偽作なりとすれば、又一つの疑問を生ず、他なし凡そ贋作たる物は必ず其正作に偽せんとするの要件あるものなり、然るに信家の鐔には各持前の特技

を顯はして毫も偽せんとせし跡を留めず、假令ば甲の彫と乙の銘と混交してある等の事なし、是れ第五の疑問なり。

維新前信家と比肩して最も高價に賣買せられたる伏見の金家、奈良の安親に比すれば、其の數甚だ多きが如し、信家は甲冑師の名家なれば鑲は必ず間作なるべきに、此の如く數多きは何ぞ、是れ第六の疑問なり。

信家鑲の世に賞美せらるるに至りし年代は何時頃なりしや、若し當初よりとすれば、武田、織田、豊臣、徳川其の他公伯の佩用或は賞與の鑲もある可きなるに、未だ此の事ありしを見聞せず、是れ第七の疑問なり。

其の後も世に流行せし時に至ては各藩にも多少所持せしものありつらん、就中江戸の如きは一人にして六十餘枚を愛藏せしものありと傳ふ、實に盛なりといふべし、是れ第八の疑問なり。甲冑師明珍信家と鑲の信家とは全く別人にあらざるか、是れ第九の疑問なり。

若し別人なりとすれば何處の人なりしや、世に甲州信家と唱ふるものの中、鑿の濼りたる彫を爲し銘を大鑿に切りたる物には多く燕州信家あり、此の信家と甲州信家と大に似たる點あるが如し、兩者は何等の關係なきか、是れ第十の疑問なり。

信家の鑲は以上の如く多くの疑問を存すれども、其の物は眞に鑲中の王にして華實兼備の物と信ず、是に於てか敢て先覺の教示を乞ふ。

附言武田信玄は大永元辛巳年に生れ天正元癸酉四月十二日五十三歳にて卒せり、然るに明珍信家作兜の銘に、永正八年より天文十九年まで四十年間のものあることは明珍系圖に出でたり、且つ子が實見せしものにも亦永正年號の物少からず、然るに永正八年は信玄の生れし大永元年より十一年前に當れば、其の信玄より偏諱を賜はりしといふ説は兎角龜毛といふべきなり』

又秋山先生鑲鑑定方の仕様といふ講話の内に、

『信家は作り込も時代も同一で、正作と見へて銘の異なる物が五六種あるが、其様に細別せず只二つに區別すれば宜いと思ふ、一つは放れ銘と唱ふる物にて細鑿の銘を切り、彫も又手弱く小透しを爲したるもの、之は昔し大に流行したる銘で偽物は之に多く、一つは大鑿に銘を切つて手強き彫を爲したる物。』

眞贋を見るには第一時代、鑲の形、作り込、槌目、耳、耳の骨、銘等です、槌目のなき物、耳の丸き物、銘のない物もあるが、之は總べての控を見覺へた人には能く分る。同作には火に入れてなましたるもの、鍛鐵の儘なる物、三枚合せと、合せ目の見へぬとがあるが、此作程

見覺へ安い物はない、畢竟名人の腕前は他人の眞似得ざる物と見へる、そこで實物の眞相はどうであるかと云へば、二種共鐵は三枚合せで、地は磨きもあるが多くは一種の槌目で、平坦に耳際深く取り急に耳を打返した様に見へ、文字、龜甲、唐草を太髪に彫物小透しを爲す、二種の區別は氣を付けて見るべきである、之には藝州信家も混つて居るが、此作は切羽臺より耳際まで同じ肉置きで、銘も彫も髪が濫つて見へるから自づから分明である。

此作の偽物の中では尾張物が一番酷似して居るから、餘程注意しないと握むことがあるが、能々細見すれば彫も違ひ鐵の扱ひ鐵骨の工合も異なつて居る、其他は直胤初め諸國に偽作者はあるが、正作を見手本となし得ざりし物と見へ、偽物が偽物にならず想像的の偽物なれば一笑に値ひするに過ぎない』

又秋山先生雜感一束中に左の一節あり

『鐔に信家と銘があると、一概に甲州信家と連して彼是眞僞の批判に及ぶは笑ふべき事ではないか、信家には甲州信家、上州信家、藝州信家、加州信家、筑州信家、正阿彌信家、赤坂信家、此の外二三の正作が有る様なれ共、國所不分明の故を以て是等は皆甲州の偽物視せられつゝあるなり、正宗とある共信家とある共、銘故に皆々上手とは言ふを得ざる可し、銘に醉ふは

未熟にあらずや』と

猶ほ秋山先生の説は澤山にあります、信家鐔の木瓜形と耳の作り込みは最も賞讃される處でありまして、事實優秀なるものであります。信家の拓本を印刷した信家集があります、之れは昔日中村覺太夫氏が所藏品及び其頃著名な信家の拓本集でありまして、名物名品が網羅されて居ります。

第九 山吉 (第十五、十六圖参照)

金工略誌第三期過度時代(西曆一五七三年乃至一六〇二年)の内に

『山吉(山坂吉兵衛)は尾張の住人にして其作を觀るに圓鐔又は木瓜形にして其耳は鋤返したるもの或は骨を現はせるものあり板鐔に少許の透あるもの及透鐔あり

初代の作は信家に酷似せるもの少からず、初代のみ本期に屬し二代以下は後期に屬す、其銘を山吉、山吉兵又稀に山坂吉兵と刻せり』

又第四期徳川時代(西曆一六〇三年乃至現今)の内に

『山吉派は前期より引續き本期に於ても數代あり、其作皆な初代より劣ると雖も作風には著しき變化なし、又櫻山吉と稱するものは銘宇山吉の外に櫻花を刻せり、元祿の頃の人にして第四

代なり、又天保年間尾張鑢工にして則亮と稱するものあり能く山吉を摸す其他偽作甚多し』

以上の如くあります。而して山吉は甲州信家の門にして織田信長の抱工となりたる人と云ふ傳説がありますが、其作風が信家によく似たものがあります。此匠の作鑢は木瓜形が最も多く、其木瓜の形は寫真にある如き物で他の形式の木瓜は少ない様に思はれ、耳も初代は寫真の如き打返しのない物が多い様であります。又板鑢に小透しをなし地はむらのある滑かなものも多く、阿彌陀鑢のあるものもありますが、之れは二代以下に多い様であります。又初代の山坂吉兵衛のものは、寫真にある長手丸形の形式の物が多く木瓜形は稀の様に思はれます。總じて初代は長手に見ゆる形ちが多く、耳も打返しが少ない様でありますが、二代は立てが詰まり即ち眞丸形で、耳も打返し、地に阿彌陀鑢又は地模様のある物が多く木瓜形其他の形式は少ない様に思はれます。三代以下は形が長手になる物が多い様で、耳も打返し物が少なくなる様に思はれますが、何分山吉は名高い作者であります故に偽物が非常に多數ありまして、殊に能く出來た偽物が混同して居るので、其區別が非常に六ツケ敷く、昔日にては江戸にある山吉は殆んど偽物と云はれた程であります。猶ほ此山吉の初代二代の相異に就いては金森一吉君が名古屋に永年御居柱になりました關係上、多年に亘りて研究された原稿を御諒解を得て茲に掲載致す事になりましたので、一層の光彩を添へました。これは偏

へに金森先生の御高庇による處と茲に感謝の意を表します。さて金森君の山吉に就ての説は左の如くであります。

『尾張には古來鑢に付いての名工は随分澤山にあります、古くは金山鑢を初め山吉一派、法安、貞廣、柳生鑢、其他戸田、福井、大野、福重、時計助左衛門、近くは則亮、有定、等數へ上ぐれば仲々澤山な數であります。是等名工の中でも最も優れたるは山坂吉兵一派であります、山吉一派は初代より數代連なり各作柄に殊別の點があります、而しながら初二代の作柄に至りては古來名古屋にては確固たる區別が付いて居りません様です、從て現今にても色々の説が出て居ります。私は多年山吉初二代に就て（三代櫻山吉以下は他日に譲る）これが初代であらうと思はるる作柄と、二代であらうと思はるる作柄とを左の如く區別して見ました。

初二代作柄の相違の點

初代

- 一、鐵色赤紫色を呈するもの多し。
- 二、肌とろりとして滑かに見ゆるもの多し。
- 三、板鑢にして地透し多く、耳を打ち返すも更に角を打ち潰す癖あり。

- 四、耳の鐵骨及び平の鐵骨は緩かなるもの多し。
五、室穴兩方共に同形のもの多し。

二代

- 一、鐵色黒ずむもの多し。
二、肌の「しむ」烈しくちりちりとするもの多し。
三、耳打ち返し多く打ち返しの角烈しきもの多し。
四、耳及び平共に鐵骨烈しく見事に出でたるもの多し。
五、一方は小柄室、一方は笄室と規則通りのもの多し。

初代の銘

山古兵

二代の銘

山古兵

初代の銘。山の立の第一劃は棒を引きたる如き筆法、又第二劃の曲りの角の筆法に一定の癖あり、猶ほ一劃の下と二劃の横線とは付いて居り、吉の口意外に巾廣く、一の中と同様位にて其

兩端より垂下線を初めたる如く、兵の字の一劃と二劃の間隔少ざく狭まし。

二代の銘。山の第一劃は點を打ちたる如く、其下部は第二劃の横線に付かず、第二劃は前掲の如く屈曲強く丸味ありて一定の筆法あり、吉は口狭く少ざく、圖の如く一の兩端を残し内に垂下線あり、兵の一劃二劃の間隔巾廣に間明く、恰も蟹の爪の如き感あり。

以上の如き差點ある事を知りました、而しながら果して私の考へが正しいか否かは先輩諸氏の教へを俟つことと致します。

金森君の山吉初二代差異の説明は以上の通りであります、中々委はしいもので多年御研究の御苦心も偲ばれ敬服の外ない次第であります。

又秋山先生の山吉に就いての御高話を二三茲に掲げ御參考に供します。

『山吉兵の鐔に二種あり、一は地鐵さらけ白色ををぶ、一は地鐵緻密にして黑色を帯ぶ、此の黑色を帯ぶる物は甲冑師物に類す、皆板鐔にして小透あり』

『山吉兵の内、金山同様の鐵骨ありて有縁と見ゆる物あれども其縁のあるや否やを知らず、但山吉の良品は恰も甲州信家と見紛ふ迄に、地鐵の緻密なる合せ目の耳に露出する物あり、之れ山吉鐔の最良品とす』

『山吉兵も信家の鐔に似たる後ち作の阿彌陀鐘物は信家でも及ばぬが、一體の上から云ふと到底信家とは比較になる作でない、法安も同様であるが山吉兵と法安とは伯仲の作柄である』

『明珍信家、山吉兵、早乙女家真などの類は、仕入物よりは夫に立優りたる偽物多し、吟味を怠るべからず、過日木瓜の瓢箪毛彫の鐔を見たが、持主の珍重品と見えて兩儀は金理となり居れ共、時代若く耳の折返し拙なく毛彫にも片切さへ交りて偽作たることを自白する物なれ共、是等は偽物中の上物にして難關を越え來る物なる可し、怖るべき物は偽作者の技量にあり』

『又傳なくして似たるもの内に山吉兵と法安、又理忠一派と二代山吉』

以上は秋山先生の御高話の内より抜萃したものでありますが、能く味はいますと面白味もあり又研究者の爲め益になる事が多い様に思はれます。猶ほ山吉と法安に就いての有益な御高話があります、法安を主眼として説かれた様に思はれますので、次の法安の項に掲載致す事にしました。

第十 法安 (第十九、二十、二十一及二十二圖参照)

金工略誌の内第三期過度時代(西曆一五七三年乃至一六〇三年)の項に

『法安は元尾州住にして後ち淺野侯に従ひて甲州紀州等に移り次て廣島に轉ぜり、其初代のみ

本期に屬し山吉と同時代とす、作風變化多く或は山吉に類似せるもの即ち信家有縁のものと認むべきあり又毫も是に類せざるあり、板鐔に山水等を低く彫刻せるもの即ち是なり、角耳にして往々骨を現はせり。

從來裝劍具の彫刻に用ひし意匠は和漢様のみ止まりしが、織田信長の時に至り葡國の「イエズイット」教徒を保護したる結果、歐洲風の圖様始めて我國に應用せらるるに至れり、彼の法安作無銘寺内泊爵所藏の鐵鐔に「Arcade」の文字透彫したるものあり、蓋し洋字を鐔に用ひたる濫觴ならん』

又金工略誌の内第四期徳川時代(西曆一六〇三乃至現今)の項に

『法安派は本期に至りて益繁榮し且其作風を變じて腐蝕彫象嵌等を用ゆるに至れり、又其三、四、五代の作中には同家に保存せらるる圖譜に就て看るに、初二代の作と異り彼の献上鐔に類するものなり、即ち主として圓形角耳の透し鐔にして、稀には木瓜又は隅切角形及板鐔あり、徑約二寸五分厚さ一分五厘内外なり、圖按は八橋、水車、桐、櫻、等の草花の透にして之に金銀の象嵌を施し(縁をも象嵌したるものあり)たる頗る美麗なるものなり、是等の作品は多く江戸よりの注文に基き領主の命に依り製作したるものなり、是等の作は正保より享保頃までの

間に成りしものなるを以て、彼の献上鐺中には法安の作も混ずるものと知るべし』

『法安の家系に就ては、同家に傳ふるものと藝藩通志第十とにあり、通志には左の記事あり
(摘録)

初代法安は川口三郎右衛門法安と稱し清洲に住し鍛冶を業とせり、淺野侯尙甲斐に在りし時其招に應じて嗣子久次を伴ひ同地に移れり、刀盤に法安久次と銘を刻めるは元父子の名なりしかど遂に法安を以て其家號とせり、元和年中領主に從ひ紀伊より廣島に移住し邸宅俸祿を給せられたり云々

法安家系譜 (法安家傳)

- 初代 川口三郎右衛門法安
- 二代 法安久次 佐久間要右衛門久次、初代の嫡女へ養子、生國尾州、甲州に於て淺野彈正に召抱らる、鐵鑄製作を命ぜられ命に依り法安久次と稱し、子孫も亦此稱を唱ふ、後紀州に隨從す。
- 三代 法安久次 州へ移り鍛冶町に邸宅を給せられ、鑄工を専務とす、正保の頃。
- 四代 法安久次 三代の嫡男、大久保加賀守、酒井小平治、其他多數の注文に依り鑄を作る。
- 五代 法安久次 四代の嫡男、享保二年土佐守の鑄を作る。
- 六代 法安所右衛門 五代の嫡男、不身持の爲め隱居せしめらる。

- 七代 法安新三郎 所右衛門の弟、船鍛冶を命ぜらる。
 - 八代 法安久次 七代の姪へ法安六右衛門の二男を婿養子とす、船鍛冶を命ぜらる。
 - 九代 法安兵次 寛政十二年六月廿七日相續、船鍛冶を命ぜらる。
 - 十代 法安久次 九代の男、寛政十一年十二月廿四日相續、船仕事勤務を命ぜらる。
 - 十一代 法安久次 十代の男、慶應元年九月廿日相續、武器役所小銃製造掛を命ぜらる。
- 此法安家に傳ふる系譜に依れば、法安家は鍛冶師にして鑄を製作したるは初代より五代までならんかと推想せらる、六代以後は淺野家の船鍛冶となり、最近に於ては小銃の製造に從事したるものなり、又此系譜に依ると各代法安久次と稱し他の稱なきものの如し彼の兼信等の銘は蓋し分派の工匠ならん』

以上和田先生の御説の如く、法安鐺は正系として五代ありまして、六代以後は業を變じて居りま
す。又系譜中十代の相續年號は文政の誤記にあらずやと思はれます。作風に就いて申しますと、寫
眞に掲載致しました様に其古き物即ち初二代と思はれます鑄に二様あります、一は鐵地丸形稍々長
手にて角耳小肉、地肌には何處かに必ず柰目肌があり、之れに車透しの如きものをなし、或は透し
のない板鐺に薄肉の鋤出し彫をなし、燒手磨らしと稱する一種の手法にて模様を朦朧と露はし、耳

及平に鐵骨を現はしたる和田先生の所謂腐蝕彫と稱する物は、法安獨特の檀場とも云ふべき作風であります。信家、山吉の仕上げにも焼手を用ひて居りますが、法安程に甚敷はありません。信家有縁と思はれるのは此作風の物でありますが、和田先生は腐蝕彫は後代の作と御断定になり、山水等を低く彫刻したる物を信家と似ざる作風と書かれましたが、併し是等の作に焼手のない物はない様に考へられます。又他の作風は、是も寫真にある如く鐵地木瓜形の板鐺に耳を誠に細く打返したる手際は眞に非凡と思はれる物で、耳は角の小肉であります。此鐺の平は無地の磨きと思はれますが、或は聊か焼手を用ひられてあるかも知れませんが、信家には似ないが全然甲冑師作と背かれる物であります。銘の字體は共に法安の二字が切羽臺の右にあります、大體書風も似て居りますが仔細に調べますと多少の相異點がある様に思はれます。

以上二様の鐺に就いて初二代を考察して見ますと、初代は信家の門と云ふ説が近來重きをなして居る様に思はれますので、即ち信家に似た處の焼手腐らしの前記の物を初代とし、甲冑師類似の後記の物を二代作とする方が良い様に思はれます。勿論是れは私の考察に過ぎませんので、或は共に初二代の内の一人の前作と後作であるかも知れませんが、兎に角法安の初二代と思はれます作品に、前記の二様の作風のある事に御注意を願ひまして、初二代の作風決定に一層の御研究を願ひ度

いと思ひます。二様の作風は第廿一及廿二圖に就て御覽下さい、三代以下の作風は、和田先生の御説にもある如く正阿彌化した物が多く、鐵地丸形角耳小肉に葛の葉を透し彫になし、是れに金銀の象嵌をなした殊の外よい鐺を見た事がありました。銘は法安久次とありまして全然正阿彌式の物でありました。又法安兼信銘の鐵地丸形耳赤銅覆輪で平に赤銅素銅、及金の据紋をなしたる鳳凰の圖の鐺は、一代の傑作と思はれる物で、据紋は平安城象嵌を聯想されますが、鐺の様式は正阿彌風であります。法安初代作と背かれます名品は和田先生の説にある寺内家の英字透しの鐺と、犬養先生舊藏の法安在銘鐵丸形の車透して耳に兎と大根の模様ある鐺とであります。是れは信家の名鐺に同様の物がありまして殆んど失れに迫まり、又簡性の現はれもありません。又只一ッ不思議に思はれます事は、山吉は木瓜形が多く法安は丸形が多い事であり、これは即ち簡性の相異で得意を異に致した事と思はれ面白い様に考へられます。

山吉を初め法安其他の尾張鐺に就いては、參考品を借覽すると同時に之れが寫眞を頂き、又種々御高説を拜聴御教示に預り、得る處の尠少なざりし事を此際金森一吉先生に陳謝し敬意を表します。

猶ほ法安の研究に就て秋山先生の御高説壹貳を左に御紹介致し御參考に供します。

六六

『初代法安と山吉とは師弟か同門か父子兄弟か其關係を知るを得ざれども、有縁の作に違いないとは毎も主張する處であるが、此頃珍敷法安の車形厚手角耳、耳の平に兎を彫りたる如何にも時代も味合もよい鐔を見た、鳥渡見ると信家然も出來良き物と見えるが、細見すれば少しく丸に長みがある、肉置鐵骨も違ふ、山吉かと思れば透しに丸味があり鐵骨も違ふ、且つ山吉よりは上品である、法安と聞いた時には首を捻つたが、成程銘もよい裏の耳に持前の木工目もある、實にほしき鐔である。之を見て思出だすは、曾て宗伯爵の鐔會に主人の出品せられたる丸肉車形の鐔で、織田右府より畫工土佐家の女に賜はりて家に傳へ、其後弟子の住吉家に傳へ、維新後宗伯の手に入りたりと云ふ其鐔に似て居る事である、其鐔は金山と云はれたれ共鐵も骨も全然違つて居る、山吉兵の上出來物であらふと言つた處が、同席の人等に痛く笑はれたが、此在銘物を見て初めて合點せられた心地がする、山吉兵は織田家の鍛冶と云ふ法安も亦さる緣由ある人なるべし。

壯年の頃甲陽軍鑑を一讀したるに、織田右府の霸業の初め武田信玄に好しみを通じ、其歡心を失はざらん事を勉むる間に於て、彼を籠絡する様の竊に心中に感ぜらるる事あり、説が少しく奇に涉るのみならず著書にも口碑にも見聞せぬ事ながら、鐔其物の上より考へると、法安、山吉兵の兩人は尾張より甲州に立越へ、信家を師とし鍛冶の法を習得したるものにはあらざるか、初代法安初代山吉には二様の作りあり、一つは兩人共に信家に似て少しく器用に見へ、之は甲州物と尾張物の差であるかも知れぬが、三人の鐔を見て武織二氏の交通ありしを思ふと然か思はるるなり。

一日友人を訪問すると、時に法安は紀州の人と云ひ傳へて居るが藝州にもあるよとの話であつた、常ならばそうかと聞捨にするのだが、法安は山吉兵同様織田家有縁の人で、尾張物であらうと思説を發表したる後ちの今日であるから、何んとなく深く感じて一考する事となつたが、妙と云ふは爰だ、此話を味はうと却つて愚説に力を興える一助となる様に思はれて來た、何んとなれば、法安初二代時代の紀州は、維新前の如き徳川御三家の一つを以て鳴り渡りたる紀州ではない、慶長六年より元和五年までは織豊二家に縁故深き淺野家の治下であつた、其後淺野家は藝州に國替になり移られたものと見へる、若し法安が紀州出生の國附の鍛冶ならば、僅に十八年間奉公したる新主の國替に、住慣れたる父母の國を見捨て藝州までも隨行したると云ふはちと解し得ざる様である、之を尾濃邊の人で織田家の鍛冶とすれば、淺野家との關係も深く

六七

なりて、右府薨去後淺野家に隨行して紀州にも藝州までも移轉したと云ふが解し安いではあるまいか、淺野家も尾州より興りたる家筋であるから、或は其以前より如何なる關係のありたるものかも知れぬとまで聯想せらるるなり。

去三十八年(明治)十二月十九日、之は或方の御愛藏品ですと示されたる鐔は、長丸に角味ある耳厚すき下げ羅馬字八字を地透しにしたる珍らしき物であつたが、同席の先輩は輒く之は甲冑師物だと答へられたが、鐵の緻密に似ず軟らかく見ゆる點はとも明珍や早乙女物の類でないから、唯不同意だ考へが付かぬと答へた事であつたが、滿二年を經過して此項在銘法安の鐔を見て、之も法安なる可しと心付き請ふて再見し、彼の在銘鐔と見くらべたるに、鐵の緻密にして軟かく鐵目の露出し居るも信家山吉にあらず、鐵に赤味を帯び居るなどの諸點はどう見ても法安獨特の特徴で、同作に間違なき事が明瞭したは近頃の快事である。扱法安の前説織田家有縁の鍛冶と云ふを主張する一つの援助は、去十一年に太政官本局に於て翻譯せられたる日本西教史と云ふものである。之を披見するに、其五六章に永祿八年八月二日織田信長が、天主教の宣教師「フロエト」が京師の亂を避けて泉州堺に退居しありたるを、和田惟政の口入により再び京師に招致し、其後數年間待遇を厚くし交情の親密なりし事實を明記してある。此頃の

京師附近には和田兄弟伊賀守惟政 飛騨守某、高山右近、内藤如安、九州には大友宗麟、四國には長曾我部元親の如きを初めとして、其他數拾萬人の受洗者のありし事を列記して居る。由來織田氏の政略を見るに西國に輸入する舶來品を得ては之を東北に贈り、東北に産する物を得ては之を四國九州に贈り、自己に其國産を得て之を治下に徵發したるが如く想像せしむる、之れ織田氏の慣手段である、されば抱鍛冶法安をして羅馬字を以て軍神の名を彫刻せしめて、是等を時の贈物と爲す等の事は推察するに難からず、縦し無之とするも奉教者の多き注文者なしとせんや、同書中永祿十二年正月織田右府歸國の間を窺ひ、三好の三黨京師に攻め上る、和田惟政打つて之に勝つ、右府は五萬の大兵を引卒して直に上京、和田氏に面會して戦功を賞し一刀を與へて曰く、今日此刀を帶ぶる者は君にあらずして世に又其人ある可からずと、之慣例の籠絡手段にあらずるなきか、此羅馬字鐔純然たる宗教文ならざるを以て、耶蘇教禁止中も幸に風浪を免かれ得て僅に存在したる物と思はる、世に流布する處の羅馬字を彫り金銀の布目象嵌を施したる南蠻鐔に比すれば、年代の上にも百數十年古く作り込の上に於ても巧拙同日の談にあらず、實に珍寄の名鐔である、善良の歴史上の參考品である、恐らくは日本中の一品物であらう。六七年前故別後兄が得て愛せられ、後ち故西垣翁に譲りたる無銘無櫃車形の鐔に櫃穴を後ちに

穿ちたる物ありたり、之も今日より考ふれば法安に相違なき物と思ふ、若し西垣兄より譲り受けて愛藏せらるる方あらば、現品を在銘物に引合せ研究せらるるも一興にして又併せて同好者を益する事ならんと信ず、其他一二枚別役兄の遺品中に無銘山吉兵と唱へ其實此法安と思ふ物存在せり。

去廿年中大阪に於て、菊形に兎と三階菱の兩櫃ある小鐔を得て同好者に問ひ試みたるに、尾張風の阿彌陀鐘舌懸が表丈け残り居るを以て、何れも山吉兵ならんとの説なれ共、鐵の緻密にして軟かに見ゆる鐵骨のなきを以て、山吉兵にあらずと獨り二十年間苦しみたる結果、慥に之も法安と極むる事を得ると同時に尾張物と極むる事を得たるは大々的満足である。

法安と銘を切る者は法安、兼信、貞吉、久次の外に二三人あると覺ゆるが、初代法安に紀州と切りて居るを見ず、久次などに似て時代も大差なき様なる紀州の貞命は、法安派らしけれ共法安の二字を切りたる物を未だ見ず、是も法安が代々紀州人でない一證となるかも知れぬ。

終に臨んで一つ思ひ浮ぶることは、凡人間の世を渡る上に於て居處立場と云ふ物が成否の岐路に大々の關係を持つ物である、何々委員と云人にして其實眼識は白雲小僧にも及ばざる人もあるが如しだ、今此山吉兵の鐔と法安鐔とを併せて之を見るに、法安が山吉兵よりも立優り居る

事は論はないが、山吉兵は尾張に居据りて三代にも及び、時の將軍家の御三家の治下に在りたるが故に、何の品格もなき櫻山吉までをも世人が賞翫するに至つたが、法安は尾張を去り紀州に藝州に移轉し御三家の治下を離れたるが故に、貞吉とは如何なる人か久次とは矢張り紀州人かと世には知る人すら無きに至れり、鐔の位列を作るならば法安は慥に山吉兵の上位に据ゆべき物である、又若し紀州に代々住居したらんには、甲州信家をも凌ぐ程の高名家なりしならんと信ず。

法安鐔に二様ある、其内此種の厚出信家風に出来た鐔の地鐵は舶來鐵ではあるまいか、とんと他作に見受けざる鐔である、同好者の教示を願ふ

以上は秋山先生の御高説でありますすが實に尊敬すべき御研究であります。法安が今日の如く元尾州の人にして甲州信家の門に遊び、淺野家に從ひて紀州に行き遂に廣島に連綿として繁榮した事が確實に解りますまでの徑歴には、此の如き傾聽すべき御研究がありました事を忘れてはなりません。而して此内にある車透し兎の鐔は前記犬養先生の名品で、羅馬字の鐔は前記の通り寺内家藏の名鐔であります。尙ほ宗伯舊藏の車透しの鐔は、幸に其寫眞がありますから即ち掲載して御覽に入れます。

第十一 貞廣 (第二十三、二十四圖参照)

全工略誌。第四期、徳川時代 (西暦一六〇三) の内、

『尾張鐔工の項に貞廣は著名なる鐔工にして其初代は初め山吉を師とし後明壽に師事せりと傳ふ果して然るや否や其作多くは長圓形にして角耳なり、板鐔に多少の透あるもの多く且象嵌に巧にして主として金及銅を用ひたり二代の作も初代に類し其銘初代よりも稍小なりと云ふ』

以上の如くあります。此貞廣も二字銘以外の銘を見ませんので銘により初二代を極める事は不能でありますので、只だ傳統的に小銘なるを以て二代とすと定義に随ふより外ないと思はれます。さて其作風より云いますと、山吉類似の物を初代とし理忠風の鐔を二代とする譯であります。作り込は略誌にある如く、板鐔が原則で小透しのある物が多く、丸形の長手に耳の打返しはなく、平を鋤き下げた物が多く、地鐵も焼手仕上げは少なく磨ぎが多い様に思はれます。寫眞に掲載致しました丸形の鐔は、鐵耳に平の鋤下げ部分が真鍮と云ふ珍物であります、之れは真鍮地の鐔の耳に鐵をかぶせた様に思はれまして、其鐵に鍛目が現はれて居る所が面白く蓋し貞廣中の傑作であります。又他の寫眞は鐵地菊形表に籬に菊及鈴蟲、裏に山に馬を鋤出し彫になし焼手仕上げになつて居り、

圖様の繪畫化した初期の物としてよき参考となる物で、殊に其圖様は實に名畫であります。而して此鐔の菊形は貞廣には往々見る處でありますが、唯だ不思議に思はれます事は、山吉に見る木瓜形は貞廣には見ない様に思ふのであります、又貞廣には略誌にもある如く、金銀其他の象嵌もあり、又喰出し鐔にて瓜を繋ぎたる模様は真鍮の据紋のある物を見た事があります、又長丸形にて平を鋤下げ葛を金象嵌にした物は往々見る處であります。秋山先生雜感一東の内に、師弟の名ありて似ざる物に山吉と貞廣とあります。御參考までに茲にこれを記して置きます。

第十二 平安城透 (第二十一、二十二圖参照)

全工略誌鐔工總論の内に

『(上略) 次で足利義教將軍の時代に至り専門鐔工起り平安城に於て透鐔を創作し(下略) 又同誌第二期、足利時代 (西暦一四二八年) の項に

『平安城透鐔

前にも言へる如く鐔は從來板鐔に少許の透彫あるに過ぎざりしが、義教將軍の嗜好に因り始め

て透鐔を製作せしめられき、其形状模様共に優美にして後世の模範となれり、憶ふに意匠家を
して圖案を作らしめ鍛冶の良工を選びて之を製作せしめたるものならむ、茲に至りて始めて専
門の鐔工あるを見る。

透鐔は圓形にして圓耳、兩櫃を有し、櫃孔は稍偏長にして大なり、全面に紋又は草花等を透彫
す、後世他の形状を爲すものあれども其特徴は圓耳と偏長なる櫃孔とに在り、地鐵鍛鍊共に良
好にして工人の銘あることなし。』

又第三期、過度時代(西暦一五七三年)の項に

『平安城透鐔』

平安城透鐔は本期に至りて前代の如き優美なるもの跡を絶ちぬ、蓋し戰國時代に於ける多數の
需用に應ぜんが爲め、京師は勿論各地に於て粗製の透鐔を濫造せる結果、今多く世に流布して
製作地及流派作人等の不明なる透鐔の中、稍古作なるは即ち此種のものに屬す、但し本期に於
ける多數の透鐔には粗製濫造と謂ふべからざるもの亦絶無なるに非ず、就中其京師若くは尾張
にて作られしものには間々佳作あり、然れども毫も平安城透鐔の特徴を存せず、鐔厚くして櫃
孔偏長ならず且角耳のもの多し、左に其主なるものを掲ぐ。』

以上の如く述べて類似鐔なる古萩、尾張透、栃畑の三種を掲げられました。又以上の如き先生一
流の議論を述べられました。其當否は別として平安城透鐔は、足利義教將軍の命に因り作りたる
を起原として居ります事は事實であります。而して其以前には模様を透しましたが、此平安城透し
は模様を残して地を透しましたのは一轉機と申すべきで注意すべき點であります。古きは眞丸形、
丸耳、厚さは一分六七厘位、櫃穴は立長形で、兩櫃共に丸形が多く、稍々時代下ると撫角の如きもの
ありて紋様の地透しより漸次圖様化する傾向あり又之れには兩櫃のもの或は全然櫃穴のなきものも
あります。而して益々時代下るに隨ひ所謂仕入れものと見るべきものがあります、即ち寫真に出し
ました柳に蹴鞠の圖の鐔の如きもの又往々見る菖蒲地透し鐔の如きは之れに屬するもので、耳は角
耳小肉で左右に櫃櫃があり、和田先生の所謂粗製濫造品の部に屬すべきものと思はれます。此等は
寫真掲載の三圖を御照合下さいますと自ら明瞭になる事と思はれます。惜むらくは平安城透しには在館物がない爲め作者を知る由のない事である

す。左に秋山先生の平安城透の御説を二三掲げます

『現物の古く見へる平安城には、丸耳と角耳とがあつて角耳は古萩と唱るものに似たれども二
派ではあるまいと思ふのは皆透しの頭が丸む心持ちがある、櫃穴は太く長い、その末作も又能
く家法を墨守したる物と見へるが、少しく櫃穴の丸くなる物には粗雑なる仕入物も交る。』

平安城透しは四五百年を経たる物と見ゆる物が面白く、彼の古萩鐔と云ふ物も其實防州大内家時代に、平安城の職人が一時下り居たのではなからうかと思はれる、そは今日の萩鐔とは何等の縁故なきを以て然か云ふのです。

丸耳（角耳）角肉、透、作込厚からずして上品なる鐔ありて、年代二百年乃至四五百年の年月を経たる物之を平安城透とす、肥後赤坂其他の透は、是より出たる物或は見學らひ又は模造したる物多からん』

秋山先生の説は以上の如くであります。又松平頼平先生秋霜雜纂の内に左の項があります。

『すかし鐔の事

桂秋齋曰く、太刀の鐔葉に極し物世、後世は色々の形を用ゆ、又打刀の鐔は極て丸鐔の物也、又すかしのある鐔は古來はなし、足利義教將軍物好にて此時より始まるよし、室町家の記に見えたり。

伊勢貞丈曰、室町家の記とは誰人の記歟、なんぞ其文を記さざるやちぼつかなし』

以上の如くあります、御參考までに掲げました。

第十三 古萩（第二十三圖参照）

金工略誌平安城透鐔類品の内に

『古萩鐔。平安城透鐔に類すれども角耳にして兩櫃の孔稍橢圓なり、模様は多く菊花等とす、是れ蓋し平安城より轉化したるものにして山陰地方の作に係れり』

以上の如くありまして、鐵地、眞丸形に菊の花葉を地透しにし、角耳にて兩櫃穴の橢圓なるものを古萩と稱して居ります。古萩鐔と平安城透鐔との相異點は耳と櫃穴であります。而して古萩は概して大形稀にして小鐔多く、古きは薄手にて時代の下るに従ひ次第に厚くなりまして思はれます。此古萩も亦た在銘物なき爲め作者の判明致しません事を遺憾とします。猶ほ此古萩に就きましたは秋山先生に御異議があります様に思はれます、今左に其御説二三を掲げますが、私が先年長州鐔を書きました節第一に此古萩を載せました處、後の長州には何の關係もなき事を纏々御述べになりました末に『古萩鐔の稱呼を確定するには今一層の研究を要すべし。寧ろ姑らく削除せられむ方可ならんか』とありました。又其御説の内に

『土佐人の鐔家は總べて古作を過愛したる傾きあり故に此古萩の名稱も今一層古く見て否な古き物として京物に似るより、應仁の亂を避けて京人の多く大内の治下に入りたるより、同時に鐔

工も彼の地に移住して製作したるべしとて、時代の上より肥後赤阪にあらず、又た京物としては少しく耳の肉に相違あるより、古萩と唱へ出したる物なるべし。

以上の如くあります、又私が菊の花葉の圖以外の物を見ずと書きましたに對し『決して他の模様もなきにあらず』と云はれました。

『古萩鐔の稱は早く耳にする處なれ共、今日に至るまで正敷古萩鐔と可看認名品に出逢はず、今茲に云ふ處の枝菊地透の鐔は、恰も鎌倉鐔を見る如く作込鹿籠模様も亦同じ、野翁は京師の古き仕入鐔と信ず。

壯年の頃、古萩鐔の地鐵は一種の赤味を帯びて居る、之も一つの特徴としての見處であると教へられたが、其人の押形にある古萩鐔の現物を見るに左程赤くもない、平安城透に比較して骸と耳の相違あるのみの物が多く長州鐔には似つきもせぬ物故、此古萩鐔は恐くは平安城の誤傳であらうと主張し來つたが、頃日珍敷一枚の鐔を見た、真丸大形、兩櫃、角耳、小肉に黒き鐵骨の露出したる地鐵緻密、色赤く、桐に鳳凰を肉彫に透し、時代も慥に三百餘年を経たる物である。鐵骨の黒きは金山鐵の緻密なると、色の赤きは初代法安、透の丸肉なるは長州物にも似るが、彫の表裏あるは長州物でもない、雜々書堂に云ふ如く、かな山が石見銀山と極ると此類

が古萩かも知れん、勿論源は平安城に發するを疑がわぬが、矢張尾張物と爲す可きか古萩と定むべき物か、之は後日の問題である』

以上の如くであります、御熱心なる御研究の跡が窺はれまして、眞に敬服の外ない次第であります。

第十四 金山 (第二十四圖参照)

金工略誌第二期足利時代(西曆一四二八年乃至一五七三年)の項に

『金山鐔。信家と略同時代の透鐔にして無銘なる金山鐔あり、其名稱の由りて來る所を詳かにせず(中略)本期中山陰地方の鑛山にて副業として透鐔を製作したることありとは、口碑の傳ふるところなるのみならず、彼の石見銀山中柄畑に於て柄畑鐔を作りたるは事實なるを以て、此金山の名稱も或は石見銀山(刀盤譜には銀山と記載しあり)を意味するものにして、彼の柄畑鐔以前に在りて古萩鐔と均しく該地に於て製作せられしものに非ざるか、更に考證を俟つ(中略)金山鐔は其作風信家に類似せる所あれど、地鐵較々厚く且小鐔多く、角耳にして骨を現はし透模様は簡單にして解すべからざるもの多し』

以上の如くあります。此金山鐺の産地は古來山城物と唱へられて居りますが、其作品より考察しますと平安城透しとは一致點が少なく、寧ろ尾張透、法安等に共通點がある爲め、昔より研究家の中に産地に就てはかなり論議されたものでありまして、秋山先生の御説だけでも相當多くある様であります。御参考として後に同先生の御説二三を掲げますが、近頃に至りまして名古屋市南區新尾頭町所在の金山彦神社の境内に於て作られた事が明瞭となりました、此社は「かね」の神としてかなり古くより崇拜された爲め、其域内に鍛冶屋町を形ちづくり、現今にても鍛鎌等の鍛冶が居るといふ事を、先日金森先生よりも承はりました、それで此鐺は此金山社の域内にて作られた爲め金山鐺と唱へたもので、昔日或る時代には非常に流行した物と見へまして、舊諸侯の御指拜にも懸けられて居るのを屢々拜見致します、只だ不思議に思はれますのは、大形の鐺は至つて稀にて小形の物が殆んど全部を占めて居るといふことでありますが、之れは應永以後脇指が非常に多く作られ、之れに要する小形の鐺の需要が原因をなした結果かとも考へられます。而して其作風は長丸形の厚手の小鐺で、圖様の不可解の透しが多くあり、角耳で耳は鐵骨があり、燒手仕上げの様に思はれる物が多く、地鐵は信家に類し作風は法安の透に似て居りますが、頗る素材で不器用に見へます事は時代の古いのを物語る様に思はれます。それから當に見る金山鐺の多數は先づ信家同時位かと考へられま

すが、これも在銘のものがない爲め作者を知る事の不可能なる事は遺憾でございます。それで鐺の上より考察しますと、此金山も二代乃至數代連續して作製されたものであるまいかと思はれ、又尾張透しとは作風に相違點はありますが、多少は縁がある様にも思はれます。之れより秋山先生の金山説二三を掲げます。

『金山鐺は透鐺の中古き作也、然るに徳川治世の後漸次跡を滅し遂に其末流をも不見に至る、畢竟世の嗜好に適應せざる故か、現存する物亦寡少なり、彼の新田中將の北國猿織田右府の蜻蛉の鐺の如き皆金山なり、惜哉其の所在を詳にせず、今にして本會保存に意を用るずんば名品は逐日散逸皆無に至らん。

角耳、厚手、大透、耳に一種斑文の如き鐵骨の露出するは、作り上り後火に投じ鈍したる如くして、作込疎雑年代凡三百年前後に涉ると思はるる物之れ金山鐺なり、彼の柳生鐺、山吉兵の内、金山同様の鐵骨ありて有縁と見ゆる物あれども、其縁のあるや否を知らず。

彼の金山鐺を見るに、之は金工鐺寄、鑿工譜略には、皆金山は山城國地名なるか姓なるか不知と雖も、世に唱えて珍重とすると記るせり。此金山鐺を熟視し而して新古作の鐺に就て類作を求めて見よ、尾州物以外毫も之に類する物は見出だせんであらう、假に之を古入の説に従がひ

て山城物とせんか、美術發達華奢を極めたる足利時代然かも京都に、一種此風變りの鐔の出でんとは如何にしても解し得べからざる事ではないか、或説に、石見の銀山が昔毛利氏治下に屬したる頃盛に鐔を作くらせた事實が明瞭して居る、金山は即ち之であるとの據ある説もあれ共、中國筋に多く残存すると云ふでもなく、作風の傳はつて居る共見えず、是茲の説も今一考と云はねばなるまい。尾州に金山と唱ふる地名や姓の有る無しも知らぬが、尾張物の内には法安、山吉兵、柳生鐔、信家の偽物に至るまで鐵質及鐵骨の黒光るなどは、同好者が尾張鐵、尾張骨と唱ふる物であつて、金山鐔によく似て居ると思ふ(中略)、後世の類似品を見て金山鐔は尾張物でないか、尾張には一種の古き透鐔が有つたではないかと云ふは無法極はまる様なれ共、確實なる書の傳なき鐔の事なれば、實見上より此疑問を發するも亦同好者の參考と爲さんが爲めなり。

此頃古き金山鐔を得た、之は金山中の古き物にて四五百年を経たる物と見ゆ、金山鐔と唱ふる物の内には三百年位の物と四五百年を経たりと見ゆる物とあり、持込による差にはあらざる可し、此百餘年間に涉る作の國所の知れざるは残念也。大の鐔には五六百年も経たらんと見ゆる甲冑師物もあるが、之には副刀用の小鐔を見ず、小鐔に古き物を求むれば金山以前にあるを見ず後信家には小鐔あれ共金山の古き物に比すれば時代大に下る。

以上秋山先生の御研究を熟讀玩味致しますと、實に眞面目なる御熱心の跡が窺はれまして、唯だ敬服の外ない次第であります、殊に實物上より論じて古來の傳説山城物としての金山を、尾張物と斷定された御眼識には敬服致しました、兎に角斯くの如き經路をたどりまして、遂に今日に於ては尾張國名古屋市金山社領域内に於て作られた事が明瞭となりましたのであります。

第十五 尾張 (第二十五圖參照)

金工略誌の内第三期過度時代(西曆一五七三年)の項に

『尾張透鐔。圓形又は木瓜形にして大きく厚くして中央の肉を鋤きたる如くして角耳なり、地鐵鍛鍊共に良好なり、肥後林派は此派より出てたりと傳ふ』

以上の如くあります。此尾張透しも亦た在銘物の無い物で、爲めに作者の名を知る事の不可能なるは甚だ遺憾に思はれます。時代は最古の鐔は平安城透しの初期と略ぼ同時と見ゆる物で、徳川初期迄も連続した様に思はれ、作風は平安城透しに類して大形大振りの物多く、厚さも亦た厚手になり、耳は角耳で、切羽臺も巾廣に丸くなり、兩轆も亦た巾廣に丸くなり、平安城透しの立長の偏長

の切羽臺及兩轂に對し丸く巾廣の相違があります、形ちは丸形が最も多く、兩木瓜、木瓜等之れに亞ぎますが、他の形のものもあります、圖様は種々ありますが、何の圖か不可解のものが多く、其手法も平安城の細き透して圖様の氣の利いた器用に對し、著しく無器用で從て透しも亦た太とく總て無器用に見へ、畢竟都住居と田舎住居との相違がある様に考へられます、而して地鐵の鍛鍊は頗る良好で鐵色も良いが、平安城よりは赤味がある様に思はれます。因に此一派に清兵衛なる鍛冶が居りまして、夫れの子孫が肥後春日派の頭領林又七であると云ふ傳説があります。

秋山先生の御説二三を抄録致しますと

『(上略)尙ほ肥後物の事は長屋氏著述肥後金工錄に詳らかなり、林家の作に因んで茲に一言附すべき事あり、上述以外連綿たる家系なる如く見ゆる一派の透し鐔あり、時代三四百年に涉る、地鐵緻密にして黒く切羽臺より耳の方に自然に肉を持ち、耳は角にして櫃穴丸く薄からざるものあり、其有縁品を尋ねれば林又七の父清兵衛、祖父源兵衛の作に近し、茲の林家三代は尾州より出ると云ふ、或は此の地方疾くに平安城風の傳流を受けたる者ありて之を製作し、源兵衛清兵衛、又七も亦此の派より出たるにはあらざるか。

(上略)今一つは透鐔である、大體は平安城に似て居るが、厚い耳際に肉を持つて居り、角耳の

小肉で櫃穴も丸味を負びて居る、肥後人の云ふ林源兵衛、清兵衛、又七などはよく似て居る、そこで一つ考へねばならぬは、此林三代が尾州人と極まると、如何にして林一家が透鐔を作る事を習ひ得たかと云ふ事であるが、此一家の按田などでは決してないと信ず、尾張の地と云ふは住古より四通八達の地である故に、家を興したる武士も多く開明の進度も自づから他州に冠たりしなる可し、さあれば鐔の需用の多かりしことも疑ひなし、如此見來たれば、平安城透の法が夙に此國に流傳したりと見るも無理なる解釋にはあらざる可し、右の透鐔は平安城に似て時代も大概三四百年間の物と見ゆる、之れ源兵衛、清兵衛を産み出したる尾張鐔にはあらざるか、新古作に就て類品を求むれば、平安城に似て前述の相違あり、金山に似た點もあれ其模様を初めとして總て作り込の上に進歩の跡灼然たり、若し之を尾張鐔と看認るを得るに至たらば、林三代の尾州より出でたとの説も確乎として容易に之を信ずる事が出来る、見よ此透鐔と林三代との作の相違は、平安城透しと相違するよりも其差極めて少なし。』

秋山先生の説は以上の如くであります、此尾張透しは昔は平安城透の一種として取扱はれて居りました。然るに以上の如き精細なる秋山先生の御研究に基き、今日では尾張透しとして一派をなしたものとりましたのであります。

第十六 理忠 (第二十六、二十七、二十八、二十九圖参照)

金工略誌第二期足利時代(西曆一四二八年)の頃に

『理忠派。此派足利中葉に起りしものなること疑なし、理忠重吉が義滿將軍に仕へて鐔を作りたりとは金工鐔寄に記す所なれど、果して信すべきや否やを詳にせず、然れども無銘の古理忠作中に此時代に屬するものあるを認む』

同志第三期過度時代(西曆一五七三年)の項に

『理忠派。理忠派中最も著明なる明壽は本期の人にして、刀匠として有名なるのみならず鐔工としての技は更に之に優り、金家、信家と並び稱せらるる名工なり、鐔の全形櫃孔の形状象嵌の巧妙共に鐔工の模範たるべきものにして、稍偏長なる圓鐔最も多く中心より周邊に向ひて次第に鋤き下げ、且耳に圓味あり、櫃孔は大ならざる橢圓形にして象嵌は細く且深く嵌入し容易に脱落することなし、通常理忠明壽と銘す、又單に理忠と刻めるものの中明壽作と認めらるるものあり。

二代以下後期に於て連綿として家法を傳ふ其系統左の如し

理忠家系(桑原先生著全工一覽を參照記入したる處あり)

宗近、橋氏諸兄公八世の後胤橋仲達次男仲宗俊に宗近と改む又宗達とも云ふ、梅多田家の元祖從六位上、信濃大掾、長元六年辛酉二月十五日歿、七十歳。

重吉、理忠彦次郎、初重義、足利義滿將軍に仕へ鐔鍔頭を作ると云ふ。

重宗、理忠彦之進、足利義持義教兩將軍に仕ふ、専ら劍を作る。

重近、理忠彦次郎、山城大掾、足利義教將軍に仕ふ。

重久、理忠彦次郎、足利義政義尚兩將軍に仕ふ。

宗重、理忠彦左衛門尉、足利義植義澄兩將軍に仕ふ。

重之、理忠彦右門尉、足利義澄將軍に仕ふ。

重隆、理忠彦次郎、足利義晴義輝義昭三將軍に仕ふ、明欲と號す。

明壽、理忠彦次郎重吉、明壽又鶴峯と號す、父は重隆入道明欲にて其次男なり、重吉十三歳にて靈陽院足利義昭公の近習に召出されて奉仕す、義昭公宇治權島籠城中重隆の嫡子彦五郎重政早世す、依て重吉御暇を願ふと雖ども先達より愛宕山長床坊後住に可被居に相見、然れども理忠家斷絶に及ぶ儀を以て大内左衛尉義秀の取次にて歎き申上るに依り首尾克く御暇を下さる、其節召料の金作りの陣刀を拜領す、重隆重吉を召連れ歸途城郭の樋口の水門より忍出て夜の内に歸宅す、重吉其後秀吉公秀次公へ召出され、後慶長六年六月二十三日秀忠公に京都にて謁す、彫物稀代の名人、鐔又劍をも作る。

明眞、明壽の弟、明壽の男早世に依て嫡家相繼す、彦左衛門家隆後重義と改む、入道して明眞と號す法橋に叙す、秀忠公に召されて江戸に居住すと云ふ。

重長、明眞の男、彦右衛門と稱す。

宗之、彦左衛門

宗茂、七左衛門尉。

重幸、儀左衛門。

重榮、信濃後に頼母。

良久、梅忠權左衛門、京師住、安永の頃。

此系譜は刀匠としての埋忠家系なるを以て固より鑢工として其作なきもの多し、始祖は更なり二代重吉が足利義滿將軍の命に依りて鑢を作れりと云ふの眞否は之を知り難けれど、三代以下八代重隆までは鑢工に非すと認むることを得べし、故に鑢工としての系譜は寧ろ九代明壽を祖とするを穩當とす、此中明壽のみ本期の人にして己下次期の人なるのみならず、在銘の埋忠は皆な次期に屬するを以て茲には只家系を掲ぐるのみ（此家系は新刀辨疑及金工鑢寄に依れるものにして即ち梅忠良久及梅忠宗辰の記せるものなり。』

金工略誌には以上の如くあります、併し之は昔日の系圖尊重時代の書上げに因りましたもので、刀匠としての系圖とありますが、明壽以前の人の作品は刀身にも亦鑢にも在銘品を遺されて居りませんので判明を缺いて居ります。又無銘としても足利中葉と肯かれる埋忠鑢はないと申しても過言ではないと思ひます、只だ明壽同時代或は稍以前かと思はれます無銘鑢を稀に見る位であります。又金工略誌徳川時代の項に

『第四期 徳川時代（西暦一六〇三年）
乃至現今

埋忠派。（一）京理忠派。埋忠は主として京師に於て發達し、地方の分布遠く正阿彌派に及ばず、然れども徳川上代に於ては正阿彌派よりも勢力ありしもの如し。

此派は前期に屬せる明壽の子明眞最も有名にして重義（細字銘）も亦良工なり、其他光忠と銘せるものは黄銅に布目象嵌を以て人物草花等を施し作風朋壽に類せり、此の如き佳作にして其名の何れの書にも見えざるは奇なりと謂ふべし、想ふに明壽、明眞と同年代の人ならん、其れ重長、吉長、重成、宗義等の作稍佳作と稱すべき外復良作あるを見ず、（京正阿彌に屬する作名左の如し但し系圖に有る者は茲に除きたり、又之れにも桑原先生著金工一覽を参照記入せり）
光忠（彦） 壽閑（七十二歳と） 壽齋（天正の頃） 吉長（七左衛門、京西陣住東都へ被召） 彦兵衛入

道(延寶三年十一月歿)七左 宗義(數馬助橋宗義) 義信 友行 重次 重近後代 義光 重光 宗賢 正次(山城國埋忠忠房、唐松達磨真像象) 重春 光重 重政(彦五郎) 正重 忠次 親茂 梶右衛門 宮内重辰(西陣住) 重壽 沈深(嘉吉) 泰貞(嘉慶次) 泰安(長兵衛) 宗辰(三十五代) 元重(慶安寺) 義成 義珍(彦次郎) 求沈(加吉明受) 喜源(三受方) 嘉平次 成光 宗忠(西陣住) 九左(埋忠)

此以外に就受(埋忠加治右衛門)一派あれども時代も後れ、又細工も鐺師よりは金具師と變化し、四分一褶劔の縁頭等を往々見る、故に金工の部に入れ茲には省略致しました。

是等の諸銘には多く西陣住埋忠と添刻せり、又同銘にして數代あるものあり注意を要す。

(二) 其他の埋忠派。京師より各地に移住したる埋忠派少からざれども、正阿彌の如く數代連綿として一派を建たるものは稀をり。

(イ) 奥羽地方 出羽秋田住大森又右衛門と銘せるものは埋忠派なるべし、明壽式の圓形にして其耳及櫃孔とも明壽に酷似せり、素銅に烏銅を以て浪に千鳥を平象嵌せるものあり、明壽有縁の工人なるべし。

(ロ) 關東 江戸住埋忠は後年に至り埋を梅に改む、往々梅に代へて梅花の圖を刻せるものあり、其作は京師と大差なく特徴あるを認めず、此派の作銘左の如し。

重義(武州又は江戸住) 重國(埋忠又四郎、明珍成道門) 政秀(梅忠) 彦兵(江戸、象) 七左(江戸) 友堂(常陸住) 葛莞(埋忠) 數馬助阿人 壽寛(正徳頃)

(ハ) 大阪 作銘左の如し
宗義(播州住橋) 壽寛(正徳頃)

(ニ) 播州 作銘左の如し
重義(播州明石住) 義次(又赤穂住) 義忠(播州) 吉次(播州明石住)

(ホ) 長州 長州にては岡田氏及河治派は埋志一派なれども之れは長州鐺の部に出すに付き茲には略す

(ヘ) 肥前 作銘左の如し
宗武(肥前島原、元禄十六年二月吉日) 明長 吉長 宗長 良榮

(ト) 其他、作銘左の如し
宗久(加州金工藤田圃右衛門埋忠信房弟藤田の家を繼ぐ越中住後藤派)

金工略誌には三期に分けて以上の如くあります。但し作者銘は桑原先生著金工一覽を参照して加へました、流石に埋忠家は鐺工の名家なる故に堂々たる系譜をもち、又明壽の如き一大名匠の出現

によりて一種の風格を作りて一世を風靡し、子孫門葉競ふて其作風を傳へたれども、後世名手の現出なき爲めか遂に漸次時勢に制せられて正阿彌化するに至りたるは惜むべきことであります。

明壽は實に多能なる名工でありまして刀劍を作り、之れに施した額の内流不動の鋤出し彫の妙趣、俱利伽羅龍、素劍、梵字等の精巧、殊に其配置の適合せるは正に後世の模範にして絶妙と推賞すべきであります。刀身付屬の金具も作り其鑑の肉置及地鑑の巧妙等は他に比類ないものであります。縁頭は多くは象嵌の物なれども、稀に地腐れの如き薄肉彫に阿蘭陀革模様の圖様あるものなどを見ます。鐔の作に至りましては古來金家、信家と共に並び稱せらるる物であります。地金に於ては鐵、眞鍮、素銅、赤銅等を用ひ、就中鐵は流石鍛治匠の作とて鍛鍊宜しき得て居ります。又鐵鐔に稀には平に凸凹を作り、耳を打返して堅鐵を自由に取扱つて居ります事は、流石に刀匠の作と肯かれます。此凸凹地の手法は明壽以前の作者と思はれます。光忠鐔の眞鍮鐔には往々見ますものであります。鐵鐔は光忠には見ないもので、此光忠の鐔は金銀の摺付象嵌の物であります。明壽鐔の形狀は丸形が最も多く眞丸形も絶無ではないが至て少なく、長丸形の横縦の差が一分乃至一分五厘ある物が多く、四方が角張りたる丸形も亦た多くあります。木瓜形は角張りたる角木瓜式が多い様に思はれますが概して丸形が多いのであります。耳は角耳小肉が最も多く、又赤銅、四分一等にて覆

輪を施したるもの、又之れに鑑目のある物がありまして如何にも手際が優れて居ります。又耳及耳際の平に雷紋繋ぎの金象嵌の如きは到底他作の企及し難い所で、而かも細線を美事に嵌入してある處は眞に美術の極致であります。鐔の兩平に耳際を巾二分位殘し平を鋤き下げ其處に象嵌をなしたる物、耳際の鋤殘したる處に唐草の毛彫りがあるもの、平に方形を鋤下げ耳の四方より平に懸け唐草を象嵌したるもの、素銅の鐔に赤銅象嵌にて批把、栗の枝、楓榜等の圖を顯はしたる物、眞鍮鐔に赤銅、銀、赤銅等の象嵌にて蔓蔦、葡萄等の圖の物などは往々見る處の物であります。又赤銅兩木瓜形の鐔に金銀象嵌葡萄の圖の結構な物を見た事があります。象嵌は凡て平象嵌であります。而して大體に於ては板鐔に象嵌が多く稀に鐵地に車透しの物があります。鐔の厚さは一分位が多く、兩横は長手の大ならざるものであります。只だ不思議に思ひますのは、短刀に見ます様な瀧不動の鋤出し彫類似の圖様も手法も、鐔の作には反映して居らぬ事であり、或は刀身にある様な彫刻は刀装の金具には不釣合の様に考へられたのではないがとも思はれますが、之れも亦た其時代の風潮で斯くなつたのだとも考へられます。又之れは明壽作の刀身にも鐔にも共通の事であり、銘字に明壽の文字を用いた物は殆ど正眞と思はれ、他の字體の物は皆僞物の様に考へられるのも亦た不思議であります。これは或は習慣的にそんな事に考へられるのかも知れませんから、猶ほ

今後研究を續けて他日どふにか決定致したい様に思ひます。

明眞になりますと大體明壽に似て居りますが、形に於ては猶ほ長手になりますと、先年鐵地に長手丸形にて角張りたる形に方形を鋤下げたる鐔を明壽作として秘藏された物を、私の祖父が見て之れは明眞作と云ひましたので、明壽作との相違を尋ねました處、長手に見ゆる故で明壽は堅が詰まりて見ゆる處が見所と申した事があります。

重義或は七左には赤銅鐔に耳を次第に薄くなし、耳を小玉縁を取り平の耳よりに肉のある物が往々あります、之れを布袋腹と申します、即ち肉置の名稱であります、之れには平に堅に時雨鐔と稱する鐔目があり、之れに七寶とか分銅とか云ふ様な物の小透しのある物、左右すあま透し又海鼠透しの様な大透しにしたもの、平の地に鐔目の代りに石目地にしたものがあります。又鐵地長丸形の鐔の切羽臺の周圍に菊花を鋤出して象嵌を施し、平の周邊には小透しをなし金銀の露を象嵌した丸耳ものがあり、其他では牡丹花又は銀杏葉等を丸鐔の全面に薄肉の形彫にして露の象嵌のある物、長丸に梅花と小鳥とを色繪据紋になし、梅の幹は銅象嵌に、籬を金の布目象嵌になした丸耳の鐔等があります。

重長、宗義等の寛文、延寶の時代になりますと、眞丸形の厚手になり概して正阿彌に酷似して參

ります。概して埋忠派の鐔は板鐔象嵌を主とし透し鐔稀にして小透し多く、彫刻は薄肉の鋤出し彫が多い様に思はれるのであります。

明石埋忠は寛文、延寶頃と見へまして丸形、厚手、角耳の鐔に、象嵌色繪にて山水人物等の圖の物などがあります。

江戸埋忠は時代も餘程遅れまして元祿以後と思はれ、夫より連続した様に考へられます。

理を梅に作り又梅花の圖を用ひた物がありますが、此の如きものになりますと時流の關係で祖先の作風に漸次遠ざかり、却て一般金工の作に類似する様になりますのであります。

左に秋山先生の埋忠説を掲げて御參考に供します。

『或人が來て埋忠明壽に刀の稀なるは彫物を専らにしたるに因る、故に短刀が多いと云ふ事であると云ふ、此説は採るべき説か否かは知らざれ共、成る程埋忠の刀にも短刀にも美事なる彫物のあるを見受ける事であるが、若し彫物を専らとしたと云ふ説が確實ならば、同人作の鐔にも彫物のある物が存在せねばならぬが未だ見聞した事がない、之れは野翁が常に不審に思ふて居る點である、然れば明壽時代には鐔に彫物を施したる物がないかと思へば、鳥金や山銅物の足利時代の鐔や金家などに深山あるに、彫刻に長じたる明壽の鐔に一枚も見受けぬとはどふいふ仔細であらうか、明壽は

昔より彫刻を以て賞するにあらず、象嵌の巧妙と形、鐔の作込の巧なるとを以て賞することとなつて居る。

埋忠一派、是は昔は上下の差別なく持て囃した物だが、何んで其様に尊重せられたかと怪しまるるのです。かたい作や耳際の肉を落したり眞丸に作りたりして、圖取りも下手で話しにならぬ物が多いが、世に賞せられたるは全く明壽の余波であらう、明壽は實に名人である、門派百餘は云ふに及ばず他作中に比しても拔群の技能ある物です、併し同作には肉彫据物金銀象嵌の大模様なども見へず、雷文リンズなどの如き象嵌や素銅、眞鍮に本象嵌があるのみです、此人の鐔の形は鐵取の巧者なる長丸の四隅に肉を持たせて左右の肉と調和せしめ、切羽臺より耳際に肉を持たせ、其中間の肉置に心を用ひたる妙味は眞眞、七左といへども到底及び難き所がある。

埋忠や京正阿彌の内に、眞丸形厚肉にして耳の方を自然に落し其鐵の糸覆輪に作る人がある、明壽や眞眞には一向見ざる形であるが、三代重長、四代宗之、正阿彌忠次などに多し、然し此形は長く續かざりしか七左や重成には此形を見ず、一體此埋忠なる者を細調して見ると、櫃穴のみは埋忠一派の形が見へて居るが、鐔の作込は區々になつて居て末々なる程作柄も劣て見ゆ。

埋忠、正阿彌は明壽初め象嵌には長じて居るが模様趣味が乏しく、重成には山水模様もあるが夫れも稀である、一體埋忠は刀鍛治より出てた丈け有つて地鐵の作り込が堅い、八九十人もある内作り込のこなれて見ゆるは誠に僅少である。此一派に明壽と七左を取り除いたならば平々凡々の鐔である、作込の堅いのみでない模様趣味が缺けて居る故である。

夫から明壽である、刀工の埋忠明壽ならば彫物に長じて居て、己の作のみならず弟子の作刀にまで彫て居る位になるに、鐔には一枚も彫模様と云ふがない、之も信家の銘の相違から疑を入れて別人と主張する筆法で行くと、同人かと疑はねばならん。埋忠七左など幾代目の埋忠と極むるか、七左と銘を切て居る分には秀てたる作があるが、重義銘の物には此鐔は七左であらうと見極る程の逸品がない、七左も重義も數代ありて誰に當るか知れん。

實技以上の評判を博したる埋忠派の鐔は、總て重く見て愛せられたる物丈け贗物も亦多し、過日其贗物ならざる城州西陣住埋忠と銘を切つた十字形の四方透丸鐔を見るに、兩櫃際に金銀もて牡丹唐草の象嵌をなしたる其技の神妙なる稀に見る處の正作である、之は世に言ひ傳ふる細銘の重義なり、扱此重義の事であるが、時代と象嵌とより云ふと明壽の時代に最も近きものであるが、眞眞同人とも定めかねる、埋忠派には重義と銘を切る人は五六人もあるが、有名なる七左とも違ふ、此細銘の重義は誰の子弟に當る人なるか未だ知らず、此鐔も埋忠中の優品とは見ゆれ共明壽にほ及ばざ

る遠し。』

以上は秋山先生の御説の内小部分を抄録致したものでありますが、大體理忠一派の鐔が如何なる物であるかを知らんとする上には、貴重な參考資料であります。

第十七 正阿彌 (京及伊豫)

金工略誌。第二期、足利時代 (西暦一四二八年) の項に

『正阿彌派。此派は足利中葉に起りたるもの如し然れども在銘のものなく又工人の氏名記録に存せざるを以て未だ確證を得ず只無銘の古作 (古正阿彌と稱す) 中には慥に此時代に屬すべき良品あるを認むるのみ』

同誌。第三期、過度時代 (西暦一五七三年) の項に

『正阿彌。正阿彌派は本期に於て大に發達したるもの如し然れども未だ其銘を刻まざりしを以て工人の名を知るに由なし此派は京師を本源とすれども伊豫正阿彌も亦本期に起りしものならん。

正阿彌鐔の特徴は圓鐔最も多く木瓜形甚だ稀に角耳にして櫃孔橢圓なり理忠の如く優美なら

ず好みて金象嵌を用ゆ其線其點共に理忠よりも大にして粗なり』

同誌。第四期、徳川時代 (西暦一六三〇年) の項に

『正阿彌派。此派は本期の初に於て廣く全國に普及し皆諸侯の保護獎勵に依りて發展せり獨り其本據たる京師に於ては却つて直接の保護者なき爲に衰退し其宗家と認むべき京正阿彌の系統明かならず而して此派の作にして銘を刻めるは本朝に入りて始めて之を見る。

○京正阿彌。主として美麗なる金銀象嵌を施し地鐵及鍛鍊の如きは古正阿彌に及ばず其作風を區別すれば (イ) 板鐔に高彫又は象嵌を以て模様を付したるもの (ロ) 透鐔に象嵌したるもの (ハ) 献上鐔と稱し透鐔の全部に金象嵌したるもの (耳も亦金) の三種あり此中透鐔及献上鐔には銘を刻みたるものなく板鐔又は之に少許の透あるものには銘を刻めるものあり好みて天下中興の語を添刻す左に其銘を掲ぐ。(桑原先生著金工一覽を參照して作者名を加へたる所あり)

政 徳、城州西陣住正阿彌市郎兵衛、元祿十五年十二月の年號あるものあり

金 長、天下中興開山正阿彌

次郎八、天下中興開山正阿彌、高常と云ふ。

金十郎、天下中興開山正阿彌
 寛悦、天下中興開山正阿彌
 重次、正阿彌
 重宜
 重行、正阿彌
 新平、正阿彌
 盈重、正阿彌庄兵衛
 護等
 勝義、正阿彌
 吉久、正阿彌
 憲定、正阿彌
 包氏、正阿彌鑲工、京師住
 忠次、正阿彌
 重六、正阿彌

重信、正阿彌
 長鶴、正阿彌家、京師住、祖後藤
 長六、正阿彌家
 家盛、正阿彌象嵌工正明と云ふ、京師住、號一心齋
 景謙、正阿彌
 憲貞、正阿彌天下中興開山
 憲安、正阿彌
 國友、正阿彌家、小林氏、山城住
 友武、正阿彌、慶長年中
 氏直、京師正の祖の弟子市左衛門、阿州徳島住、阿波象嵌の祖
 正清、正阿彌、山城國住
 正定、正阿彌
 政房、正阿彌家羽州住、山城住とも云ふ

是等の中最も良作にして著名なるは政徳のみ政徳に二代ありて初代は明壽の門弟なりとの説

あるも信じ難し象嵌に巧みにして良作なり果して二代ありしや疑はし元祿頃の人なり。

天下中興開山等と銘せるものには一も名工なく圓形の板鐔に雪輪、扇面等を象嵌し多少の透彫あるもの多し。(前記氏名中京正阿彌にあらざるものあるを保せず)』

○伊豫正阿彌。地方の正阿彌中最も古きを伊豫正阿彌とす其徳川上代に屬する作には氣品高雅なるものあり家正、吉一、吉久等の作是なり近代に於ては盛國の作に良品あり又盛世、盛富等は好みて微細なる象嵌を以て盛曲又は和歌等の語句を彫り又小刀柄及筭を作れり其銘左の如し。(之れも桑原先生著金工一覽を参照作者名を加ふ。)

- 家正、伊豫正阿彌
- 家定、豫州松山中興開山正阿彌、元祿六年酉三月歿
- 吉一、正阿彌、豫州松山住
- 吉久、伊豫正阿彌
- 良定、正阿彌、小野氏、寛文十二年八月十五日年歿あるものあり
- 森次、豫州松山住正阿彌

- 盛國、正阿彌、宗匠と切りたるもの又延享三年、享保十一年等の年歿あるものあり
- 盛祥、明和七年二月の年歿あるものあり
- 盛富、文化五年の年歿あるものあり
- 盛世、伊豫正阿彌
- 盛衛、伊豫正阿彌
- 森勝、伊豫松山住正阿彌中興
- 森峯、豫州松山住中興開山正阿彌
- 森直、伊豫正阿彌
- 森岑、伊豫正阿彌、元祿年中の人
- 森行、伊豫正阿彌
- 金久、豫州住
- 光信、豫州松山住藤原
- 光正、伊豫正阿彌
- 秀長、松壽齋正阿彌

秀安、伊豫正阿彌
 又次郎、伊豫正阿彌
 國住、伊豫正阿彌
 家齋、豫州住正阿彌
 家武、豫州住正阿彌
 韶心、正阿彌家村田老翁豫州松山
 時則、伊豫正阿彌一派毛利嘉兵衛又藤左衛門と稱す柳川直光門の金工なり。
 秀延、豫州正阿彌
 森長、豫州松山住正阿彌
 成峯、正阿彌
 盛峯、正阿彌鑄工豫州住
 盛信、松山住人、正阿彌
 盛積、豫州正阿彌

以上は和田先生著金工略誌の抄録であります、鑄工としての正阿彌家は足利末期に起りました事

は論のない處であります、其本家は京正阿彌か伊豫正阿彌の何れであるかと云ふ事に就いてはかなり論議がありまして、京が古いや伊豫が先きである等の事は屢々耳にする處で、未だ解決に至りませんのは遺憾であります。畢竟系圖もなければ又在銘の足利期の鑄がない故と思はれます。それで系譜のない爲めに前記の作者名も次第不同に列記した故、従つて時代の古い者又新しい者も前後して居る様な有様で、中には鑄工を脱して金工になりました者もあります、即ち豫州正阿彌の盛富及盛世の如き、小柄筭の作は往々見ますが鑄の作は稀なる様に思はれます。鑄工も次第に後代になりますと金工と混同して鑄作の傍ら他の金具も作る様になりましたものと見へます。

古河家にある鐵地丸形巻水透しの小鑄及他にあります鐵地丸形松葉露地透しの小鑄は共に象嵌のない無地鑄であります、正阿彌の特徴と云はれる切羽臺が丸く大形であります、之れ等は無銘ではあります、足利期の古正阿彌の作ではあるまいかと思はれるものであります。

古正阿彌の名稱も確然として居りませんが、足利より徳川初期に懸けての物は總て無銘でありますので、假りに唱へられた名稱と思はれます。別役先生は正阿彌政徳を慶長頃の人と云はれましたが、現に元祿の年號ある物がありますので如何かと思ひます、併し政徳にも二三代の代數があると云ふ説もありますので猶ほ十分に研究致したいと思ひます。

作風に就て申しますと、正阿彌は通じて丸形が最も多く、切羽臺が丸く大きく兩櫃も丸く横廣で概ね耳は角耳であります。天下中興開山と添銘のある物は、金工略誌にある如く小透をなし又は巴の如き透しの内を鑿透としたるものに霞の如きものを金の摺付象嵌にしたるものがあります。又破れ扇、紅葉又は雪輪の如きを摺付象嵌にしたるものが多く肉彫になしたるものはない様で、時代は寛文延寶より元祿頃と思はれる物が多くあります。寫真(三十一圖の一)に出したる古正阿彌巴透しの鐺は、慶長頃即ち理忠明壽同時代と肯かるるもので、鐵地真丸形角耳の際に美事な金象嵌があり左右巴透の際に銀線の象嵌があるものであります。此鐺は鐵色と云ひ象嵌と云ひ又透しと云ひ申分のない良い鐺で、秋山先生の箱書のある古正阿彌の好參考資料であります。それで之れを明壽に比較しますと、理忠の彫込象嵌に對し之れは摺付であります爲めに、線も太とく鐺全體の作風に何處となく締まりが足らぬ様に思はれます。これが即ち正阿彌の特徴とも云ふべきであります。寫真(三十一圖の二及三十二圖の一)の正阿彌政徳の二鐺は共に名品であります。丸形の方は真丸で裏に蝶三羽を極めて薄肉に鋤出し、之れに金銀の象嵌を配し地に麻の葉と藻が細かに毛彫されて居ります。而して此地模様を彫刻するのは政徳の特色であります。木瓜形は鐵地耳赤銅覆輪で總浪の薄肉の彫刻があり平は海老を精巧なる細透しになし金象嵌の藻を配してある珍物でありまして、共に政徳中の白眉であり又京正阿彌中の厭卷であります。それから矢張り政徳で丸形耳金覆輪兩平は總浪の肉彫に金象嵌の古錢模様を浮かせた鐺を見ましたが、之も亦た同作中の珍物でありました。

政徳には鐵以外の地金を用ひた鐺を見ません、たまたま縁頭の作を見ますが矢張り鐵地に麻の葉の如き地模様を彫り、金象嵌にて地紙、短冊、又將葉の駒の如きもの等を出しましたものがあります。これも亦た鐵以外の地金を用ひたものを見ません。然るに他の正阿彌作には稀には赤銅又は素銅を地金に用ひたものがあり、模様を鋤出し彫になし耳に金象嵌をなしたものがあります。寫真(三十二圖の二)の鐺は赤銅八木瓜形赤銅覆輪に美事な唐艸の金象嵌があり、兩面は七子地に紋盡しを鋤出し彫と地透し形彫とになし、其間に紅葉唐艸を鋤出した精巧な鐺で、兩櫃は小縁のある木瓜形であります。此鐺は切羽臺及兩櫃の形等全然正阿彌式で、慶長より寛文の間の時代と肯かるる良鐺であります。惜しい事に無銘であります。寫真(三十三圖の一)の献上鐺は鐵地真丸形角形で負づる、地紙、色紙等を地透しに残し、之れに金摺付象嵌にて景色、櫻木、鳳凰唐艸、七寶繋ぎ其他を顯はし、耳も金の摺付になしたもので目を驚かす美麗なものであります。此種の物には旭に松原其他景色模様の物もあります。これは京正阿彌一派の人が仕入れ物に盛んに製作したもので、

昔日京都に上りし者が土産として買ひ入れ、歸藩して君公に献上したので献上鐺の名稱があるといふ事を申し傳へられて居ります、年代を考察しますと大凡そ元祿頃より始まりまして其以後の物が多い様に思はれますが、之れも仕入れに作られた爲めに作者名を恥ぢましたか作者名の有る物を見ません。其他の物に耳に金象嵌をなし平を肉彫り透しにした鐺の一種があります、圖様は桐鳳風の如き又は柳に燕の如き物があります、肉彫の模様には象嵌のない物は前記献上鐺よりは時代古く、凡そ慶長直後頃より始まりました様に思はれます。寫真(三十三の二)に掲載の松に鷹の肉彫透しは此種に屬するものでありますが、肉彫が精巧に過ぎますので時代は稍遅れ享保頃のものゝ様に思はれます、而して此肉彫透しには、耳に全然象嵌のないものもありまして略々同時代と肯かれます。又此種の耳象嵌肉彫透し鐺の稍々時代の下りましたものゝ中に、三番叟、狸々の如き人物模様を肉彫透しになし、之れに金銀象嵌の配色をなしたものもあります、之れも献上鐺の名稱中に入れられるものでありますが、此肉彫透し耳象嵌の物にも亦た作者名のある物を見ません、或は前記の献上鐺と同様仕入れに作られた物かとも思はれます。以上の象嵌の献上鐺、肉彫透し共に在銘品なく、又時代が文化文政頃と思はれる程の若い作品は見えない様に思ひます。

伊豫正阿彌も前記の京正阿彌と略ぼ同時代より始まりました事は論のない處であります、概して作鐺を比較して見ますと、京正阿彌の優美なるに對して武骨に見へる嫌いがあり、就中古い鐺に一層其氣味があります、時代の古い物に素銅木瓜形に耳を太くとりたる無地鐺で豫州住金久と銘ある頗る武骨な物を見ましたが、其他にも無銘で山金の同形の鐺に帆掛船を透しました物があります、又鐵長丸形にて丸耳を太く取り之れに金象嵌をなし、平は木瓜形を透し銀象嵌にて唐艸を現はした鐺は作り込象嵌共傑出して無銘であります、伊豫正阿彌の代表作と思はれました。寫真(三十四)掲載の正阿彌森勝作の鐺の透し鐺は珍物で、角形で形彫透しに金銀象嵌を配したるもので森勝の傑作であります。此鐺により時代を考察しますと、森勝は延寶頃の人の様に思はれます。正阿彌吉一も略ぼ同時代の延寶頃と思はれますが、吉一は鐵丸形の鐺に日足、霞、扇等の金象嵌が多い物であります。盛國は時代の稍々をくれました延享、享保頃の作者であります、此國有數の名匠であります、鐵地長丸形に葛唐草を金銀象嵌になしたる美麗なる物と同形にて、琵琶を頗る精巧に透しました鐺は、共に盛國の傑作と思はれますが、時代が下ります故か形状圖様手法迄著しく精緻になり巧妙なるものであります。寫真(三十五)掲載の盛祥作鐵地花桐模様打込毛彫の鐺は、地鐵の鍛鍊良好で打込彫に力作の跡が現はれて居り、殊に明和七年の年號付きは好參考品であります。盛積作に鐵長丸形に月浪兔を肉彫透しにし象嵌を配したる物と、同圖を肉彫になして之れに象嵌したる物

との二鐺を見ましたが、全然正阿彌式で元祿前と思はれるものでありません。盛世、盛富は細字の金象嵌に獨得の妙技がありますが、之れは鐺にはなく小柄筭に多く見ますので、之れは金工の部に述べる事に致します。此國も盛祥の明和頃を最後とし、其以後の物を見ない様に思はれますのは至て少ない故と考へられます。

之より秋山先生の正阿彌の御説を掲げます。

『正阿彌は理忠に似て居るかの如く見へますが丸で違つて居る、象嵌の肉幅廣く露が太く櫃穴も太く丸味あつて耳も亦丸し、理忠の如く耳際の肉を薄く落さず、何國の正阿彌も同じ風を備へて居る、是も圖取りが妙ならず肉彫など多からず唯美麗なる物であるが、其内に古正阿彌と唱ふる優雅なる物がある、之も矢張り金銀の平象眼の幅の廣き唐草などがある、此の外には京阿彌の政徳、會津正阿彌の一光などが立ち優つて居るのです。

茲に一つ注意を要する類似品がある、志度の玉取、松に三番曳、扇の地紙に草花などを肉透彫などにして焼金、青金を交へ美麗に象嵌を爲したる物之が理忠、正阿彌、柵屋以外の献上鐺と云つてある、献上鐺の名は京都より小役人等が江戸に下る時土産物に携へたるより起りし名であるをうです、之を商ひたる家は京都寺町通り四條下る所に十一屋と云ふがあつて、職人を

多く遣ひ數十箇年製造を業とし維新後去る明治十五年に至つて廢滅したとのこと、之が鳥渡正阿彌と見へるのです。

正阿彌鐺に至つては單に上手は誰なりと答ふるは容易に似て其實難しとする處也、凡そ正阿彌一派程系統の廣く全國に行涉りたる物は比類なき物なれ共、かほど多くの中に於て立ち優つて見ゆるは僅に古正阿彌の一二作あるにすぎざる可し、夫れすら國所氏名明確ならず信ずべき説をも未だ聞かず、思ふに正阿彌は鐺工中最も古き一派なるべし、甲冑と云へば直に明珍を聯想するが如く鐺の正阿彌に於けるも亦同一の物なるかも知るべからず、徳川氏治世後の鐺作中

正阿彌のみ中興開山等の銘を切る者あるを見受くる也、必ず理由なき事にはあらざるべし。

故別役能山兄は古正阿彌は伊豫に興りたるものとせり、何の見る所あつて然か言はれたるか知るを得ざるも、日本第一の鍛冶と聞ゆる明珍或は理忠一派と雖、門葉の廣きは遠く正阿彌には及ばざるものあり、又正阿彌は何國の物を論ぜず作法至嚴一見直に正阿彌なりと見得るが如き一家の風を具備し居る事も、亦何派と雖も比類あることなし、如斯鐺専門の大家が四國の偏隅より興り、其末葉が日本全國に散在せんとは想像だも及ばざる處、到底能山兄の説には同意を表すること能はざるが故に、其説の出たる當時の刀劍會誌に駁撃を試みられ共答へを得ず余

も亦追撃せざりし也、そは古正阿彌の類品が伊豫にあるか京にあるかは今更喋々を待たず、平安城の産出なることは現鏢の指示する處最も明瞭なればなり。

此頃東北地方より出づる鏢の内、時代三四百年に見ゆる正阿彌風の象眼ある物あり、何派の物共名附難けれども亦正阿彌の一つにはあらざるか、吾師故岸本翁は此種の難物を見る毎に古正阿彌と云へり、然しながら経験なき余は世に云ふ古正阿彌とは大に趣を異にし居るを以て、容易に信する能はずして又岸源の古正阿彌かと冷笑したることもあれ共、功者の言今日之を見る事の多きに至て初て眼力ある實驗説なりしと信ぜらるるなり。

正阿彌中高名なるは政徳の作なれ共、同作は櫃穴過太露太く圖案凡にして品格乏しく、他作に比して秀でたる物極めて稀なり、會津の一光は時代古からず諸書の記せざる物ながら上手なり、其他伊豫在銘物の如きに至つては一人だも見るべき名品あるを知らず、果して然らんには何の故を以て正阿彌の如斯高名に至りたるかとの反問の起るは必然の事なり、私かに説なきにあらず。

正阿彌は鏢の專業家にして年代久敷門葉の四方に散在し多く人の知る處となり居たるに、足利氏の末若くは織田氏の頃、目下古正阿彌と唱ふる金銀象眼の名工が京師に出で、諸侯に用ひられて遂に肥後の彦三、勘四郎作鏢の模倣とまでに推賞せらるるに至つて、其名稱世に顯はれたる物にはあらざるか、古正阿彌の一二工は優に彦三、勘四郎の上に出づるの技量あり、西陣の政徳が盛名を博したるも或は此餘光なるかも知るべからざるなり。

徳川家治世後江戸は華奢の府共云ふ可き繁昌に立ち至り、諸國の交通も日一日と便利を得、諸種の工人も多く江戸に出でて修業したるものと見へて、鏢の上にも著しき變化が顯はれて居る、今を距る百三十四十年前明和前後の彫金家は、江戸の伊藤を初め一家憲ありと見へたる松山正阿彌に至る迄、大體の上に於ては同趣同様の肉彫に象嵌を施したる物となつて居る。

正阿彌鏢と云ふと金銀象眼物と速了せらるる習ひとなつて居るが、正阿彌は日本全国に行き涉つて居る鏢の大家であるに、此大家が慶長、元和前後に俄かに生れ出でたるものとは受取難し、茲に古き厚手な鏢に甲冑師物に似て甲冑師物でない土堤耳や縄目耳の今日云ふ庄内鏢に似たるものがある、何にとも名が付られぬが、野翁の實物研究の結果は之も正阿彌の一種とするを可と信ず、此種には板鏢ばかりでなく赤板鏢に似て然も地鍔宜き地透ものもあると見ゆる。

古正阿彌は形もよく象眼も上手であるが用ひ所が狭い。

秋山先生の正阿彌説は以上で留めまして、以下故別役先生の御説の少部分を左に掲げます。

『京正阿彌では政徳を以て一番上工としてゐる、此初代政徳は埋忠明壽と略ぼ同時代であつた。

京正阿彌鐔。何年頃より京に正阿彌と云ふ鐔師があつたと云ふ事は分らぬが、京正阿彌で一番有名な世に名工と賞せらるるは正阿彌政徳であつた、此政徳の初代は明壽と同時代で慶長前後の人と見える、銘も山城國西陣住正阿彌市郎兵衛政徳と長銘に切つた所などは餘程埋忠に似たる所がある、素より此政徳も何代もあつたと見える、然るに豫州正阿彌と云つて伊豫松山に随分古くより正阿彌鐔があつて、現に細川三齋公の指料に豫州正阿彌の鐔が掛けてある所より見ても、天正以前に豫州正阿彌は慥にあつたに相違ない、其他にも往々豫州正阿彌には時代の古く見える鐔がある、是より考へて見ても京正阿彌の初めは餘程古くあつたと思ふ」と。

第十八、正阿彌（各地）

装剣金工略誌。徳川時代（西暦一六〇三乃至現今）の項正阿彌派の内より抄録致しますと一、阿波正阿彌。

『京師より分派したる阿波正阿彌の作に二種あり、其一は純然たる正阿彌式なれども其特徴は主として黄銅を用ひ鐵を用ゆること稀にして且布目象嵌を以て美麗なる模様を付したるものなり（耳に金象嵌なし）一見他の正阿彌と區別することを得、此種の鐔には一も在銘のものなく模様は多く唐草、松、桐、紋等にして稀に片切彫を加へたるものあり、圓形多く木瓜形少し、其二は在銘にして鐵を用ひ其象嵌全面に及ばず且地鐵の良好なるものあり、左に一二の銘を記す。

矩 曉 正阿彌次郎右衛門、野村氏

勝 吉阿州住

氏 直金工一體に京正阿彌弟子市左衛門、阿州徳島住、阿波象嵌の祖とあり。

源 助 阿本氏備前同人家。

阿波正阿彌も以上の如く二様の形式がありまして（寫眞第三十六圖の一参照）眞鍮地に金の布目象嵌にて、重も丁子唐草とか又は倫子などの模様で中に巴の如きものを透したる物あり、又稀に之れに配するに獅子牡丹の如き圖を毛彫にしたるもの等がありますが、兩櫃は全然正阿彌式で耳は皆角耳であります。之れは時代の古い方で徳川氏の初期頃よりあります様に思はれます、之れ等の鐔は皆無銘でありますので作名の傳はらぬ事を残念に思ひますが、一種の形式がありますので一見

阿波正阿彌と背かるるものであります、此種の中には傑出したものもなく又粗製と思はれるものもないので、或は京の献上鐺同様仕入れ物に作られたものではないかと思はれます、尙は其時代は元祿頃迄の製作かと考へられます。

此系統に属する鐺に、寫真(第三十六の二圖)に掲載致しました鐵地圓形土手耳地に立鑑ありて金象嵌にて牡丹唐草の鐺があります、之れも無銘でありますが時代は享保頃かと思ます、此種のもの中問として前記勝吉在銘の鐺に鐵地丸形耳金覆輪地に扇面色紙形等を金の置金にし、之れに梅木草花等を赤銅其他の色金を以て象嵌を施した頗る美麗な鐺があります、此鐺により考へますと勝吉は天保頃の人の様に思はれます。

他の一種は前記野村氏距離在銘の鐺で、鐵地丸形に書籍を數札配置し表紙を網代、麻葉等の彫刻又は象嵌になし、表題を象嵌にした良鐺があります、大體に於て政徳に似て居りますが、此方が元祿年號の政徳より稍々古い様に考へられますので寛文頃かと思ひます、而して此系統に属すると思はれますものは後になり様に思ひます。

劍話録別役先生の講話の内に左の項があります。

『阿州正阿彌は京より分派したものと見え、且此阿波正阿彌の中には平田の門人となつた人もあると云ふ事が金工書の中にも出て居る、金銀象眼を手際に入れ華美な鐺であつて品位も良く、中には京正阿彌に似た良く出来た鐺がある』

二、會津正阿彌。裝劍金工略誌。

『會津は粗製鐺及他作の偽造又は模造を以て著名なる地なり然れども其正阿彌には良作にして他の及ばざるものあり玉石混ぜべからず奥州の正阿彌は會津庄内及秋田に論なく其移住當時の作は純然たる正阿彌式なれども後一般に奈良風を模し又は其影響を受けたること少からず當時長州薩摩因州等の鐺工は概して江戸伊藤派の影響を受けたるに對し頗る奇とするに足る就中會津正阿彌は奈良風を模せること最も著し。

會津正阿彌の作風を區別すれば(イ)無銘又は單に正阿彌と銘し地鐵粗悪且彫刻意匠共に劣れるもの(ロ)地鐵稍良好にして高彫なく象嵌亦稀にして純然たる正阿彌式なる松村勝成、正阿彌兼祐の如きもの(ハ)地鐵良好彫刻意匠最も佳良なる一光派(ニ)専ら奈良風を模すれども地鐵悪しくして意匠劣れる正阿彌汎親、明義、有隣等(ホ)大五良鐺を模し雷紋透を専らとし會陽住玄貞と銘するもの等あり左に其銘を列記す。

會津城下正阿彌。奥州會津住正阿彌。會津住正阿彌一時。正阿彌包短。同重勝。陸奥會陽住正阿彌兼祐。會陽住正阿彌唯右衛門致歲。正阿彌金吾汎親。會陽正阿彌藤原信忠。奥州會津住正阿彌長次。正阿彌忠利。正阿彌重長。正阿彌重吉。正阿彌一光。松村源七郎高光、一柳齋正光。會津松村勝成。會津住兼長。會陽住玄貞。櫻川齋加藤明周安政四年在銘。明義。有隣。岩澤了意。正阿彌重忠。正阿彌重勝。淡水子正興。網吉。正阿彌治右工門吉次』

會津正阿彌は徳川氏初期頃よりある様に思はれますが、正阿彌何某が何年頃移住したと云ふ事が判明致して居りませんのは遺憾であります、それが爲めに前掲和田先生金工略誌所載の作者名も、次第不同且年代も不同に列記された事は已むを得ない事でありませう。一見致しました鐺の上から所見を述べて見ますと、正阿彌唯右衛門致歲在銘鐵地真丸形土手耳にて平鋤出し薄肉彫に象嵌を配し、鼓の漣の圖即ち松下流水鼓其他笹などの下草を兩面所狭き迄に現はしたもので、時代は元祿頃と思はれますが、全然正阿彌式で地鐵も良い物であります、之れは會津正阿彌中の代表とも云ふべきであります、即ち寫真（第三十七圖）掲載の松下橋に鐘馗の鐺は全然一致點がありまして、無銘ではあります但同时代の物と考へられます、之れの傳統と思はれる物に正阿彌一光在銘の鐵地丸形耳赤銅覆輪薄肉彫に色繪のある梅木に小鳥の圖の鐺があります、時代は享保頃かと思ひますが、丸

形は稍々長手となり圖様も全面にはなく一部にありまして、餘白のある圖取りは却て餘情があります、一光は會津正阿彌中の名匠として推賞された人でありませう、此一派と思はれる人に一柳齋正光（寫真第三十八圖参照）があります、鐵地丸形に鋤出し薄肉彫に色繪を配し山水人物又は花鳥等があります、時代は天保嘉永頃と思はれ地鐵は稍々柔かく感じられ、圖様も奈良風などの影響がありました故か正阿彌風を脱化した様に思はれます、此系統と思はれるものが會津正阿彌の本系の様々に考へられます。其他の物を掲げますと、金工略誌中の（イ）に屬する津會正阿彌在銘又は無銘に鐵地丸形鋤出し彫に色繪のある山水模様で地鐵の粗悪な厚手の鐺がありますが、之れ等には不思議に正阿彌何某と作者名はない様に思はれます、或は稀にある爲めに未見なのかも知れませんが、之れにも元祿頃と肯かれるものもあります。（ロ）にある正阿彌兼祐作には、鐵地丸形に水に龜の圖を透し彫にしたものがあります、地鐵は良好にて時代は享保以後と思はれます。（ニ）にある正阿彌汎親作に鐵地丸形に高肉彫色繪にて竹に虎の圖の鐺、又有隣在銘で鐵地丸形高肉彫色繪にて松下月に兎の圖の鐺は、共に大模様の立派な鐺であります、時代は天保頃或は今少し下る様に考へられませう、而して何處にも其弊は免れませんが、彫刻の精巧なる點にのみとらはれて遂に刀装の調和を忘れた様に思はれますものであります。加藤明周、明義等は江戸金工春明法眼の門に入りし人で、鐺

工よりは金工の部に入ります、作鐺は前掲一柳齋正光に似て居ります。(ホ)の會津住玄真在銘の鐺は鐵地丸形にて専念京大五郎透しを模造したる物で、之れは天保以後の作人と肯かれます。會津には一部に模造偽作を巧みに作り、又粗製品を廣く全國に賣弘め所謂會津仕入れと稱する物が澤山ある爲めに、一般の評判を悪しくなした氣味がありますが、年代も古くよりあり又作人も他圖に比し非常に多くありますので、中に感嘆すべき物のある事を忘れてはなりません。

秋山先生は正阿彌中の名作として京の政徳、會津の一光を推賞されました。

劔話録別役先生の講話の内に

『會津正阿彌は時代も餘程古く慶長前よりあつたものである、此作は一種の象嵌であつて必ず赤銅を象嵌に交る事になつて居る、地鐵は至つて柔かで腐れ地になり骨の顯れた鐺が往々ある、總て地鐵は黒味を帯び下品なものが多し』とあります。

三、庄内正阿彌。金工略誌に

『庄内作は厚くして稍大且其模様粗に過ぎ奈良風の影響會津の如く甚しからずして作風素朴な

り左の銘あるものは正阿彌派ならん

正阿彌薄清成。羽州住久國。羽州庄内常。大泉薄常有慶應元年。源敦忠。大泉土源恩。珍久。

在哉船田庄八郎。在哉二代。可常三代庄次郎。宜渡邊宣時と稱す。敦弘』

右の内清成の作は赤銅無色丸形にて葡萄と栗鼠の肉彫透しと、眞鍮地に勝軍草を透し象嵌のある物との二鐺を見ましたが時代は享保頃の様に思はれました。珍久作では鐵地丸形に窓の透し鋳出し彫に色繪にて梅木と小鳥の圖の鐺、(全然正阿彌式のと他に銅鐺を見た事があります、圖様は忘れましたが矢張り正阿彌風の様に思はれました)。それから此珍久の門より後年江戸に出て奈良派金工の名匠として有名な土屋安親が現はれたのであります。猶ほ同門と云はれる在哉は昔は安親の師として尊ばれ、又同門の宜は在哉の別號と稱されて居りました。在哉作には鐺のみではなく、縁頭にも赤銅地にて腰の低い四分一及金の色繪の芦雁の圖とか又山水の圖とか云ふ様な安親に酷似した物があります。在哉作の鐺には銅地に鏤目時代の面白き透し鐺で古雅愛すべきものあり、又鐵地に喰合獅子の高彫又は鐵地角形に雨風を摺付象嵌になし、龍を鋳出彫になしたる田舎風の物があります。先年鐵地丸形に蟻通しの圖之れは安親作にも有る圖であります、鐺の中央に鳥居を透し、其左に杉の立樹を右に燈籠を下げた人物を彫りたる模様で、在哉一代の傑作と肯かれる鐺がありま

した。在哉も二代ありますが、これを大別しますと正阿彌式の古雅なる作を初代とし、安親に似た細工を二代とする方が至當の様に考へられます。宜在銘の鐔に鐵地撫角形に丸窓唐人物の圖のあるものは、色繪取り又流れ、下草、葉家根等の配置に至る迄、正阿彌式よりは奈良風^{（一）}に化せられて居りましたのは安親作の影響を受けた様に思はれました。以上の如く安親の關係より考へますと、珍久は寛文より元祿頃で、在哉初代、及宜は共に元祿頃より享保頃かと思はれます。庄内正阿彌と一派を掲げる程の工人も居らぬのでありますが、秋田とは作風の趣きを異にし、且名工安親の出生地と云ふ關係もあり旁々爰に出しました。

四、秋田正阿彌。金工略誌に

『初代は慶長年間佐竹侯に従ひて江戸より移住したる傳内にして爾來連綿維新の頃に及べり、奥羽正阿彌中最も永く正阿彌式を守りたるものにして、近代に至り奈良風を模し又俱利彫したる作あり、左の銘を見る。

出羽秋田住正阿彌傳内、同傳兵衛、同源七、正阿彌重成、出羽秋田住正阿彌重廣（通乘門羽と銘せざるものあり）、天下中興開山正阿彌清兵衛重常、羽州住正阿彌重恒、羽州住正阿彌重定（通乘門）、羽州龜田住正阿彌

彌守、羽州秋田住正阿彌傳七。』

以上の如く初代傳内は慶長年間移住したりとあれども、其時代相當に思はれる傳内作は稀なる物で私も確に夫れと肯かれず鐔は未見であります。寫真（第三十九圖の一）に掲載の鐵地眞丸形七寶透しに金唐草象嵌の鐔は、無銘でありますが無祿頃と思はれる物で、此種の鐔に傳内、傳兵衛、傳七等の銘のある物を見ます、即ち此鐔は三代乃至四代の傳内作と考へられます、又此種の物で四分一地に海藻を象嵌した鐔を見ましたが、之れは尙ほ一二代前の作の様に見えました。寫真（三十九圖の二）に出した傳兵衛在銘赤銅地丸形に金象嵌日足の鐔は、布袋腹の肉置で耳は糸覆輪であります、之れも元祿乃至享保頃と思はれます。同じく傳兵衛在銘で赤銅地撫角形に象嵌色繪にて虎を高彫にした鐔を見ましたが、之れは庄内の安親熱が傳染した様に思はれ、時代は天明、寛政頃の様に見えました。正阿彌重廣在銘の鐔に赤銅地六木瓜形に俱利彫の物があります、後世の具利彫とは反對に彫刻に丸肉があります。之れは唐物の塗物を模したもので天保頃の高橋興次の獨壇場の様に考へて居りましたが、此重廣の頃よりありましたものと見へます、此人は後藤通乘の門とありますから時代は元祿の末年頃より正徳頃で、此俱利の鐔も其時代と肯かれる物であります。此秋田正阿彌の初めは亦た唐草象嵌の如き作をなし、後代には矢張り流行に連れて象嵌色繪高彫の圖様を作り

ました様に考へられます。

劔話録別役先生の説に『秋田正阿彌鐺も種々の象嵌の入つた鐺が追々見へるが、總て厚さも厚く形造も野卑で下品なる鐺である』と。

秋山先生の説に『正阿彌傳内は慶長頃とあれども時代若く見ゆ』とあります。

五、其他の正阿彌派。金工略誌に

正阿彌派は最も廣く全國に分布したるを以て、若し之を精査せば作者極めて多かるべしと雖も、今只其一斑を掲ぐ。

奥羽、奥州津輕住正阿彌清明 秋田作に類せり
其分派ならん

奥州南部盛岡住正阿彌大助

奥州二本松清兵衛

武州、武州正阿彌重次 鐵丸形の板鐺に山水人物
等を象嵌又は高彫せり

武州江戸注藤原正阿彌重義

武州住正阿彌重吉

江戸住正阿彌正充

江戸、日本橋通住重致 伏見産正阿彌祖

江戸、神田、藍染川邊正阿彌重行 文政三年甲子

正阿彌清兵衛重常 七十三歳歿

相州、相州小田原住正阿彌正久

攝州、大阪住正阿彌清七 南条屋町

加州、正阿彌孫三郎 加賀象嵌工なり

勢州、吉久、布目象嵌嵌嵌を施し純然たる正防彌式なり

關蘭軒、元龜元年二月桑名住人於尾州作とあり

播州、播州龍野住正阿彌爲太夫 鐵圓形板鐺に色繪
象嵌の美作あり

播州赤穂住正阿彌政員 純然たる正阿彌式なり

播州赤穂住政昌

備前、備前又七、鐵圓形に金銀象嵌の破扇等の圖ありて佳作なり

備前岡山住正阿彌源助、岡木氏

正阿彌正北、中國に此名あり

作州、作州吉久、鐵圓鐔にして簡單なるもの

作州義勝、正防彌家姓氏不詳

土州、正阿彌重行、普通の正阿彌式なり

雲州、雲州住正阿彌家廣瀬氏、豊久

因州、正阿彌正吉、元祿頃因州か

因州住正阿彌清喜、青木氏

九州、久留米住正阿彌亦七

以上の如く全國に分布されて居ります、此内には金工一覽を参照して作名を加へましたが、猶ほ漏れたる人も多くある様に考へられます、此中にて一見したる物で記憶して居るものを掲げますと、播州は元祿前後の時代の様に思はれます、而して最も良作と思はれますのは備前又七の作であります、併し之は殆んど在銘のものはない様でありますが獨得の作風がありますので、寫真には無銘で正真と思はれる物を出しました、之れも亦た元祿頃と肯かれます。加州の正阿彌孫三郎在銘の鐔は赤銅地木瓜形に金象嵌にて蟲畫しの圖で、全然加賀象嵌丁の形式でありました。他の各地では

勢州の元龜年號の鐔は未見でありますが、其他は皆元祿以後と思はれます、又其内に明治維新頃に近き作者もある様に考へられます。

劔話録別後先生の講話の内に

『備前正阿彌も大概並の正阿彌鐔と同様であつて、別に備前正阿彌の特種なる所はないと思ふ。其他諸國に正阿彌の未流は澤山あつて、土佐にも正阿彌と云ふ鐔師の家は今以て存して居る位である、と云つて是と云ふ程の變りもなく大概同様の作風である』

秋山先生の説に

『茲に一つの注意を要する類似品がある、志度の玉取、松に三番隻、扇の地紙に草花、などを肉透彫などにして焼金を交へ美麗に象眼を爲したる物、之が理忠、正阿彌、柘屋以外の献上鐔と云つてある、献上鐔の名は京都より小役人等が江戸に下る時、土産物に携へたるより起りし名であるさうと云ふです、之を商ひたる家は京都寺町通り四條下る所に十一屋と云ふがあつて、職人を多く遣ひ數十箇年製造を業とし、維新後去る明治十五年に至つて廢滅したとのこと、之が鳥渡正阿彌と見へるのです。(此項は京正阿彌の部に出すべし。きを誤つて此處に出す。編者)』

又秋山先生の説に

『先年或る鍛會に於て多くの出品中、上方で云ふ「ノンス」木瓜槌瓜目、打返し耳、菌の小透鑿があつたが、夫れを何にかと問はれたので江戸正阿彌と答へた、處が其答へが奇であつて耳障りなりしと見へ、江戸には正阿彌はないと一座の非認を受けたが、日本國中に行き渡つて居る正阿彌が江戸に限つてないと云ふ筈はない、見た事もあると思つても思ひ出しかねて抗辯もせざりしが、此頃武州江戸住正阿彌重吉作と立派に銘を切りたる鑿を見た、曾て笑つた人に見せたいが多くは他界の人となつて残念だ。』

第十九、明 珍

金工略誌。徳川時代（西暦一六〇三）の項

『甲冑師派

前期に於ける甲冑師作には在銘のもの稀なりしを以て一般に甲冑師作と稱し來りたれど、本期以後の作には在銘のもの却て甚だ多く、従ひて甲冑師中の各派を分明に區別することを得。

明 珍派

明珍家は本期に至りて鑿を作ること減じたるが如く、元祿の頃生存せし第二十二代宗介の作最

も多く存せり、前期の作に比すれば青壞の差あり、厚くして小形となり鍛鍊粗にして人物等を高彫し且地鐵に柰目を現はせるもの多し、其銘に神道五鐵鍊也明珍式部紀宗介云々と刻みたるものあり、此他地方に散在せる明珍派の作を觀るに大抵往時の作風を一變し小形にして厚く或は信家を摸したるもの又は他の流行を追へるものあり。

左に二三の銘を掲ぐ。

駿河。駿州府中住明珍安家。

羽前。庄内宗吉（近代の人、良作）。

加賀。加州住明珍宗久。加州住明珍紀宗幸。

越前。越前住明珍勝治。越前國吉廣貞享二年九月十五日

越前住明珍吉久。

但馬。但州出石住加賀大掾義定。

住地を記さざるもの。

住吉。宗定。宗清。宗政。宗英。宗功。宗保。宗次。宗胤。宗矩。宗治。吉治。安次。定次

義忠。哲輔。保身。保周。

此中勝治及吉久の作には往々薄くして鍛錬を専らとし前代の面影を存せる佳品あり、又宗矩(龜城住)の作には兜の如く拾數枚を鍔にて綴りたるものあり。

以上の如くあります。明珍の名家にては前記の如く二十二代の式部宗介に鑢作を見ますが、他の人々には甚だ稀なる様に思はれます。猶ほ略誌に洩れた國に土佐があります。即ち土州明珍紀宗義、土州明珍紀宗長、其他數人ある様に思はれますが、何れも近代のもので、作風を申しますと肥後透しを模したるもの、赤阪透しに似たもの、信家を模したるもの、寫真に出したる宗長銘の鋤出し彫付象嵌の雲龍の圖の鑢の如きもの、又銅地に高彫色繪の奈良物寫しと見ゆる彫刻をなしたる物等あり、土州にては宗義が優れて居る様に思はれます。又前掲略誌の内にある明珍にては、越前の吉久が優れた巧手でありますが、此吉久作の中にも時代の同じからざるものがある様に思はれますので、數代同銘を切る人があるかと思ひます、吉久の作風は鍛錬良好で、丸形の鑢を角耳に取り中を肉彫透しになし、例へば葵葉の如き圖或は舞鶴の様な圖もあります、代の下るに従ひ記内の作と共通する様に考へられます。義忠作に八重菊透しの變作があります。概していひますと、明珍は地鐵の鍛錬よく、板鐔に透しをなしたものが多くあります。

秋山先生の御話の内に、

『明珍加賀大掾紀義定作之と銘を切り鼠を肉彫したる鐵鑢を見たり、年代は百二三十年を經たる物の如し、但馬明珍といふ上手なりとあり、又但馬にも明珍加賀大掾紀義定といふ肉彫を見たり、間然なき出來なれども明珍風は毫もなし』

とあります、而して此鼠の鑢は古河家所藏の名品であります。

別役先生劍話録の内に、

『明珍吉久は慶長、寛永頃の甲冑師で打出し物の名人であつた、鑢をよく造つた人だ、此鑢は本目鍛になり丈夫な至つて武張つた鑢が往ある』

とあります。

○

第二十、早乙女

金工略誌。徳川時代。甲冑師派の内に、

『早乙女派。

早乙女派は明珍より分派したるものにして常陸に住せり、其鑢稍大形にして木瓜形多く板鐔に

透彫せるもの最も多し、大抵左の銘を刻せり。

早乙女家則 天文頃 家忠、家貞

以上の如くあります、大體早乙女家の鐔の作風に就きましては、明珍よりも形も大きく厚さも厚く總じて武骨に見ゆるもの多く、地鐵の鍛鍊も稍粗雑に見ゆるもので、従つて優美なる點に缺くる處がある様に思はれます。甲冑の作より考へますと、天文頃在世の人の様に思はれますが、鐔より考察しますと、勿論其時代相應の物もありますが、稍時代の下る様に思はれる物もありまして、時代の若く見える物には鐔工に共通して甲冑師より遠ざかつた物がありますので、此作者即ち家則、家忠、家貞の三名共に二三代の同銘を切りました子弟がありはしないかと思ふのであります。又系譜がない爲め以上の三人は親子兄弟の差別も解り兼ねるのであります。寫眞掲載の家貞作鐵地撫角形左右杜若の透し鐔は同作中の傑作で、之れには花辨に金の色繪が施されて居りまして、宛然正阿彌に共通點がある様に思はれます。家貞は此杜若の圖が得意と見えまして、猶他に二三同圖の物を見た事がありません、又家貞銘にて鐵地撫角形に全面紋畫しを透彫にした精巧な大形鐔を見た事がありませんが、之れは耳に赤銅覆輪がありました。又寫眞掲載の家則作鐵木瓜形南無妙法蓮華經鋤出し彫の鐔は、家則の得意で、此他に尙ほ二三同圖を見ましたが皆傑出したもので、唯だ形狀に多少の大小があります。

又家則銘で鐵撫角形に瓢箪を透し宛も天法鐔に見る如き大吉の文字、網目等の刻印を鋤出しました物がありました、此の様なもの又前記題目の如きものが寧ろ早乙女得意の檀場かと思はれます。和田先生の御説には木瓜形多くありますが、之れは撫角形が最も多くある様に思はれます。又家忠銘にて古河家にある鐔に、鐵地眞丸薄手の全然甲冑師式の物で、山に鹿の圖を極めて粗雑な線畫さの毛彫にしたものなどがありますが、之れは早乙女中の珍品で頗る面白く、甲冑師作の面目躍如たるものがある様に思はれますが、他には類品を見ないのであります。

秋山先生の御説に

『甲冑師物の内では明珍信家と早乙女家貞です（中略）家貞は上手なれども品によりては手際過ぎて甲冑師物と見へぬ物がある、之には會津出來の偽物が澤山あるから最も注意すべきである。又鐔も時世に連れて流行があると思へる、早乙女家貞や天法や南蠻鐔や廣東、彦根の宗典、鎌倉鐔、矢上鐔などが時めいた世もあれば、理忠、正阿彌、古正阿彌の用ひられた時節もあつたが、早乙女家貞と古正阿彌、理忠明壽の外は追々時候後れとなつて、右等の品よりは龜山鐔、薩摩鐔、雲州鐔などが高價になつて來たが、之れも金家、信家、明壽の如く何の世にも賞翫せられようと思はれん（中略）一度流行のすたりたる鐔の内早乙女家貞の作品は或翁の愛

品を見ると其他の品は皆な首を捻ねらるる、家貞は早乙女中の中々の名人であつて是れの正作となれば何時の世でも捨つ可き物でない、是れのすたりたるは誥り眞偽を鑑別する力のなき世の趨勢に敗れた物である（下略）

以上秋山先生の御説の様に、早乙女の内では家貞が傑出した名手であります。

○

第二十一、春田及蓬萊

(一) 春田派

金工略誌。徳川時代甲冑師派の内、春田派。

『春田派（初め治田後世春田に改む）は本期の初め既に越前及出雲に於て鐔の製作に従事せしもの如し作風は古作に據らずして當時の流行に倣らひ龍獅子等を彫れるもの多し。

越前住春田甚八廣次 又單に廣次と銘せるものあり

又左の銘を刻めるものは作風春田に類似せるを以て假に此に編す

越前府の住善陣延寶三年の銘あるものあり

出雲春田派の作中には越前よりも優れるものあり左の銘を多しとす

雲州住春田作。雲州住春田每政。雲州住每矩。雲州春田雅智。雲陽住春田每幹

以上の如く金工略誌にあります。初め治田後世春田に改むとありますが、鐔には治田と切りました物を見ません、越前の春田には廣次の外に廣家銘の物があります。

越前春田の作風は鐵地丸形厚手の鐔に菊水を肉彫透しにした、精巧と云ふよりは寧ろ古風な作風の鐔があり、其圖様は種々ありますが大體此種の物が多し様に考へられます。

雲州には徳川期の初め頃より連綿とした家系がある様に考へられますが、系譜の傳ふべきものがないのは遺憾な事でございます、而して作風に於ても時勢の反映で推移した跡が見へます。初期に於ては越前同様鐵地丸形に肉彫透しの物が漸次彫崩しの形式になり、遂に寫真にある様な丸彫で獅子愛兒の圖の如きものに變化したものと思はれます、此派の内では每幹銘の物が傑出して居りまして、先年故人千頭清臣氏御所持の每幹銘で張果老の圖を丸彫にした名鐔がありまして、此鐔の爲めに每幹が俄に有名となりました。寫眞の獅子愛兒の鐔は無銘ではあります、全然手法も亦た手際もこれと一致して居りまして、每幹作疑ひなき物と思ひます、それで每幹の年代は享保頃の様に

考へられます。

秋山先生の御説の内に

「雲州鐔は薩摩物に似て居り作り込がよく地鐵が劣る作人の銘は雲陽住春田每幹、雲陽住春田每政、雲州住小林延清、雲州住中村傳治、經徳、など云ふのがある、春田姓は鍛冶では古い姓である、其末葉にや春田廣次などと銘のある物もある、因州駿河の家も初二代は春田と云へりと之も同姓なるか、又、雲陽住春田每幹と銘を切り、仙人に駒の肉彫耳の方自然に丸めたる丸耳鐵鐔を見る、年代は百三十四十年を経たる物なる可し上手也。雲陽住春田雅智と銘を切りたる牡丹の毛彫、獅子の肉彫、半は角耳半は丸耳鐵鐔を見る、年代は百二三十年を経たる物なる可し上手也、每幹と同人なるかも知れず」とあります。

(二) 蓬萊派

金工略誌。徳川時代、甲冑師派の内蓬萊派があります、其記事に

「此派は本期に於ても只加州住の作あるのみにして銘には單に蓬萊作とあり、板鐔に少許の透あるものとす」

とあります、明珍系庶流の中に、國近（蓬萊三郎、憲國の門人）、國久（蓬萊次郎、加州或は上州）、永久（平田、加州金澤）等の名が見へますので、蓬萊派は是等の人々の作ではあるまいかと思はれます。

和田先生の説によりますと、板鐔に少許の透しをなしたものとありますが、此蓬萊派に就いては面白い思ひ出で話があります、寫眞に掲げました鶴龜透しの鐔と全然同圖の蓬萊と二字在銘の物を先年見た事がありました、圖柄から考へまして蓬萊の圖と云ふ譯けで、作名とは思ひ及ばなかつた事があります、此鶴龜の鐔も若し先年の在銘蓬萊の同圖を見せんと、肥後か赤坂と考へられる様に思はれます。

○

第二十二、駿河

本邦金工略誌。第四期徳川時代（西暦一六〇三年）の部に、駿河派として左の如くあります。

『駿河派は元駿河國に居住したる、甲冑師春田派なり、後ち春田を早田と改む、初代は鐔を作らず、二代に至りて、備前に於て始めて鐔を作り、其作純然たる往時の甲冑師作に倣へり、三代に至りて因幡に移り、爾來該地に於て連綿今日に至れり、二代は備前駿河と銘し、三代乃至六代は單に因州駿河と銘せり、其特徴は圓鐔にして、角耳且櫃孔の兩端、又背の當る所に特に素銅を嵌入したるにあり、此派は系統より云へば甲冑師派なれども、二代の外甲冑師派と認むべき作なきを以て、今一の別派とす、歴代は左の如し。

- 初代。卓次、春田忠右衛門。天正の頃駿河府中に住し、慶長二年三月吉日に移り、同五年播州に轉じ、元和六年十一月六日備州に歿す。
- 二代。家次、春田忠左衛門。元和元年播州より備州に移住し、春田を早田と改む、是より鐔を作る地鐵鍛錬共に似しく圓形にして耳を打返したるものあり櫻花等の透彫多し。寛永五年五月朔日歿す。
- 三代。宗家、早田忠左衛門。寛永九年備前より因州に移住し、同十三年六月四日歿す。
- 四代。家久、早田忠兵衛。因州島取住寛文元年正月十七日歿す。享保五年二月廿四日歿す。
- 五代。利家、早田忠兵衛。伊藤派に倣ひ生透彫多し、寶曆十一年十一月二十三日歿す。
- 六代。卓家、早田忠兵衛。江戸にて修業し、肉彫生透、細透の作多く蝶、蜻蛉等あり、天明八年七月十七日歿す。
- 七代。卓次、早田彌平。江戸にて修業し、肉彫生透、細透の作多く蝶、蜻蛉等あり、天明八年七月十七日歿す。

早田 新作

- 八代。卓重、早田忠兵衛。天保八年六月十九日歿す。
- 九代。卓置、早田忠次郎。安政三年七月十三日歿す。
- 十代。卓隨、早田彌平。東遊齋と號す、江戸にて修業し、生透、細透、肉彫等多し、明治二十八年歿す。

銘字は左の如し。(例の如く金工一覽を参照し作者名を加ふ)
備前駿河。因州住駿河、(三代より六代まで七代なり)
因州住卓次、同卓置。同卓隨。同卓幸。同卓良。同直充。同吉充。同正充。同吉政。同正次。同正矩。同正明。

以上の如くあります。而して初代の作鐔はまだ見た事はありませんが、二代備前駿河作五字銘を切羽臺の左右に割り銘にした鐔は往々見る處であります。甲冑師作にある丸形に櫻の花を丸く繋いで鐔の全面に透したる物、又は丸形の左右を扇形に透し、上下に蕪雜に唐草を毛彫にした物等は、眞に甲冑師出の作者と肯かれます。寫眞にある八角形松に鳥居透しの鐔は、此作中の優物で、先づ圖様が傑出し透しの線に肉を持たせる爲めに二層深味ある景色となりまして、茲に於て甲冑師より出でて新天地を開きたる鐔家の面目躍如たるものがある様に思はれます。三四五の三代の作は之れ

と云ふ物がない爲めか見た事がない様に思はれますが、因州駿河銘の鐔にて鐵地丸形に浪を透した物を見た事があります、勿論巧手の手に成つた物ではないのであります、之れ等が此三代の内作かも知れませぬ、六代卓家は江戸に出て伊藤派に修業したとあります、其作鐔は未見であります、因州住駿河銘にて鐵木瓜形耳打返し葡萄を薄肉毛彫になし、金象嵌の鐔を見ましたが、之れが六代の作かと考へられます、七代以下此派の作鐔は全然江戸伊藤派と一致して居りますので、代々其道を修業したものと思はれます。丸形の鐔最も多く丸耳の耳際をひねり返しの如く鋳きたる手際最も巧妙に、平の模様を薄肉に鋳出し之れに金銀の象嵌を配色したる物は常に多く見る處であります、即ち寫眞の卓重の鐔の如き物であります。之れに透しを交へたる物又は細透しもあります。寫眞の卓良作芒に狐透し鐔は、英一肇畫とありますが寧ろ之れは變作に屬する物で、耳際も鋳き残さず金銀の配色もなく素透しになしたるは、其作者の得意想像に難くない様に思はれます。兩櫃及中心穴の双棟に特に銅を入れるは、此一派の特徴の様に云はれて居りますが、中にはないものもあります。銘に因州住何某と切り駿河を冠せぬものは、果して此一派か否かは解りませんが、時代は元祿頃よりある様に思はれ、多く丸形に肉彫透しを成した物を見ます。寫眞の因州住正充は此一派で、明治維新に近い作者と思はれますが、花菱の紋を六個繋ぎたる圖様の苦心も思はれ、又其肉合ひの手際

抜群の名手と思はれます。

次に秋山先生の御話の内に、左の一節がありますから茲に出しました。

中心櫃の埋銅を丸く最初より埋てある物を因州の駿河鐔と云ふ、卓次、卓置などと銘を切る人もあるが、三人共に徳川時代と見へる。此駿河は同家の十幾代目と云へば古き家と見へる、過日或家にて長丸形板鐔網代毛彫紋透と云ふ、時代三百餘年に及ぶ法安共見ゆる鐔が出た、之は善良品であるが、誰作と云ふ事には體に一考を要す可きである、中心櫃の責き銅の丸く切込んで駿河式に埋てあるを以て、忽ち駿河の古き物と極つたが、野翁は駿河の古き物も見ず、又古き物も責銅を丸く堀込て埋るや否を知らざれば、所有の押形に就て同様責銅ある物を調べて見ると、孔雀の地透尾州鐔に一枚、堅角四方透銀象嵌古正阿彌と見ゆる物に一枚、安親に二枚生田喜右衛門に一枚、政隨に一枚、法安兼信に一枚、在哉に一枚ありて外の作にもないではあるまい、卓次、卓置などは右の人々よりは古るからず、去れば此責銅を以て駿河一家の特徴とは云ひ難かる可し。

又左の一節があります。

駿河卓置の三疋猿の肉影を見る、至て面白き出来なれども、金象嵌の珠を加へたで田舎物を顯

わして居るは残念也。

第二十三、伊 藤

本邦金工略誌。第四朝徳川時代(西暦一六〇三)の部に。伊藤派又小田原派として左の如くあります。

伊藤派の祖甚左衛門。小田原派の祖正次は埋忠明壽の門弟なりとの説あり。同時代の人にして其作に相似たるものあり。此伊藤派は最も繁榮し徳川上代の半より近代に至るまで江戸鑲工の半耳を執り、各藩の鑲工も江戸に於て修業するものは多く其門に入れり、長州、駿河、薩摩等の作皆な其類なり、小田原派は元相模小田原に住したれども後肥前唐津に移り、後ち又下總佐倉に轉じ其跡を絶ち(下略)。

伊藤派。圓鑲多く角耳にして板鑲及透鑲あり、生透、細透、糸透等最も多く、且金、銀、赤銅等の色繪を用ひ、稀には高彫あり、地金は多く鐵なれども又間々烏銅あり、其家系及門弟の區別を知ること能はざれども工夫は甚だ多し、初二代の作と認むべきものにして無銘なるもの稀に存す、其形明壽に酷似し主として烏銅を用ひ、稀に素銅を用ゆ。

小田原派。多くは圓鑲にして角耳なり、糸透、細透を創意し彫刻を巧みにし、多くは鐵を用

ひたれども間々烏銅あり(下略)。

以上の如く金工略誌には伊藤派と小田原派と二派に區別してあります。之れは江戸伊藤、小田原伊藤の稱號が傳へられてありますので區別されたものと思はれますが、事實は同派であり、又同一の人もある様に思ひますので、茲には區別を廢して掲げました。猶ほ明治年間在世の金工で著名な伊藤勝見翁は、此鑲工伊藤氏の後裔で、金工一覽に其系譜がありますので爰に出します。

- 初代。正長 伊藤之祖甚左衛門江戸住、享保十二年歿。
- 二代。正恒 伊藤氏二代甚右衛門、細透ノ名工、江戸住、六十一歳ト銘スルアリ、安永四年歿。
- 三代。正方 伊藤正恒門、伊藤源二郎、安永三年歿。
- 四代。正吉 伊藤正恒門、初又吉郎、後甚右衛門、寛政八年歿。
- 五代。正近 伊藤正恒門、又吉郎、寛延三年生、寛政十二年歿。
- 六代。正種 伊藤正恒門、伊藤文藏。
- 七代。正也 文化八年歿。
- 八代。正乘 武州住。
- 九代。正廣 伊藤一長。

十代。勝見 田中清壽門。

伊藤勝見氏の家系は以上の如くであります、此内九代正廣は一説に後藤一乘の門に入り一長と號したと云ふ説もあり、十代勝見氏は東龍齋清壽の門に入り、共に鍛工より出でて金工となり名手に數へらるるに至りました。勝見翁が東龍齋の門となり、其家傳の鑄付け法を傳へた爲め、東龍齋一派の鐵鑄は他の金工と鑄付け法を異にしたとも傳へられて居ります。兎に角此九代正廣、十代勝見は金工の部に入る人でありますので、鍛工は即ち八代正乘迄であります。

猶此伊藤派に屬する作者名を掲げますと二代とは別人に同名の正恒があります。

- 正恒 伊藤氏一流元祖初基三郎、後其右衛門、江戸神田新裏町住、享保九年歿、御師ニ召出サレ生透物アリ位アツテ上手、最細透得手。
- 正永 伊藤正恒門、武州住伊藤基五右衛門、安永十年歿、或曰享保十六年生天明元年歿ト云フ。
- 正朔 伊藤正永二男、又正朝トモ云フ、彌一。
- 正富 伊藤正永門、横田清助。
- 正義 伊藤正方門、定七、江戸住。
- 正秀 伊藤正義門、佐太郎、江戸住。
- 正常 伊藤正秀門、山縣常松ト云フ、山

- 正忠 伊藤正常門、桑井忠藏、江戸下谷根岸住、一説ニ岡田正豐門トモ云フ。
- 正高 伊藤正常門、大谷徳三郎。
- 正豐 伊藤正常門、岡田豐三郎、江戸下谷根岸住六十一歳ノ銘アリ。
- 正利 伊藤正常門、作州津山藩木谷利兵衛、江戸湯島住。
- 正親 伊藤正常門、木谷富藏、江戸淺草柳田原住延享四年生、寛政九年歿。
- 正祥 岡田正豐門、七澤熊太郎、江戸下谷金杉大塚住。
- 正直 伊藤正吉門、伊助、江戸神田住。
- 正春 伊藤正種門、伊藤善左衛門、相州小田原又江戸ニモ住ス。
- 正清 伊藤正種門、伊藤善五郎。

以上は伊藤勝見氏の家系に屬する人を探みて茲に出したのであります、又小田原派に屬する作工を左に出します。

- 正次 小田原鍛工、鐵、赤銅細透元祖ナリ、大久保家ニ仕フル人カ、慶長の頃肥前唐津ニ移リ延寶六年下總佐倉ニ移リ貞享三年相州小田原ニ至ル。
- 正次 江戸伊藤派、芝新錢座住。

正長 伊藤正次門、長助。
 正勝 伊藤正次二男、下總佐倉住、初肥前唐津住、中頃相州小田原居住、延寶頃。
 正備 伊藤正次門、次郎吉、江戸京橋住。
 正備 伊藤正次門、初代正備養子。
 正房 伊藤正次門、庄兵衛又庄左衛門。
 正國 小田原正次系、肥前唐津住下銘ス。
 正國 小田原正國二代、江戸住スト云フ。
 正保 伊藤善左衛門、武州住又小田原住。
 政善 小田原鑑工、唐津住、慶安頃。
 政方 武州神田住、甚右衛門又甚左衛門、伊藤鑑工。
 政春 江戸住。
 正國 伊藤派。
 正信 伊藤氏、平八郎、武州住。
 正幸 江戸住、伊藤派。
 正久 武州住、伊藤平八郎。
 正行 江戸、伊藤派。
 正辰 江戸、伊藤派。
 正命 江戸、伊藤派。
 正雄 江戸、伊藤派。
 正敦 伊藤家、江戸、市ヶ谷柳町住。
 正秀 伊藤氏、赤坂住。
 正里 武州住。
 守恒 武州住、伊藤派。
 利政 江戸、伊藤氏、鑑工。
 利直 江戸、伊藤氏、鑑工。
 利久 江戸、伊藤氏、鑑工。
 利叙 武州住。
 利正 江戸、伊藤派、鑑工。

賢雄 伊藤明兼門、塚原保三郎、
恒嶺子、金工カ

孫八郎 江戸、
伊藤氏。

又玄子 江戸住、鐵工、
伊藤氏。

正齋 橋本氏、
橋本氏。

辰壽 江戸住。

以上の系譜及作者に就て考察致しますと、伊藤派は小田原の正次を以て元祖とする様に思はれますが、此人は恐らくは埋忠明壽の門より出たる作人と思はれます。其正作と考へられます。私には未見であります。和田先生が明壽に酷似すと断ぜられたのは、恐らくは無銘にて伊藤と申傳へられた赤銅又は素銅等の變り金の鐺に因りて評せられた様に思はれます。寫真掲載の武州住正次在銘赤銅丸形耳七子平網代の鐺は、勿論二三代の代下りの物と思はれますが、布袋腹の形式は埋忠傳と思はれます。又寫真掲載の唐律住正國鐵丸形に杖を透し軍配を彫り色繪を配色した鐺は、矢張り布袋腹の形式で埋忠を聯想するものであります。只だ杖の透しに伊藤派の特色がある様に思はれます。それから武州伊藤の祖正長は小田原正次の門より出でたる人の様に思ひます。勿論其作と思はれません。

思はれません。鐺は未見でありますので断言は憚りませんが、時代の關係上右の様には思はれません。小田原派は何年頃迄存続致しましたか詳かに致しません。寫真掲載の小田原住正保鐵丸形竹の鋤出し彫色繪細透し鐺は、元祿より享保頃に至る形式の物であります。或は享保又は寶曆頃を最後として皆江戸に移住致しましたのか、江戸伊藤家の繁盛になるに連れ自然名聲を奪はれた觀があります。江戸伊藤家にて有名な正恒作の鐺は、寫真はありませんが一見したものの内二三に就て作風を申し上げます。鐵地丸形に雲龍を鋤出し彫になし耳に雷紋を金象嵌にしたもの、鐵地丸形に唐山水を鋤出し彫になしたものの、又鐵地丸形に金銀象嵌にて海藻を現はしたるもの等がありました。寫真掲載の武州住正春作鐵丸形鐵線肉彫透し耳に麻の葉象嵌の鐺は正種門としてあります。作人で、天明寛政頃の工匠であります。又寫真掲載の武州住正常作鐵丸形老松鋤出し彫の鐺は文化文政頃の作と思はれます。

以上寫真掲載の鐺及其他の實鐺により考證して見ますと、伊藤鐺は埋忠明壽門を出発點とし、唐津住、佐倉住、又は小田原住と切る埋忠流布袋腹の形式に細透しをなしたる物を最古とし、鐵地眞丸形に肉の低い鋤出し彫に細透しを交へ耳に鞘形、雷紋、麻の葉等の象嵌ある物、之れを以て初めに伊藤鐺の形式が備はつたのでありまして、之れは埋忠と云ふよりも寧ろ正阿彌化した觀があります。

す、これは畢竟時勢の風潮に化せられたものと見えます。之れに次ぎては鐵地丸形に耳を角耳に残し、切羽臺と耳との間を形肉彫透しになし金色繪の配色をなしたものは、普通見る所の伊藤鐔であります、之れと同時代の寫真にある老松鋤出し彫の如き鐔も往々見る所であります。茲に不思議に思はれます事は、長州鐔とは何の關係もない様に思ふのでありますが、此江戸伊藤派にある鐵地鋤出し彫の形式は、長州の文化文政以後に多く見る物で、勿論之れには耳象嵌で平に金の配色はなく又細透しもないのでありますが手法は似た物であります。又伊藤派の享保實曆以後と思はれる物に多くある鐵丸形肉形彫透しに金の配色ある鐔は、長州の元祿、享保頃に多く見る形式に酷似して居る事でありませぬ。結局長州の古い形式が伊藤派に残り、伊藤派の古い手法が長州に残りたる等の事はこれまた面白い現象であります。伊藤派も江戸の正恒が御鐔師に召出されたに因りて家格大に上り、殊に幕府御膝下に居住した爲め繁盛を極めたものと考へられます。作者名も以上列記の外に猶ほ多數ある様にも思はれ。又右列記名の作人に就ても同名が二三代存続した者があるかに考へられます。

次に秋山先生の説二三を掲げます。

「一過般丸耳厚手落松葉に松葉横さを透したる赤阪四五代位むの鐔に武州住利叙の銘があつた、赤

阪の系圖を調べて見ても見えぬが、誰かの前銘か田舎の弟子作か、弟子作としては毫も師の作に劣らぬ物である。

一徳川家治世後江戸は華奢の府共云ふ可き繁昌に立ち至り、諸國の交通も日一日と便利を得諸種の工人も多く江戸に出でて修業したる物と見えて鐔の上にも著き變化が顯れて居る、今を距る百三十四年前明和前後の彫金家は江戸の伊藤を初め一家憲ありと見えたる松山正阿彌に至るまで、大體の上に於ては皆同趣同様の肉彫に象嵌を施したる物となつて居る、其後文政、天保の頃より又一變して鐔の形まで新になつて居る、意匠は斬新なれ共兩者ともに奈良物には遠く及ぶ可くもあらず、後者などは刀劍の裝飾品としては餘りに嬉敷もなき物が多い。

一伊藤家鐔と云ふと輕蔑する氣味があるが中々上手がある、諸國の肉彫鐔は此流を汲む物多きが如し。

以上は秋山先生の御説であります、其内にある如く伊藤鐔の作工は巧手が多く、仕入物と思はるる駄鐔は尠ない様に思はれます。

第二十四、赤尾 徳川時代(西暦一六〇三年乃至現今)

本邦装剣金工略誌に

『赤尾派の祖は越前なれども後江戸に移れり、小田原伊藤派と作風を異にし圓鐔圓耳にして板鐔に少許の透彫を施したるもの多く、主として鐵を用いたれども後年の作には烏銅又は素銅あり、其初代の作と認むべき無銘の鐔は明壽に酷似せるものあり』と又『赤尾派の祖吉次は埋忠明壽の門弟なりとの説あり』

とあり其次に銘は左の如きものを多しとすとあります。

赤尾甚左衛門尉、越前國赤尾甚助、赤尾吉次、赤尾吉房、越前住赤尾吉房、越前住赤尾甚拾郎、小兵衛寶曆三年、江戸住吉次、江府赤尾吉次。

此中江戸住の吉次は近代の人なりとあります。

桑原氏著金工一覽には左の系譜があります。

初代、吉次 赤尾權左衛門、越前 福井住 士なり

二代、吉次 二代より鐔工となる、通稱小兵衛、赤尾吉次と銘す、赤銅地透し多し、江戸住。

三代、吉次 赤尾小兵衛、江戸湯島天神坂下住、延享元年五月と切りたるものあり、寶曆三年歿。

啓助 赤尾家。

四代、吉次 赤尾小兵衛、江戸 下谷池之端住。

五代、喜兵衛 赤尾家、武 州四谷。

六代、秀三郎 赤尾家、武 州四谷。

七代、太七 赤尾吉次と銘す、江戸鍋町住、此人赤銅鐔工、仕入物多し 色附上手、古風本膳には美しからず、五十三歳にて歿す。

正次 赤尾太七門、生透彫もあり、堆朱俱 利彫得手なり、高橋卯兵衛と云ふ。

庄五郎 赤尾太七門、江戸八官町 住、赤尾氏、色附師。

其他の赤尾系の人左の如し、但前掲と重複するものは略す。

吉兵衛 赤尾氏、權左衛 門家、江戸住。

吉長 赤尾氏、 江戸住。

吉右衛門 赤尾氏、 越前住。

甚右衛門 赤尾氏、 越前住。

助次郎 赤尾氏、 越前住。

良幸 赤尾家。

辰壽 赤尾家門、井戸忠七、 江戸本所森下町住。

辰直

井戸氏、辰壽男、
江府住鎌工。

政秀

鈴木氏、
赤尾系か。

忠作

赤尾家、越
前國鎌工。

廣國

赤尾氏、奥州仙臺住、鐵鍛様天法
の様な打込模様のものあり。

左市

赤尾家、長曾禰と切
る、姓虎徹に同じ。

以上の内で面白い発見は、俱利彫を得意にした高橋正次が赤尾系より出たると、江府住辰壽、辰直は共に此系統の人である事で、これは意外の様に考へられます。猶忠作も記内派の様に考へられて居る作人でもあります、左市長曾禰氏は長曾禰才市と同人で、甲冑師出の人で此派と誤られたのではないかと思はれます。

寫真に掲載しました赤銅海老透しの鐺は無銘であります、古來赤尾初代と云ひ傳へられたもので、丸形角耳小肉であります。初代は埋忠明壽門と云ふを真なりとすれば、此鐺の如きは埋忠より出でて一家を成した風貌のあるもので、時代は寛永頃と肯かれ真に初代赤尾の面目躍如たるものがある様に思はれます。

又寫真の赤尾甚左衛門尉在銘鐵地丸形權に靨透し布目象嵌のある鐺は時代元祿頃と肯かれ、埋忠式に正阿彌鼻を加味した様に感じます。猶ほ先年一見の物に甚左衛門在銘で、金着丸形に美事な立鐺をつき葵紋を毛彫にした鐺がありました、之れは越前家の御用で出来ました物のやうに思はれました。

又寫真の赤尾甚助在銘鐵地丸形紋盡肉彫透しは享保頃と思はれます。

此赤尾家を考察しますと、吉次の系統は越前より江戸に移住しましたが、之れは越前家の推選により江戸へ召出された様にも思はれます、此吉次一派の物で、赤銅丸形の鐺に霞に雁の如き模様を地透しにした吉次銘の物を見ますが、勿論之れは後代の物で一般的の物ではなく、所謂大名指の小に用ひられて居りますので二三代頃と思はれます、時代の古い物のないのは幕府とか又は大名の注文の多い即ち御用鐺師の爲め、在銘品が尠ないのではあるまいかと思ひます、事實吉次銘には赤銅四分一が多く鐵鐺は稀な様に思はれます。随つて赤尾鐺で所謂鐺家の賞翫する物は、越前住の作者即ち埋忠式を失はぬ時代の作品の様に考へられます。越前住赤尾は鐵、赤銅、四分一等を地金に混用した様に思はれ、江戸移住後の物には鐵がない様に思ひますのは畢竟稀な故と考へられます。

第二十五、記内、徳川時代（西暦一六〇三年）

本邦装剣金工略誌に

『記内派は本期の初め京師より越前に移れるもの如し爾來連綿今日に及べり、初二代の作は圓形圓耳にして文字透等あり、後代の作に係る精巧なる記内と同じからず、記内は初代以來四代頃まで銘を刻まざるが故に明かに其累代の作を判明すべからず、其銘を刻むに至りしは明和頃ならん、三代頃よりは龍の圓彫最も多く、五代以下に至りては人物魚鳥其他百般の圖案を用ひ、最近に至りては秋野等の透彫最も多し。

近代の作中草花等を透彫し之を研磨して後焼を入れ銅色を現はせるものあり、美作なれども高尚ならず、又献上記内と稱するは藩主の特命に依りて製作せるものにして殊に精巧の作なり、其銘は越前住記内作と刻す。』

金工一覽には左の如くあります。

記内 越前住、同名五代あり、又江戸にて作りたるものあり。

記内 石川氏、越前住記内吉次と銘す、龍生透上工。

記内 石川氏、越前住、五代目、鐔、縁須の上手なり。

小瓢 越前住或は東都住、

忠作 越前國記内、風、明珍。

此所にも忠作があります、此作者は果して記内派か或は赤尾派か猶ほ研究を要する様と思はれます。記内の初代は刀劔の切物師であります。初代康繼、肥後大塚貞國、其他の越前刀匠の作刀には欄間透し、漣不動、俱利伽羅龍等の記内彫のある物を見ます。埋忠流の精巧に對して之れは豪放にして然かも精緻を忘れず、別に一格をなしたる越前彫法を創作しました名工であります、康繼の江戸移住に當りて其行に加はらず、依然として越前に残り、子孫が鐔師に轉化したものと思はれます、夫れ故に初代記内には鐔作はなく、又二代乃至三代と肯かれる在銘の鐔を見ませんが、果して有る物か又無い物か解り兼ねる事を遺憾とします。先年一見の物に記内權兵衛在銘の鐵丸形龍肉彫透しの大形の鐔がありました、龍の面貌其他とも記内彫と賞讃する刀劔の切物と一致して居りました、時代は元祿頃と思はれました。此種の龍の肉彫透し又は龍の形肉彫透しの鐔は、後代の記内には非常に多い物で、記内鐔と云へば龍の圖を聯想すると云ふ次第で、余りに多くある爲め或は此内にも寫し物又は偽物も混交して居りますまいかと思はれる程であります。寫真掲載の瓜の紋の大鐔は、精緻の手法ではないが誠に行届いた細工で立派な鐔師の作であります、時代は元祿頃と思はれますので、三代乃至四代の作かと思ひます、但し前記權兵衛作とは相異して居りますので別人の作

と思はれます。又寫眞の菊花肉彫の鐔及秋野蟲透し鐔は、共に精緻精巧なるもので、時代は天明頃の後代の作であります。記内鐔中の代表作と考へます。和田先生の所謂近代の作中草花等を透彫し、之を研磨し後焼を入れ鋼色を現はせる鐔に該當して居りますが、美作にて下品には見へず寧ろ上品なもので、先生の高尚ならずには當らぬ様に思はれます。勿論之れは見る人の好き嫌ひにより其批評も自ら異なりますのは止むを得ぬ次第であります。茲に記内の銘彫付につき面白い事があります、それは記内の銘は其殆んど全部が、鐔の裏面に彫付けられてあることであり、之れは昔は藩公の御用注文に對しては、作者自身卑下して一度は無銘の儘納め、御下命により更に銘彫付をしたと云ふ不文律のありましたことを承つて居りますが、彼の紀州徳川家にある南紀初代二代三代等の作刀に、無銘の澤山ある事が例證となるべきものであります。記内鐔も斯ふいふことが因をなして銘を裏面に彫付けたものかも知れません。

記内の累代中では四代が傑出して居る様に古人より承はつて居りますが、何れが確實な四代作であるか判明を缺いて居る事を頗る遺憾とします。或人は寫眞に出せる天明の作を、之れこそ四代疑いのない物で實に精巧な美術だと賞讃した事がありました。或は此後代の物を四代と稱した時代がありましたかも知れません。此時代の記内に能面を繋いだ形彫りの名作があり、又海老の丸の形肉彫透しの名品もあります。記内は新古とも多くは丸形の肉彫透しであります。偶々板鐔に鋳出し彫のものもあります。寫眞掲出の小狐作稻に鼠の鐔は寧ろ變り圖の鐔で、概ね龍の形彫透してあります。それで小狐を此鐔に因りて考察しますと、享保頃の様に思はれます。

第二十六 間 (徳川時代西暦一六〇三年乃至現今)

本邦裝劍金工略誌に

『間派は勢州龜山住にして國友姓なり、近江、國友の分派には非ざるか。鐵の圓鐔にして、角耳なり、又圓味あるあり、板鐔にして、透彫彫なく、其特徴は黝白色の合金(サハリ)を嵌入して模様を現はすに在り、又高く烏銅を嵌入したるあり、或は往々普通の象嵌を施したるものあり、左に其銘を記す。

勢州住國友貞榮寶永六年頃、貞榮、城州於流國友貞榮、勢州龜山住正榮、間、於羽州山形國友正命。

又同一の作風にして伯龍齋と銘せるものあり、何地の住人なるやを知らず』
以上は略誌の抜萃であります。金工一覽より作者名を掲出しますと左の如くあります、之れは以

上と重複する者もありますが其儘に出しました。

白龍齋

サハリ
象嵌

兼助

近江國
友住

國友

勢州龜山象嵌間
の字、貞榮作

貞榮

勢州龜山住
國友氏間派

正榮

勢州龜山
住間派

以上の數人に過ぎませんが、一體此派に於ては、間と一字銘に切る物は、貞榮と銘する者と同一人と云ふ説と別人と云ふ説との兩説がありまして、一致を欠いて居ります。元來は近江國の鐵砲師國友氏の末葉が伊勢國龜山に移住し、例の種ヶ島の銃身の象嵌より案出して、一種の合金即ち「サハリ」を象嵌した鐶を作り一派をなしたものであります。而して其初代は即ち貞榮で寶永年中の人との事でありますが、之れは先年、元祿十五年八月日と明らかに年號のある物が出ましたので一層明白になりました。作風を申しますと、眞の丸形の鐶が最も多く、平の肉を埋忠に往々見る如く布袋腹の形式で耳を薄くした物、又は角耳に耳際を自然高くなしたる物との二種あります、又撫角形に耳覆輪をなしたのもあり、前記元祿年號の鐶は木瓜形でありましたが、木瓜形は跡ない様に

思はれます、又圖様を象嵌にて現はした物と、線象嵌にて模様を現はした物と、手法に二種あります。それで圖様を現はした物には合金を流し込んだ時、高熱の「サハリ」が冷却して出來た凹みがあります、圖様には蕪とか大根とか云ふ様な野菜類、葛とか水仙とかいふ様な草花類、又は文字、輪寶、鬘斗等の圖様もあります。

銘は貞榮、正榮と銘するものは二字銘もありますが、其多くは勢州龜山住と切り所謂長銘の物であります、間と一字銘に切る物に、勢州龜山住の添へ銘ある物は曾て見た事がありません、又間と一字銘の鐶は、形状は貞榮と同様丸形の布袋腹の物を多く見ますが、寫真掲載の鐶の如く耳を鋤殘し、平に圖様を彫上げ赤銅其他の金と「サハリ」象嵌とを交へたる物もあり、又地金は鐵の代りに赤銅又は山金を用ゐ、之れに金、銀、四分一等を象嵌して模様を現はした變態の物もあります。此一派も其當時は嶄新な手法の鐶なるが故に、斯界に賞讃せられました事は想像に難くないのであります、其細工即ち製作が昔日としては容易でない爲めか永續せず、僅かに數人傳繼者を遺したに過ぎません、然るに近頃に至りまして泰西の鐶數寄に賞翫され、頗る高價になりました爲め、却て此頃に至り偽物を作製する者が出來て來たと承はりました。之れより秋山先生の龜山鐶の御説二三を左に掲げます。

「一龜山鐔も單に間と一字銘を切る物と勢州龜山住國友貞榮、或は二字銘、勢州龜山住正榮、於羽州山形國友正命作等の銘がある、時代は古くもない様だがさほりがねの象眼を入れてある、これが金銀の光かゝする象眼よりは手變りて面白い、その鐔の作りは藥研の鐔形と角耳とがあるが、角耳の方が立優りて見ゆ、たまには金を交えたる物も見ゆ。

一龜山の國友鐔は近來大に聲價を得たが、之は案外面白い出来である、一種の象眼で模様も思ひ切つたる物多く、寧ろ光る金銀象眼よりは俗氣を放れて見ゆ、前後類品なし、同家の發明なるが奇品。

一一友人遠方より來る、談偶鐔の評に涉る、友人笑て曰、君の説には大概同意を表すが、信家説と龜山鐔に對する説は不服なり（中略）、龜山鐔は地鐵不良作亦凡品なるに之を賞替せらるるは非なりと也、別後此反對の奇なるに心付細考するに（中略）、龜山鐔は高作と云ふには非れ共、地鐵も緻密にして堅く象眼に一種のかねを用ひ、大模様にして思ひ切たる作風なれば面白き鐔也、決して下劣凡品には非ざる也、反對者は不幸にも一つの不良品を見て然か言はるる事にはあらざるか、翁の見得たる三四拾枚中には地鐵の不良なる物はあらざりし也」

以上は秋山先生の御研究の一部であります

第二十七、柀屋 徳川時代西曆一六〇三年乃至現今

本邦裝劍金工略誌に。

「元祿の頃京師に柀屋なる鐔商ありて一種の華美なる鐔を出せり、其作主として歴史的人物等を透彫し之に金銀の象嵌を施したり之を柀屋鐔と稱して一時大に流行せり。柀屋派の鐔工には在銘のもの甚だ稀なれども一二の銘あるを見る皆元祿頃の人なり、左に其銘及作風の一斑を示す。

洛南住元武。鐵圓形、角耳、金銀象嵌透彫、海人水中に玉を争ふ圖。

洛南住元武造。鐵圓形、角耳、金銀象嵌透彫、源頼光、渡邊綱鬼退治の圖。

又無銘にして石橋山の圖を彫れる柀屋鐔に天明六年本阿彌が柀屋光武と鑑定したる折紙あり」

以上は金工略誌の抄録であります。一體柀屋鐔は彦根宗典を模倣した物で、一説には其偽物を作り賣り出したと云はれたものであります、夫故に昔日は柀屋鐔は宗典の偽物の如く考へられた時代もありました様に思はれます。現今京都にある旅館柀屋は其子孫と云ふ説もありますので、先日京都の岸本正之助翁に聞きました處、夫れは昔目貫を作らせて賣り出せる家で鐔の家とは違ふとの事で

ありました。柘屋鐔は無銘の最も多いもので、在銘は前掲の洛南住元武又は光武の銘を見るに過ぎませんが、時代元祿を中心として二三代は續いて居る様に思はれ、此内には宗典を偽作した者もある様に考へられますが、在銘の鐔より考察しますと、宗典とは又別種の趣きがある様に思はれます。

作風は鐵地、丸形、角耳小肉にて、形肉彫透に金銀象嵌色繪を配したる寫真イ圖の如き物と、同様の板鐔に人物模様を細密に鋤出し彫になし、之に金銀象嵌色繪を施したる寫真ロ圖の如き物との二種あります、此二圖の海人玉取りの鐔は無銘であります、之と全然同圖同様の鐔に洛南住元武在銘の物が古河家の庫中にあります、イ圖の鬼退治の鐔は宗典の精作に共通し、又後年鐵元堂鐔出現の前提とも考へられます。猶金工一覽を調べますと右元武、光武の外に左の二匠の名があります。

兼光。古藤齋京柘屋一派
彦。柘屋京都 住彦彫

第十八、宗典 徳川時代西暦一六〇六年乃至現今

本邦装劔金工略誌に

『近江彦根の人喜多川宗典と云ふもの京師に於て柘屋に類せる鐔を作り、茲に世に流行し優に一派を爲して門弟頗る多し、其作柘屋よりも更に金象嵌多く且つ人物等を回彫したり。宗典は多く京師に住したれども銘には彦根住と刻せり眞品極めて稀にして摸造多し、秀典は宗典の前銘なりと云ふ、宗典の正品は多く見る處の摸造品の如く華美ならず、透し少く彫法適勁にして其銘細く一見眞偽を辨ずべし、此派は彦根に於て大に發達し作者頗る多し左に其銘を掲ぐ。

- 江州彦根住藻柄子宗典、喜多川秀典、江州彦根中敷住喜田川善五郎、江州彦根住宗壽、同宗珍、同幽明子大地宗顯、同光義、同義道、政重、宗長、對山堂、野村包教、江州の生梅守子彦根住汝陽、藻柄子門弟勝平、北河宗運、江州彦根住久次、江州湖東軒、簡居吉房、玄珠子往永、彫遊堂公利。

以下金工一覽より掲出します。

- 宗典 喜多川氏、藻梅子、京都八幡町産江州彦根住初名秀典
- 宗典 喜多川二代目江州彦根住藻柄子と號す
- 宗賢 喜多川善五郎宗賢製と銘す宗典派
- 宗顯 野村宗九郎江州彦根包教門幽明子と號す

包教

喜多川宗典門野村三郎次又三郎兵衛彦根の産江戸住英子と號す享保年中

兼胤

喜多川宗典門吉川氏藻桐子

吉武

宗典門江州住筒井氏鈔工

金乘

野村氏江州彦根喜多川家

幽明子

宗典派宗久江州彦根住

秀典

喜多川氏京師彦根江州彦根住藤頭小柄等に彦根彫と稱するもの此人より始む後宗典と改む

以上は金工略誌の抄録であります。金工一覽の記事を掲げた爲め、作名の重複したものがあつてすから其積りにて御覽下さる様願ひます。

以上作品により考察しますと、宗典は初名秀典と云ひたる者を初代とし、二代同名の二匠がある事になり、他は皆師弟關係がある様に思はれます。時代は元祿頃より始まり、時好に適したる爲め一派頗る盛大に發達したるもの如く、其僞作贗造する者椋屋一派を初めとして諸國に頗る多く、爲めに名聲を損じたる感があります。會津邊にて造りました僞物には實に見るに堪へ兼ねる粗製の仕入れ物があります。

作風を申し上げますと、秀典には寫真イ圖の如き赤銅地丸形の板鐔に金銀色繪を配した、薄肉高彫象嵌毛彫を交へたる物と、鐵地形肉彫透に金銀色繪を配したる雲中雷神の圖の鐔の如き物との二種あります。又宗典にも鐵地、丸形、角耳の寫真口圖の如き形肉彫透しに金銀色繪をなしたる物と、寫真ハ圖の如き同様同形の板鐔に、鋤出し肉彫に金銀色繪象嵌の配色に毛彫及透彫を交へたる物との二種があり、圖様は唐人物山水が最も多く、武者人形も相當多く見ますが、之れは僞物にも最も多くある圖様であります。又稀れには赤銅地丸形の鐔に押合菊又は秋草を彫り、之に金色繪を配したる物があります。又之れと同様の線頭も稀に見る事があります。秀典、宗典共に銘字の下に製の字を付け作及造は用ひぬ様に思はれます。又以上にある門人作の多くは形肉彫透しに金銀色繪を配したる唐人物の圖様を多く見ますが、此形肉彫透しに配色したものが時好に最も適合したかの様に思はれます。鐔の形状は師弟共此一派に限り丸形のみでありまして、木瓜其他形變りの物を見ません。弟子作の内にては野村包教、喜多川宗賢、大地宗顯等傑出し、筒居吉房も亦た捨難い上手であります。之れより秋山先生の宗典の御感想の一部を掲載致します。

『江州物と云ふと直ちに彦根の宗典を説く事になつて居るが、此國は京師に接近したる大國である故に鐔の作人も多き様也、國所不判明の透鐔などには此國の産出も多かる可し、同好者の

大に注目すべき圖である。因に云ふ、此頃彦根住大五郎と銘を彫りたる箆形の鐔を見る、京都の太文字屋五郎兵衛とは勿論別人の事なる可し。

宗典の如きは上方仕入物のみにして殆んど實物に接せず。

薩摩物の内では小田直教の肉彫を以て優れりとす、此作の宇治川先渡の肉彫鐔を見る、左に橋架を彫り之に平金象眼を施し、右の上部に騎兵三人を彫り佐々木梶原をも同肉に彫り居るで、此圖の主眼點は奈邊にあるか知るに由なし、此圖は狩野家にもある圖なるが、佐々木を川中に梶原を岸に畫いて他物を多く加えず、恰も金家の彫法に似たり、此直教の彫刻は宗典の風なるかも知れず、爰らは慥に研究す可き點なり。

彫刻鐔を細調して見ると、金家風に見ゆると宗典風に見ゆる區別がある、金家風は雅致に富み宗典風は總て劣る(下略)。

以上は秋山先生の説の一部であります。之れより桑原先生の宗典の説の一部を左に掲げます。

『喜多川宗典の得意とせし圖案は恰んど道釋列仙遊戯圖或は軍士交戦の圖に限ると云ふを得べし、尤も世上見る所は十中八九は贋作なれども、能くも同一なる圖柄が宗典作として普及せしものよと感嘆す、往々群馬の圖あり一種の風姿あるものなり。而して軍士、列山、群馬に限らず其の構圖は下部より、上部に重疊するの習癖あれども割合に姿勢に無理なることなし』

以上桑原先生の宗典説の一端であります。

第二十九、金家派 過度時代(西曆一五七三年乃至一六〇二年) 徳川時代(西曆一六〇三年乃至現今)

本邦装剣金工略誌には以上兩期に分けてありまして、其過度時代の部に

『金家派、眞の金家系は足利時代に其跡を絶ち、本期に入りては、金家を摸したる鐔工各地に起れり、天正の頃(一五八〇年頃)京師に鐵仁と云ふものあり、之を金家の系統と稱すれども直系に非ざるべし、其作を観るに地鐵厚く圓鐔にして摸様は金家を摸したれども拙劣にして賞すべきものなし』

徳川時代の部にては

『金家は鐔工中第一の名工なれども、其家は足利時代に於て早く跡を絶ち、前期に鐵仁あれども其技遠く及ばず、本期に至りては各地に金家風の鐔工起れり、然れども金家式の意匠は技術巧妙にして始めて他の企及すべからざる妙品を成せども、其技にして拙なる時は卑陋却つて見るに堪へず、後世の工人は皆此類にして一も往時の金家に比すべき名作を出さず、銘左の如し。

山城國藤原金定、肥前住包明、肥州住家廣、肥前國佐賀住家次、明長、肥州須古住釘本彌左衛門、萩住岡田甚左衛門、江戸住金定。

此他、會津の鐔兼長も亦金家式を摸せり、又左の銘あるものに類似の作あり。

肥後住弘天、山城住柴本道作、廣政住所不明、照重住所不明

以上掲載されて居ります、此内の伏見住金定の作は過度時代に屬するもので、其作柄に優劣の差はありますが、金家の直弟と肯かれるものがあります。寫眞に掲出した雁の鐔は、銘字を現はす爲めに裏面を出しましたが、表面は唐人物で、名人金家に彷彿した處があり、殊に銘字は徳川期の書體ではない様に思はれます。過度期に於ては所謂金家ねらひの摸作、偽造品も相當にある様に思はれ、中には夫れを出發點として一派の風格を作りました工人もある様に思はれます。和田先生の過度期の人として出された鐵仁は、却て徳川期に屬する人の様に思はれます、作風に於きましても鐵仁の丸形の鐔に山水人物を彫刻し金銀の配色をなした厚手の物に、表に山城國伏見住金家と切り裏に鐵仁作とある物は、初二代の金家よりは元祿頃の正阿彌作に酷似の物がありますので、私は元祿頃の作人ではないかと考へます、最も鐵仁にも以上の如き正阿彌風の物と、又鐵地に透しをなし甲冑師風で、鐵地を磨き金家風とは思はれない物との二様があり、後者には鐵仁の二字在銘を見ます

が、書風も全然相異して居りますので、或は鐵仁にも亦二三代の工匠が居りましたのかも知れませぬ。猶ほ金家の子孫は肥前國に移住して繁榮したとの事で、後世の作に肥前金家の稱があります。

金工鐔寄に

金家、二代鐵仁、青木重兵衛、後肥後に召出さる兵衛の達人也と云、數代細工を止む、同所運池にも門あり、同風、此作地鐵鍛よく、地村有、模様低し、眞鍮象嵌用ゆ、初はいかが成べし當時地鐵よきはにつとりとして古今の味なり、天正の頃か、四五百年にも及ぶ古さに見ゆ、今世に出で世上一統に是を好む、價貴き事無類なり。

弘天、金家風、味似たり蓮池一門なりと云ふ。

金定、門、品劣る。

鐵陸、金家末流九代政常、雲龍生透、五十嵐と銘す。

此金工鐔寄の記事は、二代金家即ち名人初代と鐵仁と混同したる様に考へられます。寫眞に掲出した巻物の圖の鐔は、肥前金家の標本と思はれるもので時代も元祿頃と肯かれます、猶ほ此種肥前金家の鐔は殆んど圓形の厚手にて、圖様は山水、花鳥、又人物等もあります。肥前の家廣、釘本彌左其他の工匠は皆此肥前金家有縁の人と思はれます。

輸入品として其珍奇を喜び、一時大に流行し、内地に於て之を模造せるもの甚だ多し、長崎、平戸、博多、京師、會津等の製を主とす。

(一)、南蠻鐶、圓形の板鐶角耳にして薄く、且比較的大なり、之に銀の布目象嵌を以て文字、易卦、唐草等を現はせり、一種の地鐵にして、彼の俗稱鎌倉鐶と均しく錆を生ずること甚だ稀にして且光澤を發せず、輸入品尙稀に存す。

(二)、漢東鐶、(三)、漢南鐶、兩種共に圓形、土手耳の透鐶なり、稀に他の形あり、兩者の別漢東鐶は、鐶の上下左右に龍、唐草又は人物等を相對に彫り、漢南鐶は相對的の圖案を用ひずして不規則に排置したり、往々眞珠又は他の寶石を嵌入せるもあり、稀に銘を刻めるを見る左に其一二を示す。

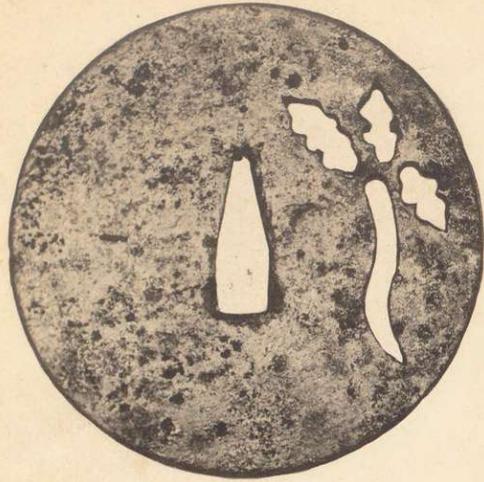
大明彭城府徐沈(輸入品)長崎住鬼武利吉郎祐勝、肥前住兼定、肥前住重三、長崎山田市郎兵衛信國光昌、埋忠就昌。

各地鐶工の部に、長崎の鐶工は南蠻等の模作を主とし、自己の意匠に成れるもの少し多くは鐵を用ひ圓形角耳を常とす、既に記載せるものの外尙左の銘あるものあり。

長崎住岩次郎、長崎住辻氏、長崎住鬼武利昌。

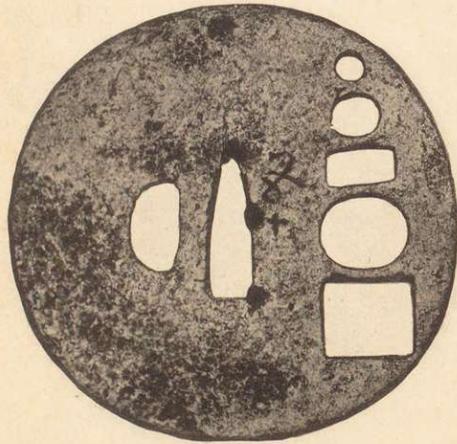
以上の如く和田先生は南蠻鐶を三種に別けてありますが、之れは或は泰西の辭書に因られたものでありますか、日本では昔より南蠻とのみ唱へて居りました様に思はれます。傳説に因りますと、清國より工人を長崎に伴ひ來りて鐶を製作させ、其住居の地を金屋町、銀屋町と命名したと云はれて居ります、これによりますと町名も金細工、銀象嵌等の製作に因り呼び習はせられた様にも解されます。現今でも金屋町とは申しませねが、銀象嵌の鐶に銀屋町の稱呼が残つて居ります。南蠻と稱するより考へまして、單に清人の作とのみ考へます事はどうかとも思ひます、或は初めは和蘭陀船を通じて貿易に輸入され、紅毛人の細工として珍重されそれより南蠻の名稱が起りました様に解されます、それの中には印度、波斯方面に類似の物のある様に思はれます。又朝鮮の鐶として贈られた物に銀象嵌の類似の鐶があります、外國人の作と思はれる鐶には、地鐵の良好とか細工の精巧とか云ふ様な事で感服する程の物はない様に思はれますが、珍奇を好む世人に歓迎せられ忽ち一世を風靡した感があり、爲めに本邦各地各流に模造する者頗多く、之れ等には一々銘を刻まざるが故に正確に知る事能はざれども、其内には地鐵の良好なる物又細工の精緻なものを見る事があります、それから透鐶には鐵を用ひず赤銅又は四分一を以て模造したるものもあります。南蠻鐶の流行したるは元祿以後と思はれますが、其の最盛期を明確にしません事を頗る遺憾に思ひます、南蠻

第一圖



刀匠鐺（一號）
鐵、丸形、大根透シ。

古川家藏



同上（二號）
鐵、丸形、五輪塔透シ。

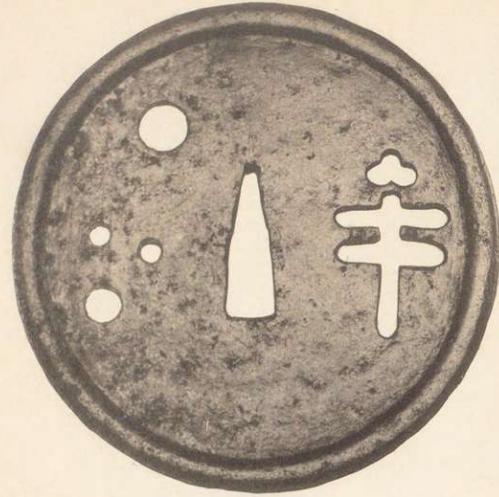
同上

日本鐺工錄前編 終

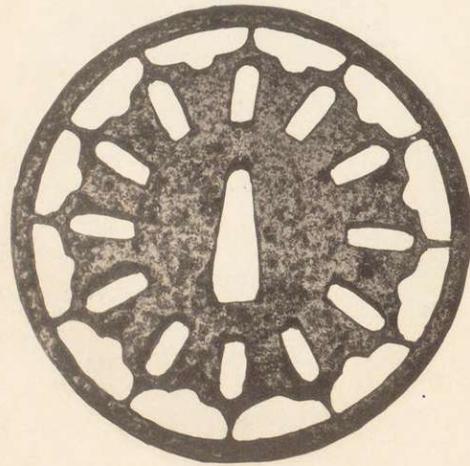
透の鐺は殆んど全部金摺付象嵌の配色あるもので中に七寶を入れたものがあり、又耳を珠繋ぎとし
其中に玉を入れ打振ると音を立てる物もあります。

前記略誌中にある信國光昌は筑前の刀匠より出でたる鐺工、又理忠就昌は江戸の鐺工で共に模造
品の在銘の鐺より撰んで掲げられたもので、従つて肥前長崎の南蠻鐺工ではないのであります。寫
真掲載の菊水銀象嵌の鐺は椀形をなし地鐵良好な物、同龍虎梅竹の鐺は普通見る處の南蠻透して、
又龍唐草の透し鐺は赤銅で之れは江戸伊藤派の模作かと思ひます。

圖 二 第

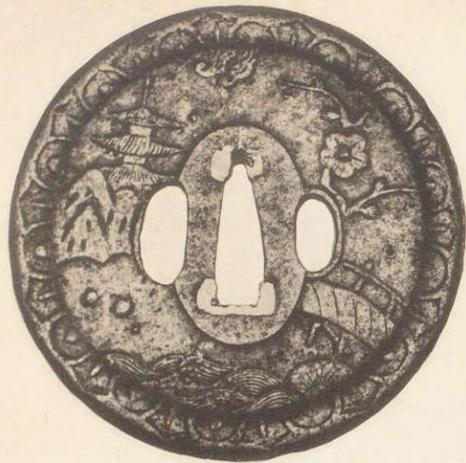


甲冑師鐔 (一號)
鐵、丸形、土手耳、三光ニ蜻蛉透シ。
古川家藏



同 上 (二號)
鐵、丸形、輪寶透シ。
同 上

圖 三 第

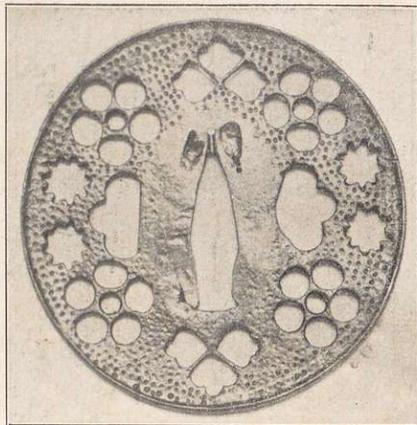


鎌倉鐺（一號）
鐵、丸形、土手耳、鋤出シ、橋に塔。
古川家藏



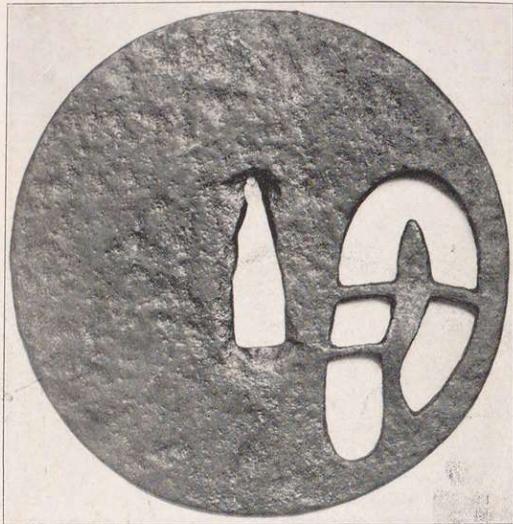
同 上（二號）
鐵、丸形、鋤出シ毛彫、山ニ華表及塔。
同 上

(圖一第)



古甲冑師鐘

鐵地に極めて薄手の板鐘(厚さ五厘位)耳は打返しになつて所謂桶形である、角耳、梅と花菱と雪形の透し、それに地一面の粟粒の打ち込みがある。此の鑿穴は後から明けたものでない事は、其の傍の透しをわざ／＼雪輪形にしたのでも合點される。それに前號の「近世刀劍風俗史」にもあつた通りに、鑿穴が平行でなく上部で稍接近して八字形を爲してゐる等の點で、此鐘は時代を足利中期と見て大差あるまい、然には之でもう少し大きいと素的である、本誌第十卷第三號の口繪第三圖の鐘と同時代同系のものである。



(第三圖) 古甲冑師鐘
(實物大)

鐵地極目仕立角耳、魚の透し模様、此の魚は目玉とあごを一寸毛彫してあるので魚である事が判る、其の圖案と共に何等技巧のない點、如何にも時代古く面白い、素人の作らしい點は次の第四圖第五圖よりも古く思はれるけれど、之は時代の差によつて技巧の違ふのではなく、國の相違つまり都會の甲冑師と田舎の甲冑師の相違であらう。

(圖二第)



京金山鐘

此の鐘は寫眞でも分る如く耳に鐵骨が現はれてゐる、鐵骨の現はれたのは金山鐘であるが、此鐘は少し若い様に思はれるから、金山を京で模造した京金山として置く。さて此の圖案を何と見るか、帽子を被つて洋服を着た人物が、種々の樂器を敲いたり、吹いたりしてゐる、旗を持つた人も居れば、興の様なものを擔いでゐる、所謂南蠻繪屏風から脱け出た「南蠻紅毛人の行列」である、次に下部にあるは何か、唐扇と唐枕であつて、邯鄲の夢を現してある、つまり支那の「邯鄲」を南蠻化したのである。



(第四圖)

古甲冑師鐺

(實物大)

此の鐺は少し有名になり過ぎた鐺である、薄い鐵地に粟の打ち込み耳を角にして桶底とし、文字も猪と透しが巧妙過ぎる、けれども時代は足利初期から鎌倉期へかゝらうとするもの、前にも言つた如く技巧の卓抜なるは都に住んでゐた甲冑師作であるがためであらう。



(第五圖)

古甲冑師鐺

(實物大)

薄い鐵地、總目仕立て、土手耳(此の中は空虚である)、花紋に草、多分星辰だらうと思はれるものを透してある、其の技巧は拙ないが如くにして巧妙で、鑿穴も左右の透しの調子から考へると後であけたものでなく、元からのものと考へられる、時代は第四圖と餘り遠く去らざるもの、秋山翁は京の堀川明珍であらうとの説である。



(第二圖) 甲冑師鐘

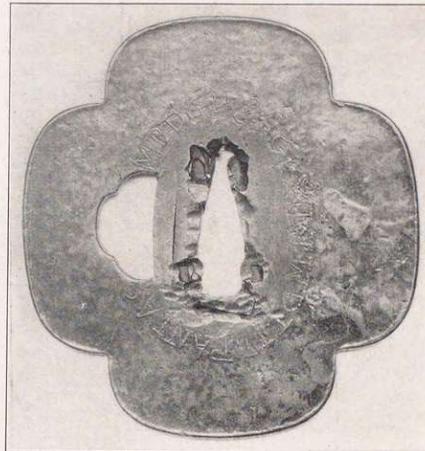
鐵地放牛の地透し鐔、牛の眼、口、角等に少しく毛影を加へてある、一見した所尾張の古い所と見えるものであるが、秋山翁は甲冑師と鑑定せられて愛藏して居られる。其の何れにしても時代は古く鐵味にも圖樣にも古雅撫すべきものがある、此の圖では覆輪があるが、今は秋山翁はそれを取り去つて一段と好くなつた、鐔は兎角覆輪がない方が好い。



(第六圖) 後藤泰乘大小鐘

(實物大)

烏銅七子地へ金銀色繪象嵌の宇治川合戦の圖、此種武者物の鐔縁頭は世上に澤山にある、けれども多くは無銘で、上方の作だと言はれ水戸の高瀬一派の作とも言はれてゐる。泰乘は即乘の五男で養乘とも云ふ、元祿十四年六月二十七日七十一歳にて死す。



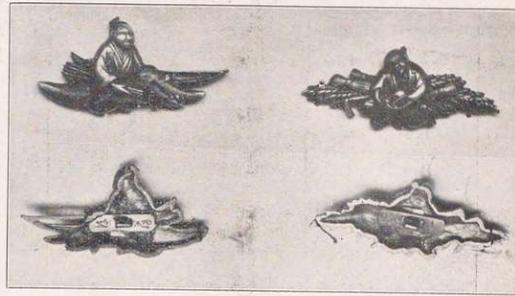
(第二圖) 平田彦三洋文字鐺

木瓜形素銅地へ鉛で和蘭陀文字を象嵌してある
此鐺は記者が先年熊本で一見して欲しいものだ
と思つたが、手に入る能はずして終つた。數年
後網屋總右衛門氏の右に歸したが、去る十月の
同氏刀劍大會の出品中にあつたので、記者が割
愛して買つて漸く多年の希望を達したものであ
る、切羽蓋の周圍にある洋文字は何の意味をも
爲さない、或は當時の切支丹所用のものではな
いかと思ふけれど不明である、識者の高教を仰
ぎたい。



(第三圖) 南蠻洋字鐺

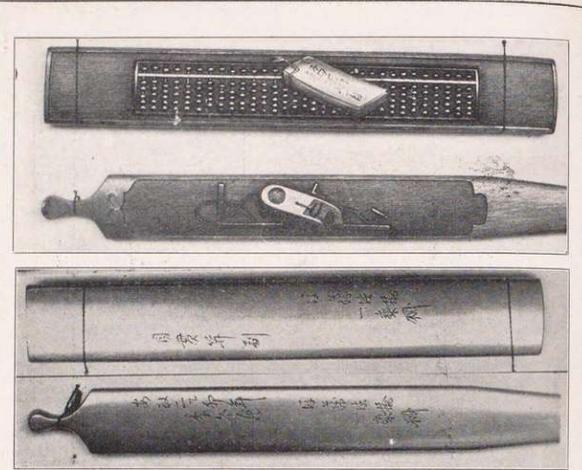
鐵地土手耳の鐺、洋文字と唐草風のものと十字
とを銀象嵌し、土手耳の内輪に素銅の輪の象嵌
がある、洋文字はWばかりで十字が二三ヶ所あ
る、唐草風のは洋字の草書を摸したものと
見える、それ等の點で此鐺は銀屋町の製作でな
いかと思はれるが、秋田翁は支那渡來の南蠻鐺
であらうとお説である、成程素銅の線の象嵌
などから察して翁の説が確であらう。



(第四圖)

後藤一乗作士農工商の三所物

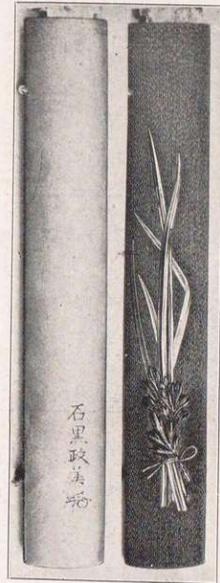
上圖の右は稲を蒔つてゐる農、左は弓を持つた士、其下は目貫裏の銘を見せてある(擴大鏡で見れば細部も好く判るであらう)、一乗は近代の巨匠であつて、此目貫の如きは好く人物の顔面表情に至るまで現はして妙を得てゐる。此の目貫は何れも金無垢漆の上に色繪を施したるもの。



(第五圖)

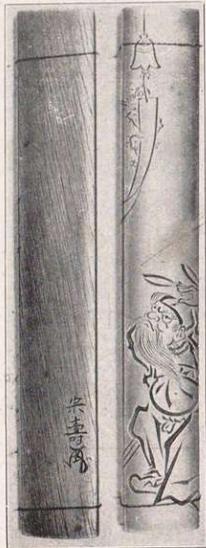
同上

上は算盤と帳とで商、下は大工道具で工、銘は目貫算刻後藤法橋一乗、安政二乙卯年冬季後藤法橋一乗とある、第四圖と同作のもので、目貫に人物を現はしたるに反し、柄箒に少しも人間を出さずして、士農工商を利かせた所は、最も好く幕末期の細工人の洒落氣分を出してゐる、氣が利いてゐるとか面白いかいふ事の外に、時代の氣分が好く現はれてゐる。



(第六圖) 石黒政美作小柄

四分一七子地へ五月節句の模様、石黒一派の得意とする花鳥を避けて、あつさりやつてのけたのは注文者の希望のためか、兎に角仕勝手悪いものを斯くまで納り好く置いたのは流石に名人の行くとして可ならざる手腕を偲ばせる、政美は政常の門にて壽岳齋と號す、門人中の逸材である、江戸芝口露月町に住す、七十歳以上長命の男である。



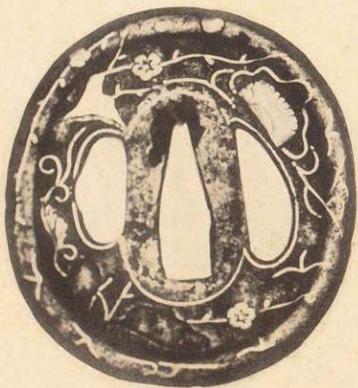
(第七圖) 横谷宗壽作小柄

四分一地へ片切彫にて鐘籠に鬼、兎に横谷獨特の鐘、横谷派には唐人物仙人などの片切彫が多いが、之は鐘籠が鬼の行方を探してゐると、鬼は風鈴の紙につかまつてゐるといふ滑稽なる圖案、之も元祿氣分の多分に溢れたもの、宗壽は宗現門で英精の親といふ、享保十九年八十四歳にて死す。

圖 四 第



應仁鐺 (一號) 自家藏
鐵、丸形、真鍮据紋、丸ニ三ツ引紋及橘。



同 上 (二號) 古川家藏
鐵、長丸形、土手耳、真鍮据紋、梅ニ鶯。

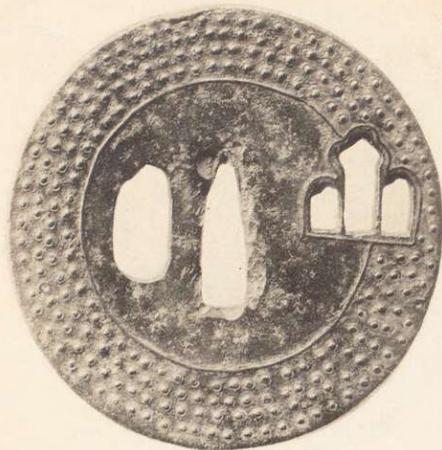


(第八圖)

會津兼祐作鐺

由來會津鐺と言へば駄物の本場鳥物の本家のやうに言はれてゐるが、會津にもなかく名人のある事を見逃す譯には行かぬ。此鐺は鐵地へ四分一と烏銅の象嵌、會津は烏銅を多く使ふのな一特長とするが、之には異例として四分一の方が多し、銘は陸奥會陽住正阿彌兼祐とある。

第五圖



應仁鐔 (三號) 自家藏
鐵、丸形、山形透シ、真鍮据紋點象嵌。



同上 (四號) 同上
鐵、撫角形、土手耳、真鍮及銅据紋線象嵌。

圖六第



平安城象嵌鐸（一號）
鐵、丸形、土手耳鋤出シ、真鍮据紋、山形ニ菊。

今村家藏



鐵、丸形、耳打返シ、酸漿透シ、真鍮及銅据紋。

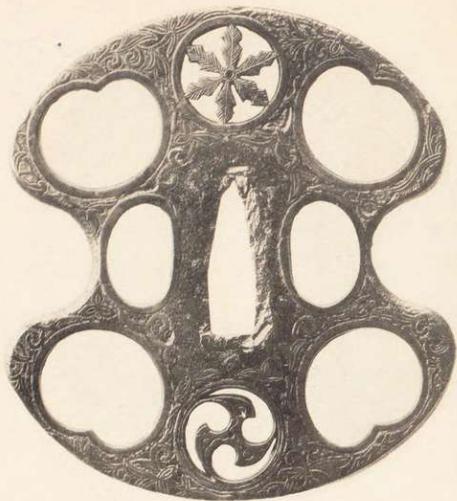
同

上（二號）

同

上

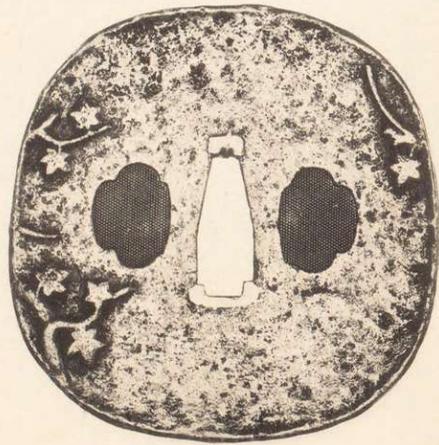
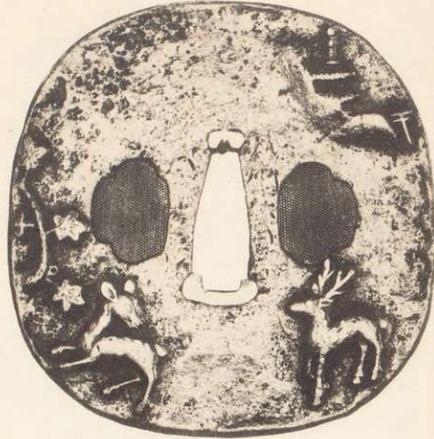
第七圖



與四郎
鐵、分銅形、紋透シ、真鍮平象嵌、唐草模様。

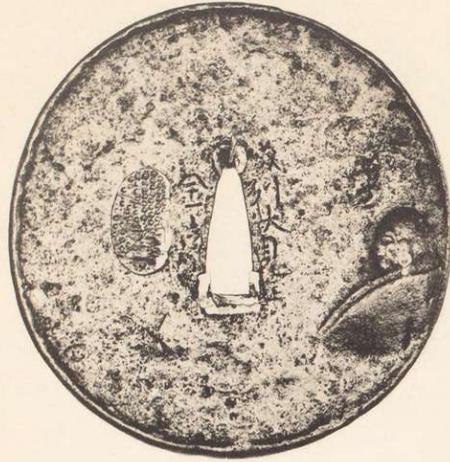
今村家藏

圖 八 第



金 家 (大初代) (一號)
城州伏見住金家在銘、鐵撫角形、象嵌色繪高彫、鹿ニ紅葉ノ圖。(名物春日鐙)。
細川侯爵家藏

第九圖



金家 (大初代) (二號)

城州伏見住金家在銘、鐵丸形、色繪高彫、達磨ノ圖。此鐺亦タ名物達磨鐺トテ有名ナルモノナリ

古河男爵家藏

第十圖



金家 (名人初代) (三號)

山城國伏見住金家在銘、鐵木瓜形、赤銅覆輪、象嵌色繪、高彫ニ毛彫、張果良ノ圖。

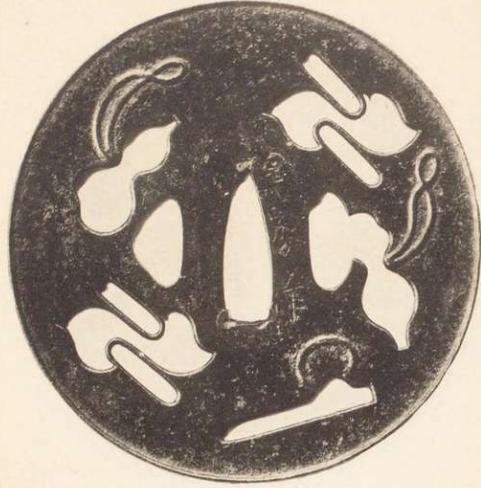
古河男爵家藏

第十圖



金家 (名人初代) (四號)
山城國伏見住金家在銘、鐵、長丸形、赤銅覆輪、象嵌色繪、高彫ニ毛彫、樓閣ニ人物ノ圖。
古河男爵家藏

圖二十第



金 家 (世ニ三代ト稱スルモノ) (五 號)

金家作在銘、鐵丸形、耳打返シ、瓢箪透シ、紐彫上ゲ。

今 村 家 藏

圖三十第



信家 (一號)
信家在銘、鐵丸形、耳打返シ、毛彫、梅樹ノ圖。

古河男爵家藏

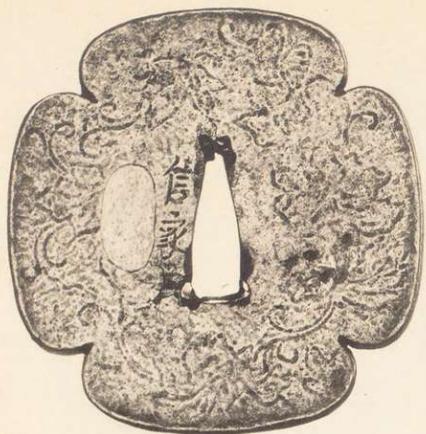
圖四十第



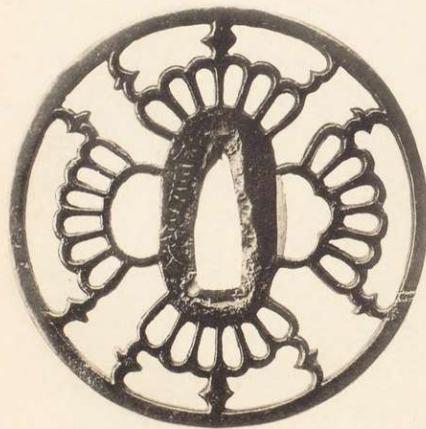
信家
（二號）
信家在銘、鐵木瓜形、耳打打返シ、斧透シ題目毛彫。

根津家藏

圖五十第

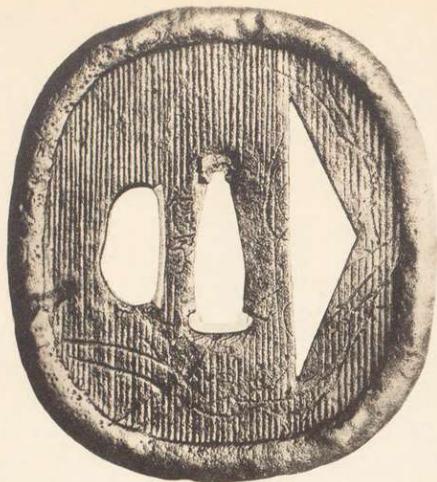


信家 (三號)
信家在銘、鐵木瓜形、耳打返シ、毛彫、牡丹唐草。
自家藏



同上 (四號)
信家在銘、鐵丸形、菊ニ雁金透シ。
自家藏

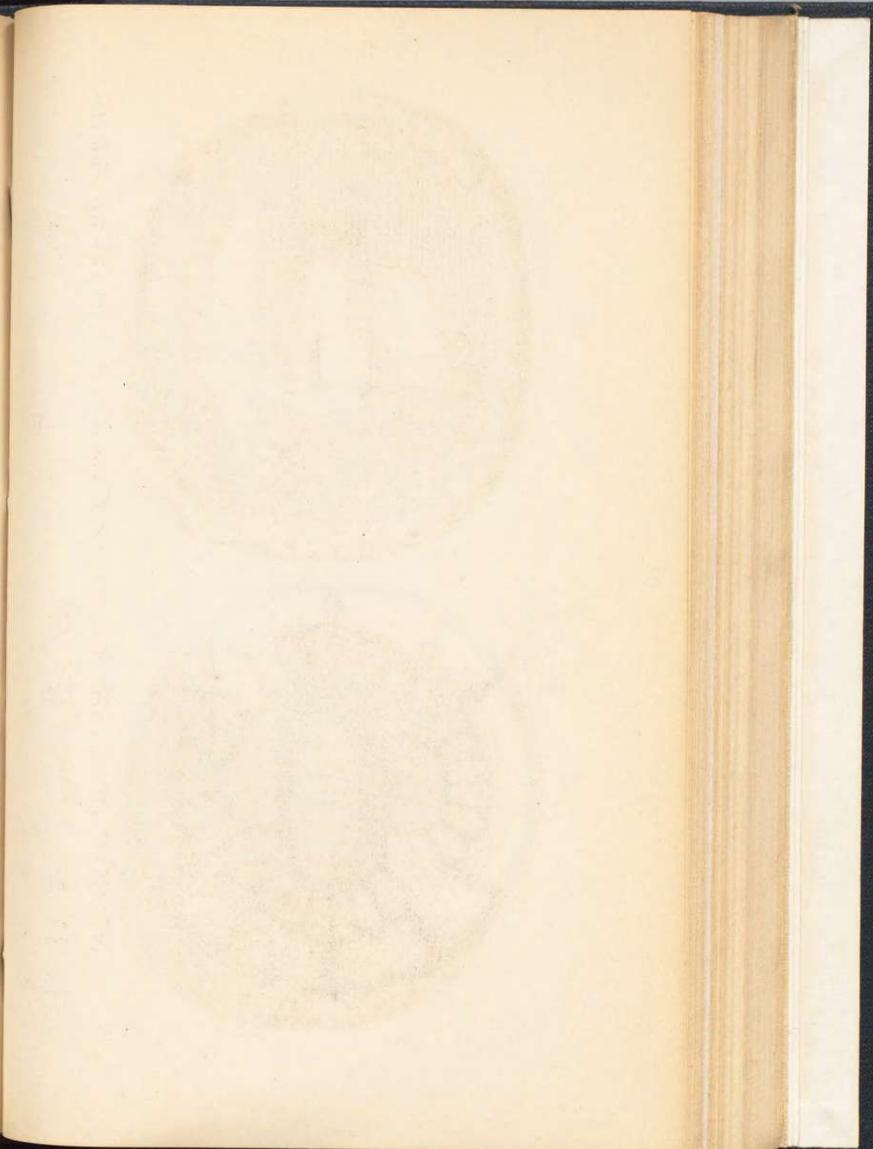
圖六十第



信家 (五號)
古河男爵家藏
信家在銘、鐵土手耳、毛彫、笠透シ。



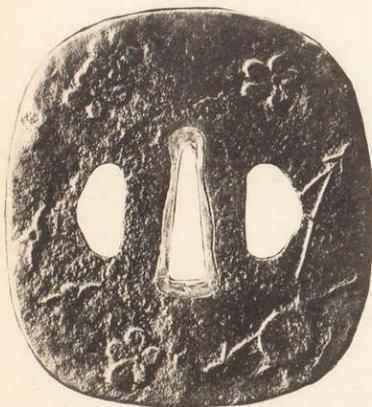
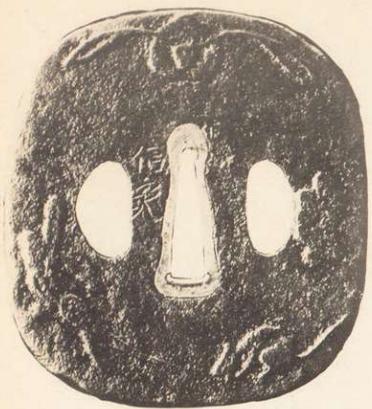
同上 (六號)
根津家藏
藝州住信家在銘、鐵撫角形、毛彫竹ニ虎。



一 信 家 鐔

銘に曰く信家、鉄、表に兔、鼠、梅花及蕪、裏梅花に松葉の圖。

小泉策太郎君藏



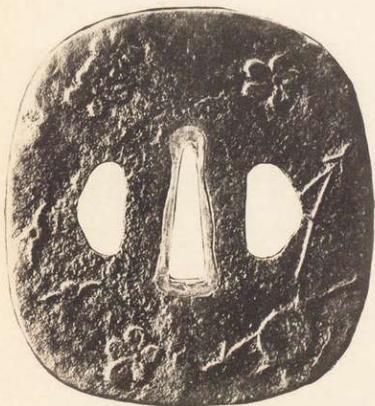
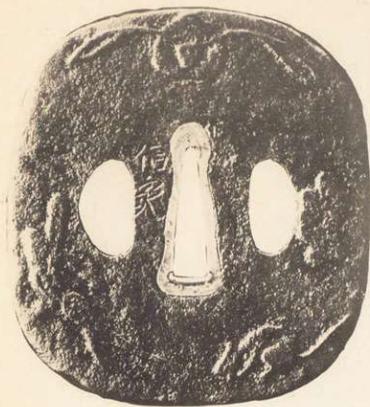
一角合口拵 (家康公指料模造)

目貫赤銅古代模様、小柄赤銅刻み銅紋、筭赤銅七子地色繪樋に葵紋、柄出絞栗色塗、鞘黒刷毛目塗。

小倉惣右衛門君藏

一信家 鐺

銘に曰く信家、鉄、表に兔、鼠、梅花及燕、裏梅花に松葉の圖。



小泉策太郎君藏

一角合口拵 (家康公指料模造)

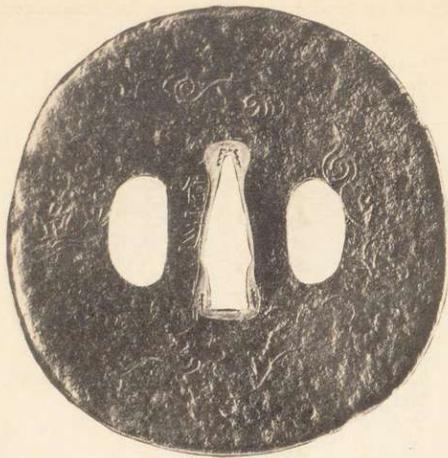
目貫赤銅古代模様、小柄赤銅刻み銅紋、筭赤銅七子地色繪樋に菱紋、柄出鯨栗色塗、鞘黒刷毛目塗。

小倉惣右衛門君藏

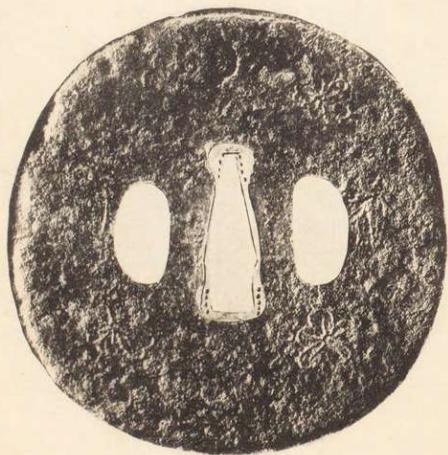


一、信家 鐺

鐵、丸形、表蔓草、裏梅花に櫻花の模様。



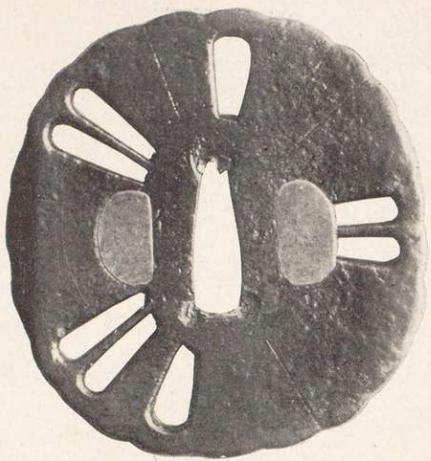
小泉策太郎君藏



上明珍信家作

「秋山翁箱書」明珍信家鐔は地獄時代同一に見て銘振共五六相異の物あり余は此銘を愛す 昭和三年十一月十日記 秋山白賁 歳八十五

須藤宗次郎氏藏

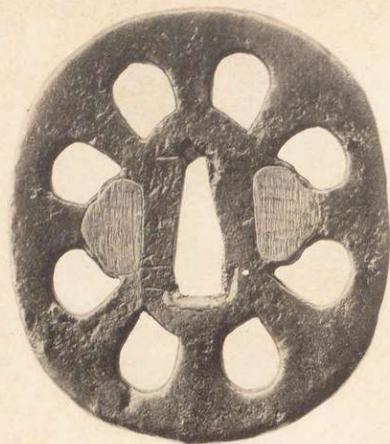


下埋忠とも云

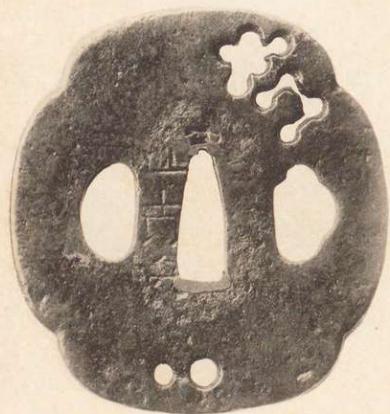
徳の右に湖州孫家造とあり地がね山金この裏四分一の波、廻り赤銅に金唐草象嵌入赤銅覆輪

羽澤文庫藏

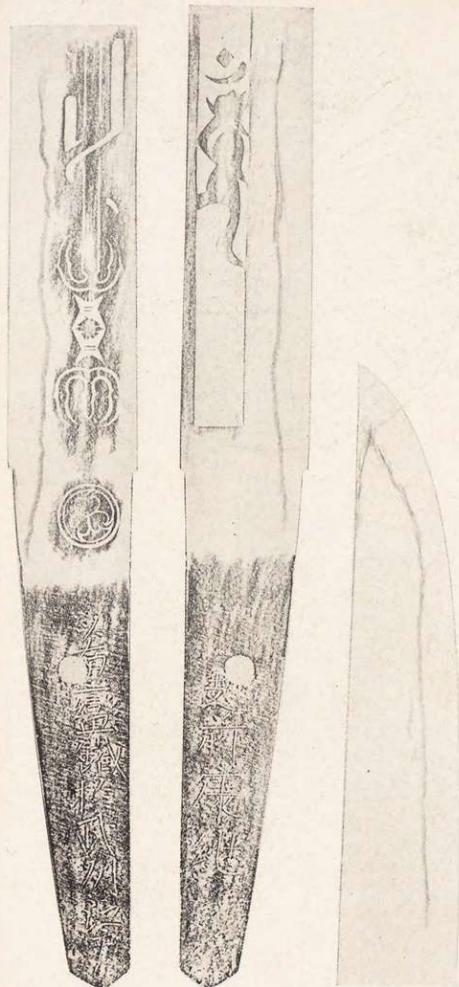
圖七十第



山吉 (初代) (一號) 金森一吉君藏
山坂吉兵在銘、鐵、長丸形、菊透シ。



同 上 (二號) 同 上
山吉兵在銘、鐵、木瓜形、水玉透シ。



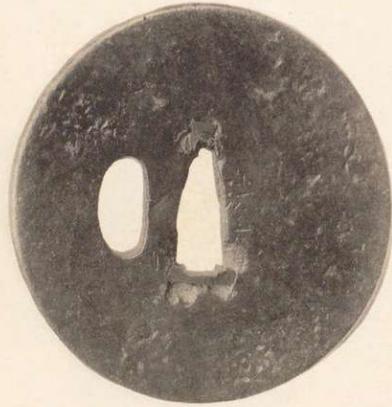
以南蠻鐵於武州江戸越前康繼(初代)短刀

能勢邦士氏藏

圖八十第

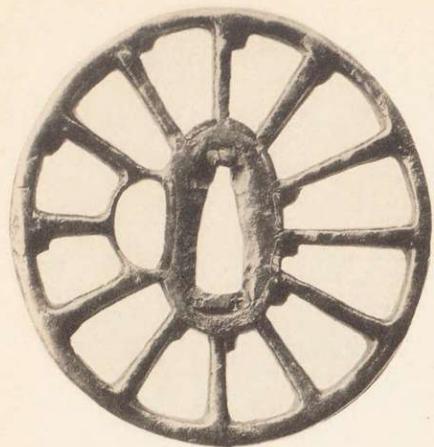


法 安 (二號) 金森一吉君藏
法安在銘、鐵、丸形、車透シ、鋤出シ彫、燒手
仕上、網目。

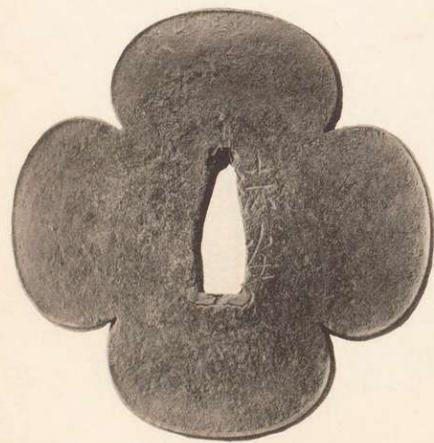


同 上 (三號) 自家藏
法安在銘、鐵、丸形、鋤出シ彫、燒手
仕上、表題目、裏枯木ニ鴉ノ圖。

圖九十第

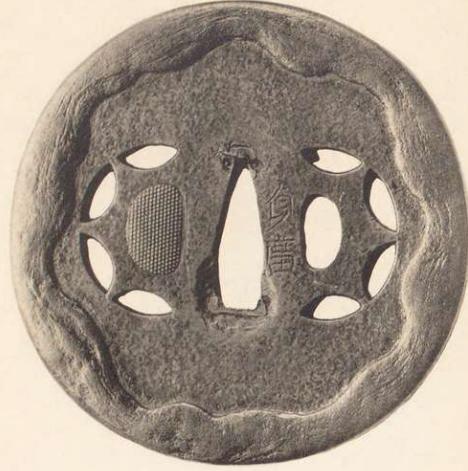


法 安 (三號) 宗伯爵家藏
無銘、鐵、丸形、車透シ。



同 上 (四號) 自家藏
法安在銘、鐵、木瓜形、耳打返シ。

第十二圖



貞 廣 (二號)
 金森一吉君藏
 貞廣在銘、鐵耳丸形、平真鍮槌目地、左右透シ。

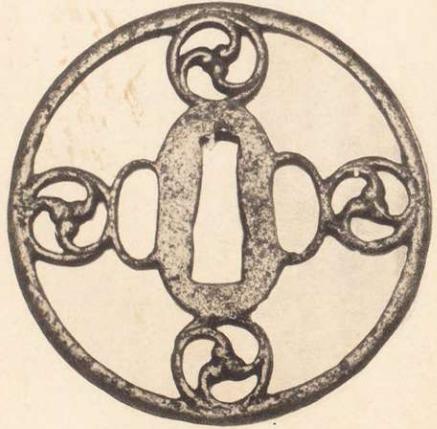


同 上 (二號)
 同 上
 貞廣在銘、鐵、菊形、表離ニ菊及鈴虫
 裏山ニ馬ノ圖、鋤出シ彫。

圖一十二第

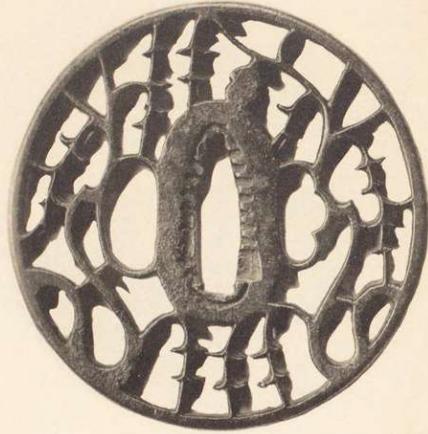


平安城透（一號） 自家藏
鐵、撫角形、花菱、雁金、扇透シ。



同 上（二號） 古河男爵家藏
鐵、丸形、巴透シ。

圖二十二第



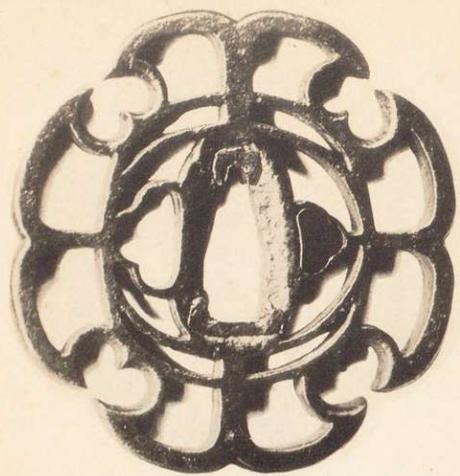
平安城透(三號) 自家藏
鐵、丸形、柳ニ蹴鞠透シ。

圖三十二第



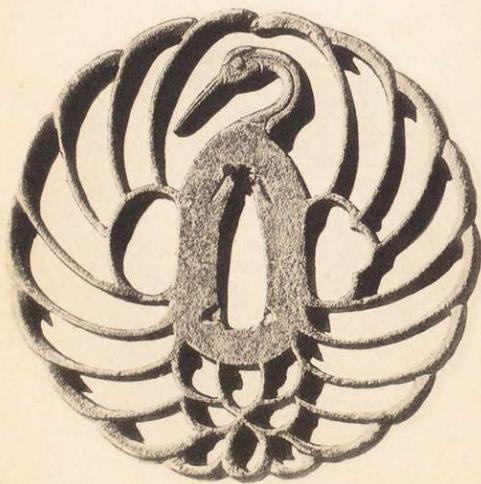
古 萩
鐵、丸形、菊透シ。

自 家 藏



尾張透シ
鐵、太刀木瓜形、透シ。

自家藏



同 上
鐵、丸形、鶴丸透シ。

自家藏

圖四十二第



金 山 (一號)
鐵、丸形、茗荷ニ星透シ。
自家藏



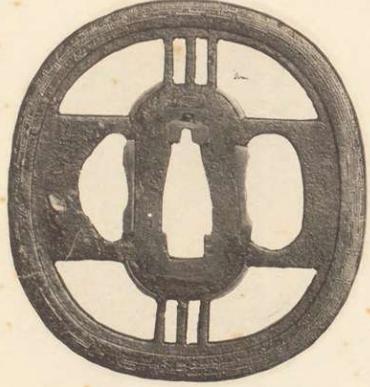
同 上 (二號)
鐵、丸形、橘透シ。
金森一吉君藏

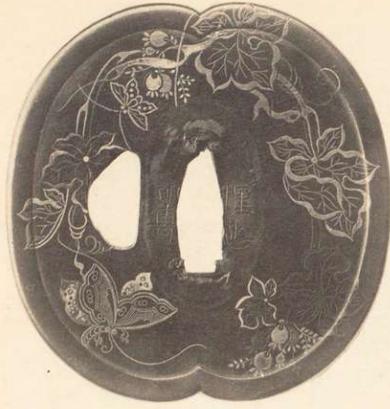


一
埋
忠
明
壽
作
鐸



候
爵
山
内
豊
景
君
藏

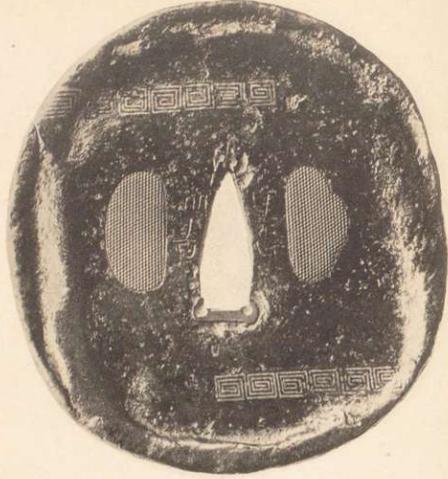




一埋忠明壽作 鐺
銘に曰く 埋忠明壽、赤銅地金銀銅象嵌葡萄に蝶の圖。



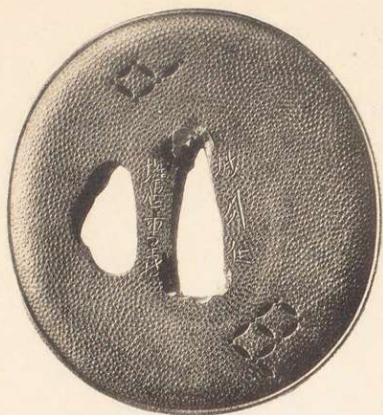
山内侯爵家藏



埋忠明壽
鐵、丸形、凹凸地、横霞雷紋金象嵌。
自家藏



同上
真鍮、丸形、耳赤銅覆輪、
金赤銅素銅象嵌、葡萄ノ圖
自家藏



埋忠重義

赤銅、丸形、布袋腹、耳玉小縁、槌目地、七寶小透シ。

自家藏



埋忠七左

表鐵、裏金、六角形、耳金覆輪、表鋤出シ彫象眼色繪、裏毛彫、香包ノ圖。

自家藏

圖九十二第



埋忠九左
四分一、菊形、金素銅象嵌束不矢。

自家藏

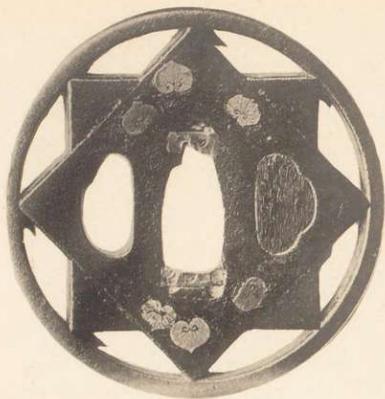
圖十三第



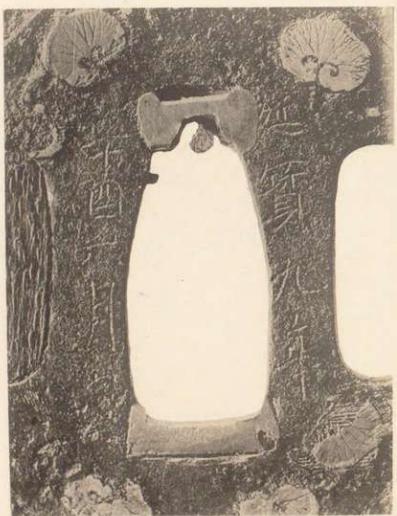
埋忠彦右衛門
鐵、丸形、源氏透シ、金象嵌葱。

同上

第三十一圖



埋忠數馬助橘宗義裏延寶九年辛酉六月
日
鐵、丸形、二重色紙透シ、金素銅象嵌莢葉。

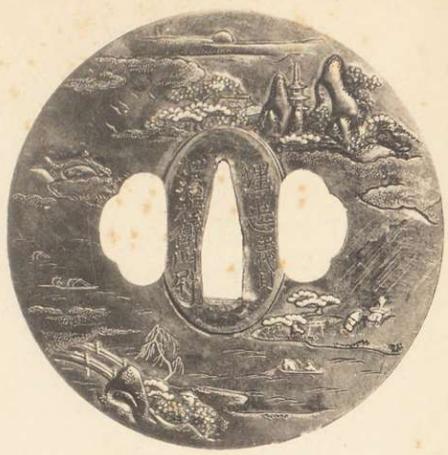


同上裏銘(伸圖)

自家藏

鑄
一
一
六
日
同
上
裏
自
案

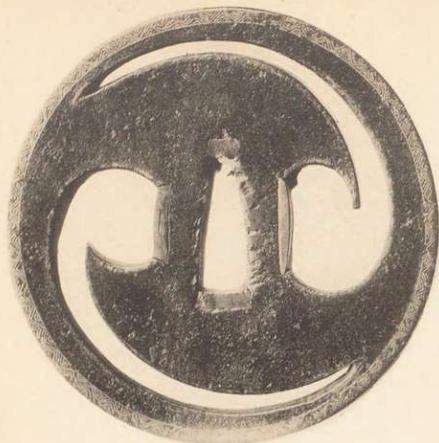
一埋忠五代目加治右衛門尉作鐸



候爵山内豊景君藏



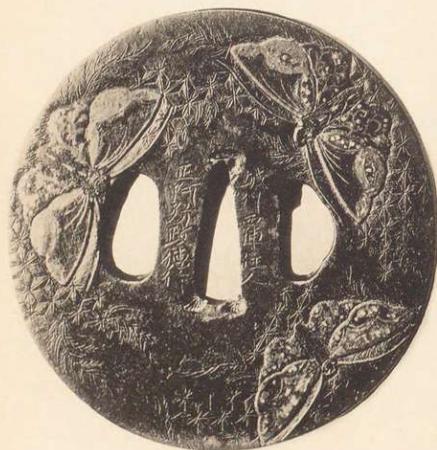
圖二十三第



古正阿彌
鐵、丸形、巴透、耳金象嵌。

自家藏

圖三十三第



城州西陣住人正阿彌政德作
鐵、丸形、麻ノ葉紋、蝶象嵌。

同上

圖四十三第



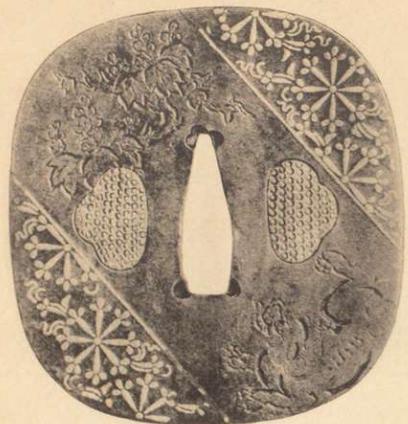
圖五十三第



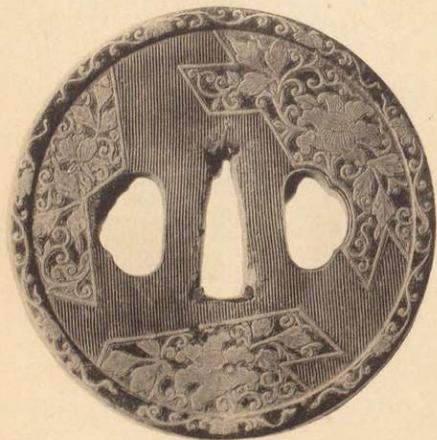
城州西陣住正阿彌
市郎兵衛政徳作
鐵、木瓜形、耳赤銅覆輪浪ノ彫、
平海老細透シ、金象嵌藻。 自家藏

無銘
赤銅、八木瓜、七子地、紅葉唐草鋤出シ、
紋透シ、耳赤銅覆輪唐草金象嵌。 同上

圖六十三第



阿波正阿彌(一) 古河男爵家藏
無銘、真鍮、撫角形、丁子唐草象嵌、
桐獅子毛彫。



同 上(二) 小倉藏
無銘、鐵、丸形、土手耳、地立鉤、
金象嵌牡丹唐草。

圖七十三第



會津正阿彌
無銘、鐵、丸形、土手耳、鋤出し彫、色繪、松下橋に鐘馗。

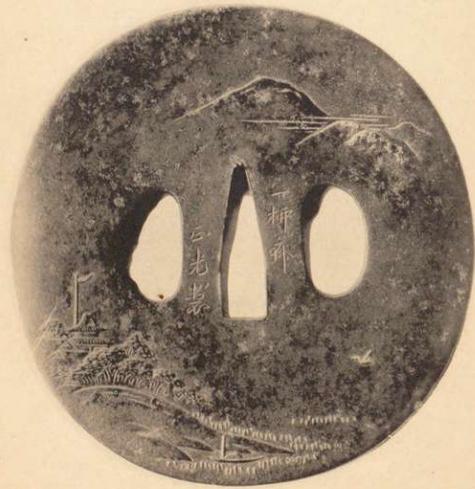


小倉藏

圖八十三第



會津正阿彌
一柳齋正光在銘、鍍、丸形、鋤出し高彫、色繪、唐人物。



小倉藏

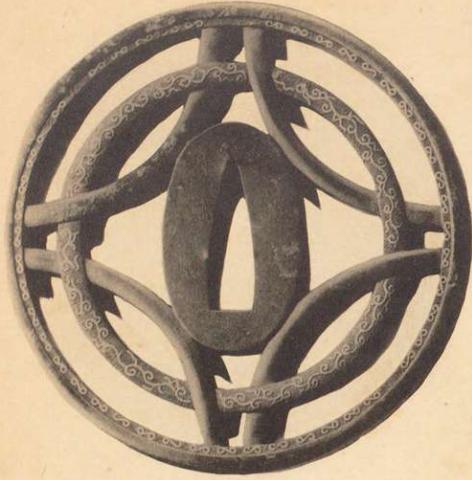


一 正阿彌一光作鐸

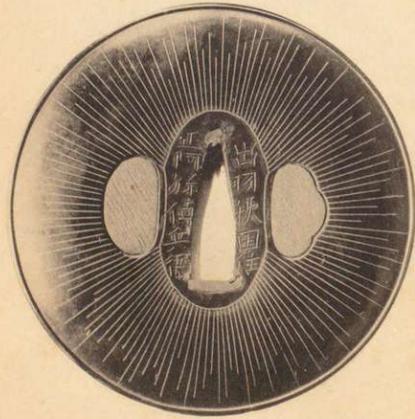


候爵山内豊景君藏

圖九十三第

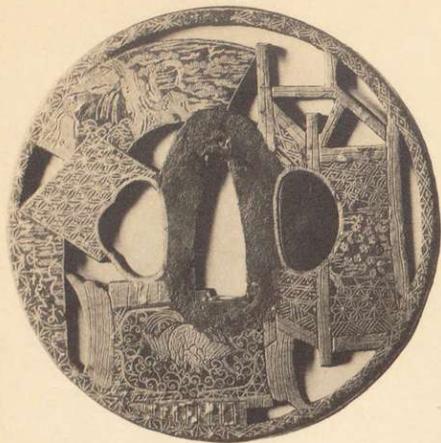


秋田正阿彌(二) 小倉藏
無銘、鐵、丸形、七寶透し、金象嵌唐草。



同 上(三) 同 上
出羽秋田住正阿彌傳兵衛在銘、赤銅、丸形、
金象嵌日足。

圖十四第



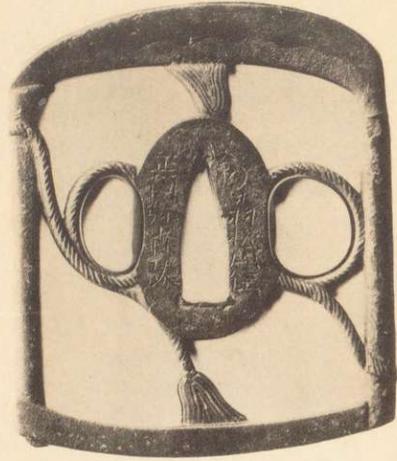
獻上鐺
無銘、鐵、丸形、透シ、金象嵌。
小倉藏

圖一十四第



正阿彌
無銘、鐵、丸形、肉彫透シ、松ニ鷹、
耳唐草象嵌。
同上

圖二十四第



豫州松山住正阿彌森勝
鐵、角形、形彫透シ、金銀象嵌。

小倉藏

圖三十四第



豫州松山住人正阿彌盛祥作
裏銘明和七庚寅歲二月吉祥日、鐵、木瓜形、打込ニ毛彫、花桐。



小倉藏

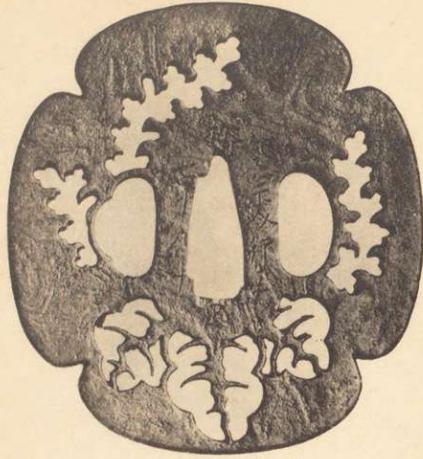
圖四十四第



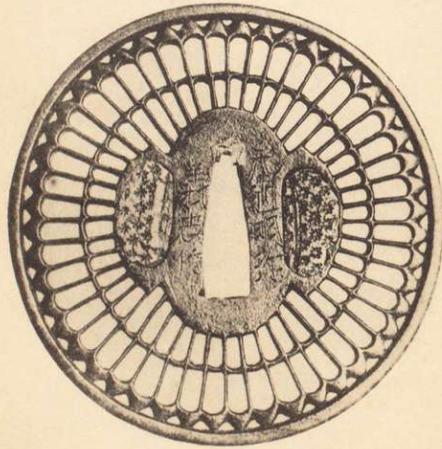
備前又七
無銘、鐵、丸形、小透シ、金銀象嵌、牡丹。

小倉藏

圖五十四第



圖六十四第



明 珍
紀宗介行年七十九才在銘、鉄、木瓜形、木目鍛、花桐透シ。

古河男爵家藏

明 珍
元祖明珍義忠作在銘、鉄、丸形、菊透シ。

同

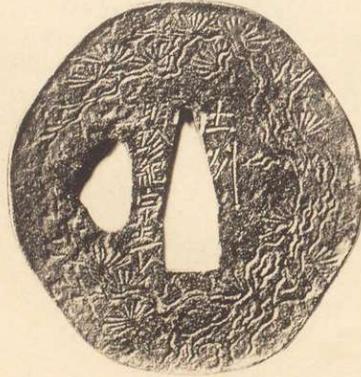
上

圖七十四第



明 珍
土州明珍紀宗義在銘、鉄、丸形、老松透シ。
小 倉 藏

圖八十四第



明 珍
土州明珍紀宗長在銘、鉄、撫木瓜形、老松毛彫。
同 上

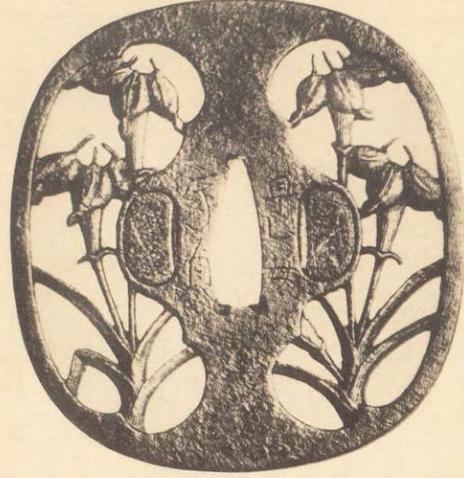
圖九十四第



明 珍
土州明珍紀宗長在銘、鉄、木瓜形、鋤出シ彫、雲龍、摺付象嵌。

小 倉 藏

第五十圖

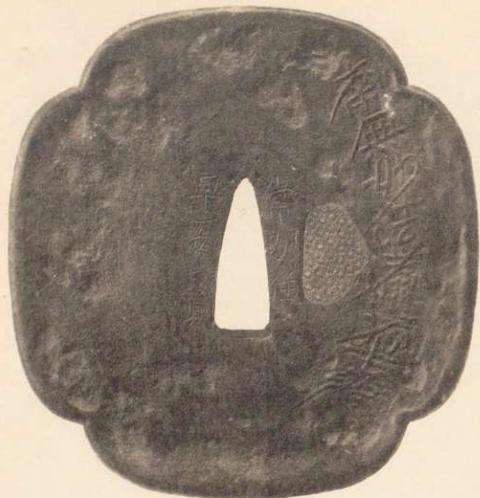


古河男爵家藏

早乙女

早乙女家真在銘、鉄、撫角形、左右杜若、肉彫透シ、金色繪。

圖一十五第



早乙女
鐵、木爪形、題目鋤出シ彫。
小倉藏

圖二十五第



春田
鐵、丸形、獅子、丸肉彫。
同上

圖三十五第



蓬菜
鉄、丸形、鶴亀透シ。

小倉藏

圖四十五第



備前駿河作
鉄、八角形、松ニ鳥居透シ。

同上

圖五十五第

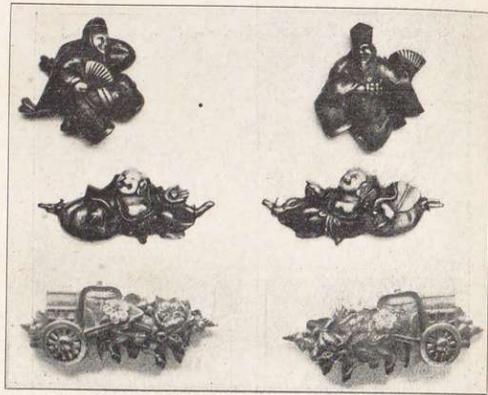


因州住駿河卓重
鐵、丸形、薄肉彫、金銀象嵌、本ニ銀杏ノ葉。
小倉藏

圖六十五第



駿河卓良作
鐵、丸形、芒ニ狐透シ。(英一筆畫)
同上



(第一圖)

後藤家作目貫

- (上) 烏銅金銀色繪三番曳、時代古く、意匠精巧に失せず古雅の趣あり、徳乗の作と見えるもの。
- (中) 烏銅金銀色粉布袋、之も古雅なる中に飄逸味の漂ふもの、廉乗作として光孝の折紙付。
- (下) 烏銅金銀色繪牛車、技巧稍緻密となり過ぎたる感あり、後藤家作には相違なきも、時代前二者に比し餘程下るもの。



(第二圖)

因州住駿河卓隨

竹林に猛虎の圖、鐵地肉彫地透し金象嵌、細工は甚だ微細に入つて、竹の葉の如きは最も巧妙な極めてある、然し虎の顔面を見た時、何等猛獸らしい威容を認めないのは何故であらう。

即ち知る、竹は寫生であるが虎は寫生でない、此の作者は生涯生きた虎を寫生する機会がなかつた、繪畫の臨摸によつて製作したものと云へやう。

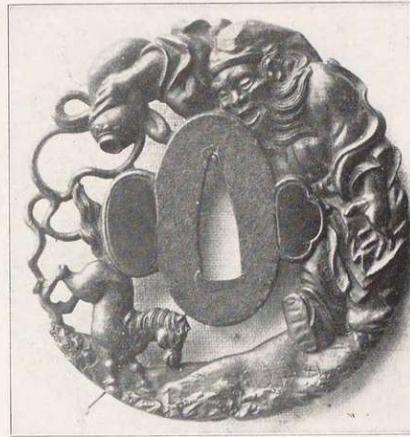
卓隨は春田十代目、江戸にて修業し明治二十八年死す。



(第三圖)

卓隨鐘裏面

斯る肉彫地透し鐸は元祿以降には各地に於て流行した、因州、雲州、長州、薩摩等、何れも同一手法であつて、同系に屬するものはなければならぬ。之等は何れも江戸伊藤派を源流とするものであつて、各地共多少の特徵を持ち有名になつたが、伊藤派が其の割合に名の上らぬのは、所謂献上物ばかり製作して無銘物が多いためといふの外はない。



(第四圖)

雲陽住春田每幹

鐵地肉彫張果老の圖、人物の眼だけに金象嵌他には何等の象嵌なし、瓢箪の紐を巧に肉彫としたる點は、薩摩の小田一派のナメ豆透しと同巧異曲であるが小田一派の作と比較して相違する點は、之は肉彫の線に丸味を持ちてやわらかく、薩摩物は角味を持ちて堅い氣味がある。



(第五圖)

每幹鐘裏面

每幹は春田派で、第三圖の因幡の春田派と同一系であるには拘らず、兩者の間に手法の著しく相違するは、卓隨は時代新しく近代的なるに反し、每幹は元祿頃であつて、當時の時代の嗜好を最も好く物語るものである。每幹は春田一派でも勝れた名人であるが、之は其每幹の作品中でも特に傑作である。



(第六圖)

雲陽住春田雅智

鐵地に獅子牡丹の肉彫、獅子の眼に金象嵌のある外は、總て他の金屬を交へず、地を透さずして單なる肉彫としたのは、技術が毎粒程に行かなかつたのか、或は彫りかけて中止したのかと思はれるけれど、恐らく之は最初から地を透す目的ではなかつたものであらう。

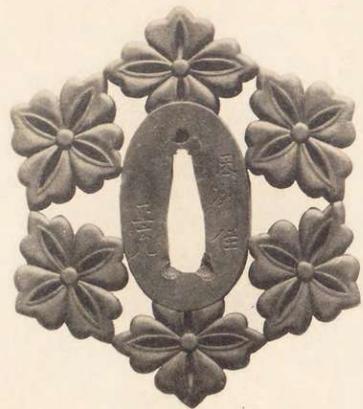


(第七圖)

雅智鐘裏面

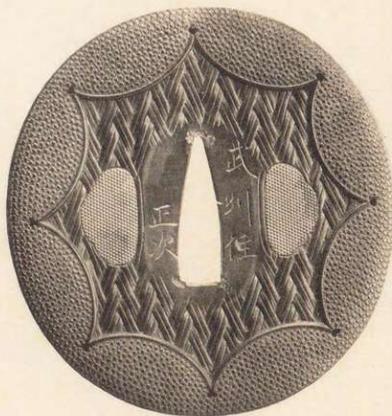
每幹と比べ見る時、圖案の配置、銘の切り方等總て同一筆法であつて、技術に於て大分相違するのは又止むを得ない事ではあるが、牡丹の彫、獅子の顔面等は、前の卓隨に比して數等の生動せる趣あるを認めるであらう、彼は彼、之は之で自ら時代の好尚、都會と地方との武人の好みが窺知される。

圖七十五第

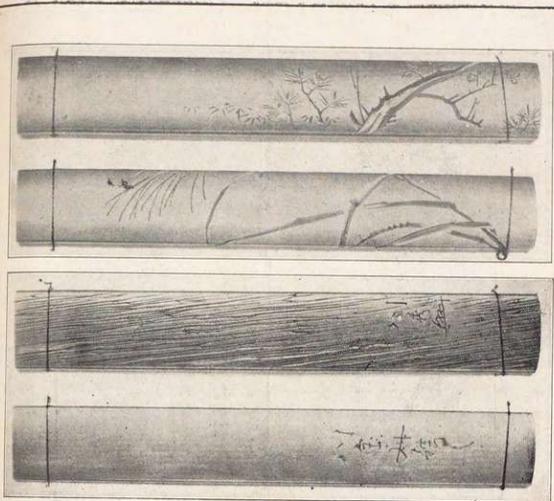


因州住正充
鉄、六木爪形、花菱紋、肉彫透シ。
小倉藏

圖八十五第



武州住正次
赤銅、丸形、耳七子、平鋤下ゲ網代。
同上



(第八圖)

川原林秀興小柄

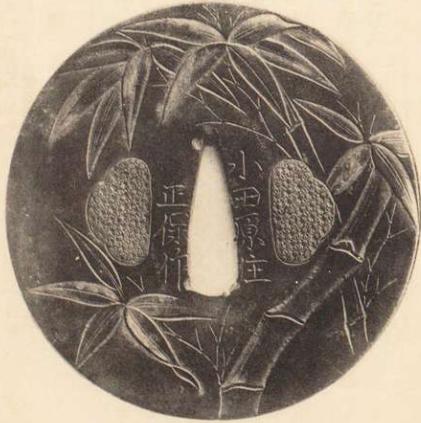
何れも四分一地小柄、松竹梅と尾花の片切彫
秀興は大月光興の門人で最も好く師の長所を
取つた名人である、殊に片切彫に於て勝れ蹟
を使用する事毛筆以上の感がある、銘は文龍
舎、寶齋、川寶齋、秀興等と切る、京都の人
にて俳諧に達し宗匠となる、嘉永四年十二月
二日六十四歳にて死す。

圖九十五第



唐津住正國 小倉藏
鉄、丸形、金色繪軍配彫、杖透シ。

圖十六第



小田原住正保 同上
鉄、丸形、薄肉彫金色繪細透シ、竹、耳金象嵌、鞘形、唐草及麻ノ葉

圖一十六第



武州住正春
鉄、丸形、肉彫透シ金色繪、鉄線、
耳金象嵌、麻ノ葉。 小倉藏

圖二十六第



武州住正常
鉄、丸形、鋤出シ彫、老松。

同上

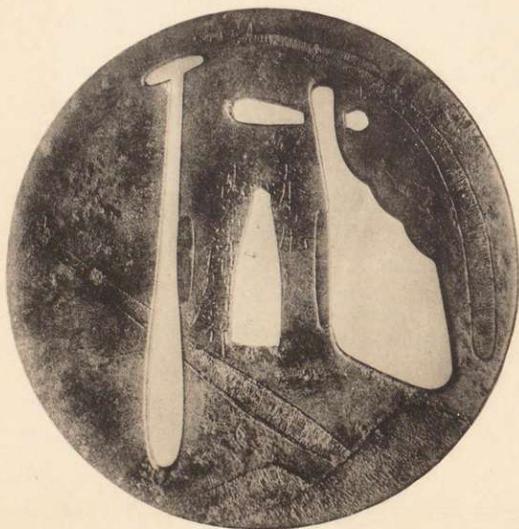
第五十五圖

圖三十六第



赤尾
赤銅、丸形、海老透シ、象嵌。
古河家藏

圖四十六第

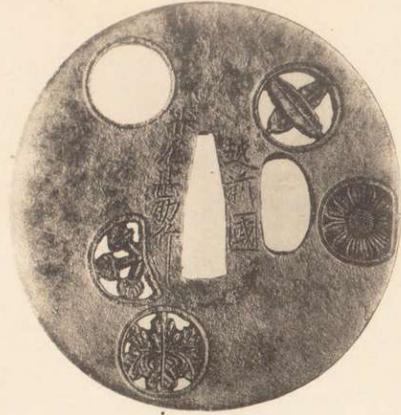


赤尾甚左衛門尉作
鉄、丸形、樞ニ舵透シ、象嵌。

同上

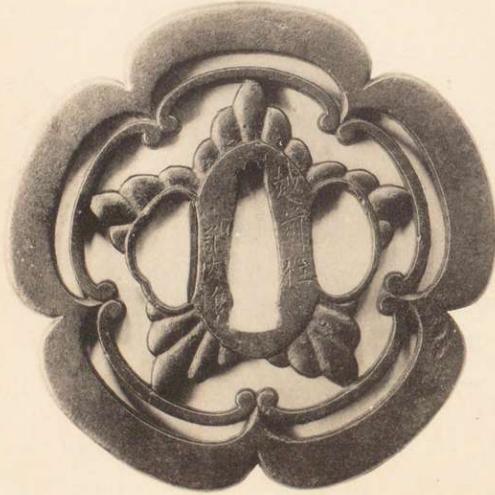
第六十一圖

圖五十六第



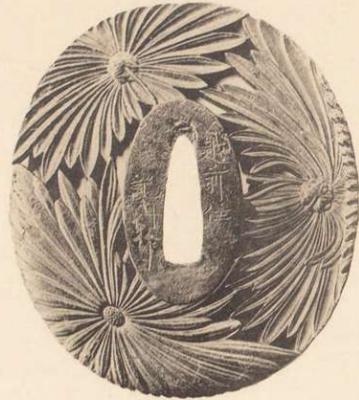
越前國赤尾甚助作
鐵、丸形、紋盡シ、鋤出シ肉彫透シ。
古河家藏

圖六十六第



越前住記内作
鐵、五木瓜形、肉彫透シ、瓜ノ紋、
小倉藏

圖七十六第



越前住記内作在銘
鐵、長丸形、菊花、形肉彫透シ。
小倉藏

圖八十六第



越前住記内作在銘
鐵、丸形秋草ニ虫、肉彫透シ。
同上

圖九十六第



一越前住小狐作在銘
鉄、丸形、稻穂ニ鼠、形肉彫透シ。
小倉藏

圖十七第



一龜山(二)
國友貞榮作在銘、鉄、丸形、布袋腹、
サハリ象嵌。
同上

圖一十七第



一龜山(三)
間在銘、鉄、丸形、角耳、平鋤下ダ肉彫、赤銅
サハリ金象嵌、色繪寫。

古河男爵家藏

圖二十七第



一終屋(一)
洛南住元武造在銘、鉄、丸形、形肉彫透シ、
金銀象嵌、頼光鬼退治ノ圖。

同上

圖三十七第



一 終 屋 (二)
無銘、鉄、丸形、鋤出シ肉彫、金銀象嵌、
海女玉取。 小 倉 藏

圖四十七第



一 宗 典 (一)
銘喜多川秀典製、赤銅、丸形、金銀色繪、
象嵌、高彫毛彫、細路ニ薦。 小 倉 藏

圖五十七第



一宗典(二)
鎔漢柄子宗典製、鉄、丸形、金銀色繪、形肉彫透シ、龍。

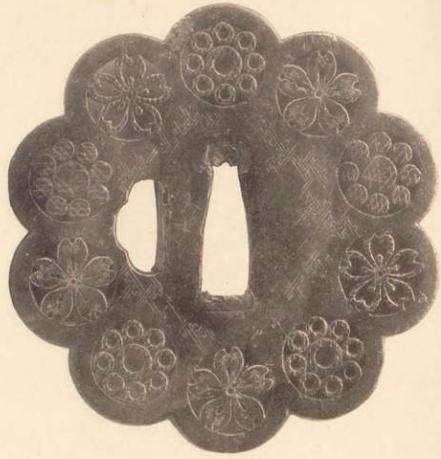
小倉藏

圖六十七第



一同上(三)
無銘、鉄、丸形、金銀色繪、象嵌、高彫毛彫透シ、唐人物ニ山水。

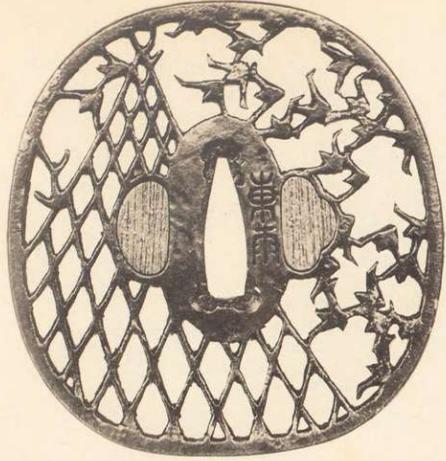
同上



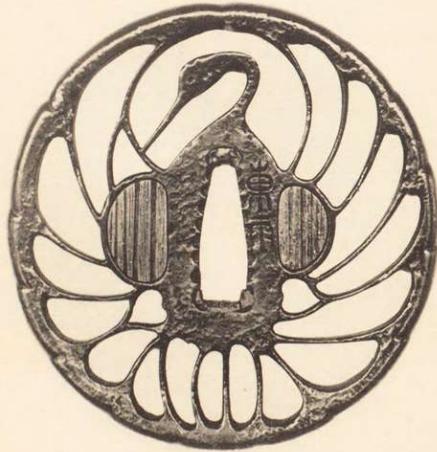
林又七作 細川侯爵家藏

鐵十木瓜形九曜櫻透繪子象嵌 鐔

林又七の代表作にして彫抜きの手際、紋
の肉置き、象嵌の技巧、共に卓絶し鍛鍊
亦良好なる名鐔なり
肥後金工録所載同國人之れを御紋畫しと
稱し古來又七生涯に三枚より造らざりし
と賞讃したるものにして又七金象嵌の在
銘亦稀有の逸品なり



一安親作 鐺 二枚
銘に曰く 東雨、眞鍮地透し彫千鳥の圖、
耳金摺付象嵌。



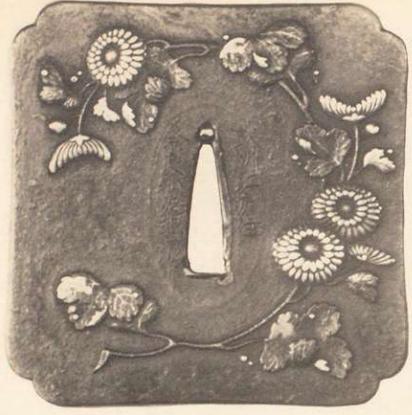
津 輕 伯 爵 家 藏
銘に曰く 東雨、素銅地透し彫揚羽鶴の圖



一安親作 鐸
銘に曰く 東雨、鐵地鋤出し彫雨雁及芦の圖。

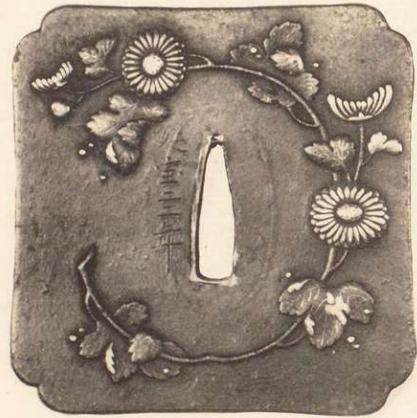


有馬伯爵家藏

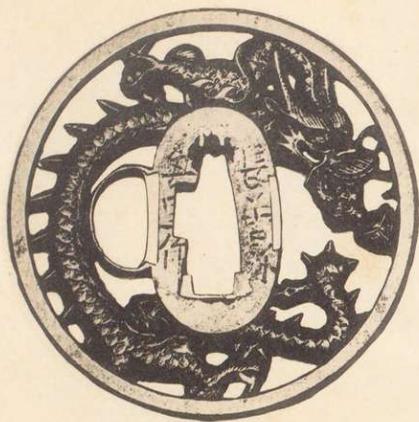


一奈良小左衛門作 鐺

銘に曰く 武州江戸住 奈良小左衛門作 延寶三二年。



小倉惣右衛門君藏



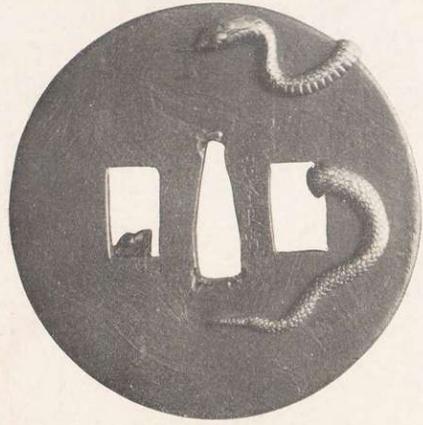
一 長曾禰虎徹作 鐺

銘に曰く、長曾禰興里作。

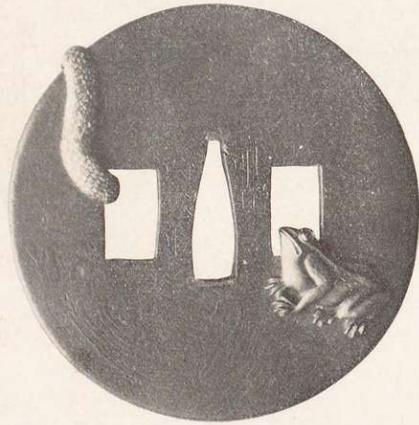
鐵丸形、肉彫透し、龍の圖。

河瀬虎三郎君藏

因に、虎徹作鐺は世に正作極めて稀有なるものなり、該鐺は其若年作に係るものなれども正作疑なきものなり。



岩本良寛作 蛇ニ蛙鐵ニ四分一置かね下地明珍守次作



須藤宗次郎氏藏

一岩本昆寛作 小柄筭
裏喃金赤銅七子地色繪桐に鳳凰の圖。



小泉策太郎君藏

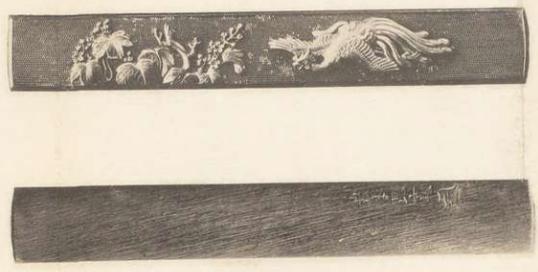
佐野直好作 鐔

赤銅七子地色繪桐に鳳凰の圖。

同

右

一岩本昆寛作 小柄筭
裏哺金赤銅七子地色繪桐に鳳凰の圖。



小泉策太郎君藏



佐野直好作 鐔

赤銅七子地色繪桐に鳳凰の圖。

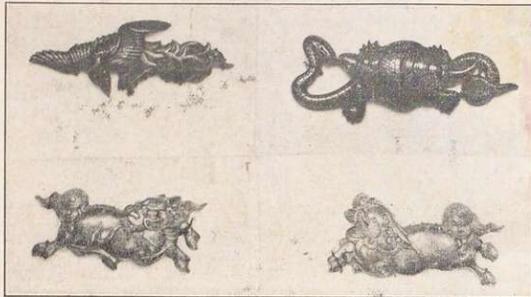


同

右



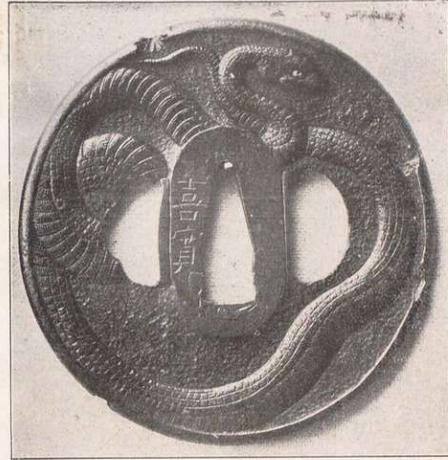
(圖 一 第)



四靈獸の目貫

御大典後の目貫度、新年の巳年に因んで、此處に四靈獸の目貫を出して見る。四靈獸とは俗に麒麟、鳳凰、龜、龍と言はれてゐる。此の圖は龍の代りに蛇を配してある、然しすつと古い天平時代に正倉院御物の鏡下繪に、四靈獸として龍、鳳凰、蛇、龜を描いてある、そして此圖と同じ様に蛇が龜を巻いてゐる（世界美術全集十二月配本の九十二圖、だから古い方が好く、麒麟を加へたのは徳川期近くなつてかららしい。此寫眞の上の目貫は東峰（後藤光雪）の作であつて眼を驚す程緻密な細工である、下圖の麒麟は無銘の金目貫で何れ後藤家の作であらうが、東峰よりは劣る。

(圖二第)



喜寛は土屋安親の門人であつて、常に安親の代作をしてゐたと言はれ、在銘の作品は至つて稀である。勿論安親の代作をする程であるから名人で、此鐘を見ても非凡の腕を持つてゐた事は分る、然し在銘の作品と、其の傳記も傳はらないのは遺憾である。此鐘は鏤地に肉彫で何等の象嵌もない、如何に好く出来てゐるか、此處に蛇足を加へるまでもない、寫眞版で充分會得出来るであらう。

野田喜寛作蛇の鐘

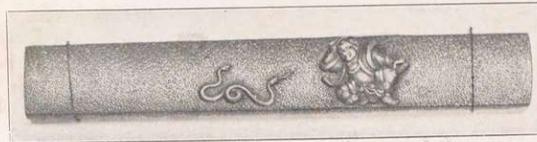
(圖三第)



喜寛作鐘裏面

成程喜寛の作品が稀な事は残念な事には相違ないが、此鐘一枚が世の中に存在する限りは彼の名は不朽である。安親が象の鐘を世に遺して以來象の鐘が何百何十と出来たが何れも安親の作に遠く及ばざると等しく、喜寛が此の蛇の鐘を作つて以來、多くの蛇の鐘が世の中に出現されど、遂に此鐘に及ぶべきものが一見當らぬ、少きが故に尊からず、勝れたが故に尊しとする、傳は知られず、人生は短い、然し彼の藝術は永遠である。

(圖四第)

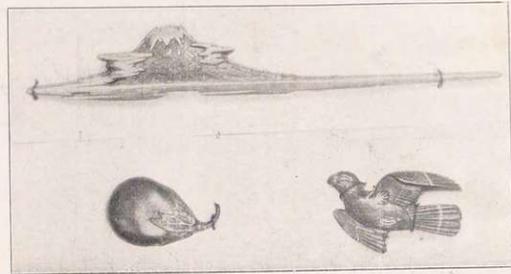


兩頭の蛇

兩頭の蛇の故事は左の文で分る事であらう、此小柄は鳥飼七子地へ色粉象嵌、裏に風遊
鑿直細とある、江戸濱野一家の金工で峰遊齋とも號す、餘り名高い金工ではないが、此
の小柄は濱野一派の番々しく彫つたのと違つて、あつさりした所に面白味がある。

『楚孫叔放、爲兒時、嘗出遊、見兩頭蛇、殺而埋之、及還憂而
不食、母問其故、叔放泣而對曰、聞見兩頭蛇者死、向者吾見之、
恐去母而死無日、母曰、蛇今安在、曰兒恐後人又見已殺
埋之、母曰吾聞有陰德者必有陽報、汝不死、及長莊王聞其
賢、迎爲令尹。』

(圖五第)



一富士、二鷹、三茄子

正月の初夢として最上の目出度いもの、作は濱野矩腫、夢占など
の専ら流行した安永天明頃の類聚期としてありさうな目貫である
(茄子はさぐり)武士の思想が此の目貫一つでも何はれる。それは
兎も角、矩腫と言へば近代の名人である、富士は鐵地の大目貫へ
金銀の色粉、鷹は四分一地へ僅に目と足だけ金色粉、手法の大膽
さと、たがいの緻密さは人をして成程と合點させる、江戸氣分、
名人氣質、目貫も此處まで事ると柄へ巻き込むのが惜しい。

(圖六第)



龜山鐘

銘は表に勢州龜山住國友貞榮作、裏に元祿十五年八月日とある、鐵地へ表にさはり象嵌で大根、裏に蕪の圖、今日では大根といふと下手役者の代名詞となつて人が喜ばぬけれど、昔の人は目出度いものとしてゐた。元來龜山鐘といふものは鐵地へ圖案を彫り下げて、それにさはりと稱する合金を流し込んだもので、刀屋などは象嵌が落ちたと言つてゐるけれど、決してさうではない、之は流し込んだ時高熱のさはりが冷却して出來た凹みである。

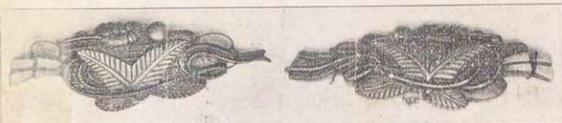
(圖七第)



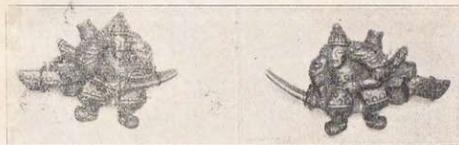
龜山鐘裏面

故に日本人が象嵌と稱するに對して外國人は泥七寶の部類に入れてゐる、製作工程から言つても象嵌でなく七寶である。此さはりの工作は國友と名乗る鍛砲師一派のやつたもので、鐘も伊勢の龜山一派の外にはない、最近まで日本人は駄鐘と稱して顧みなかつたが外國人が争ひ求めるので、日本人も今更のやうに注目する様になつた、然し鐘としての價値から言へば驚くべき名品でない事は、ふまでもない。

(圖八第)



(圖九第)



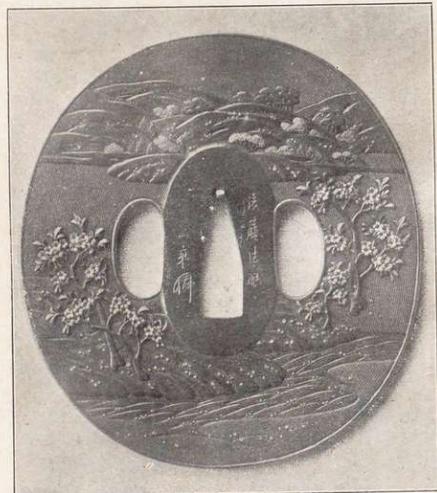
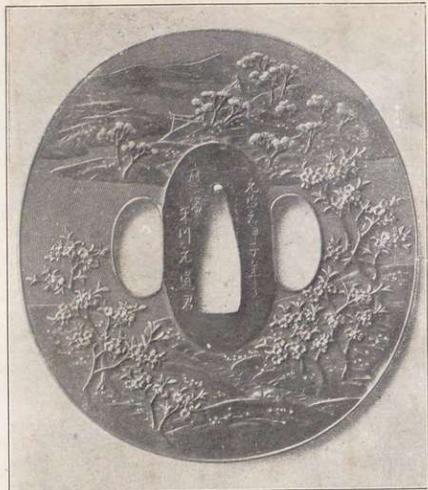
正月飾目貫

色繪で正月飾の目貫、作銘はないが大版出来のものであらう、別に見所はない、唯だ目出度い正月のものとして出して見たまでである。

舞樂の目貫

色繪舞樂の目貫、舞樂は萬歳樂が大平樂か詮議する暇がなかつた裏に金短冊で久則とある、久則は運塚久則と名乗る松平大學頭藩中の武士といふ、細密なる彫刻で有名である、近來殊に此人の作が名高くなつた。

烏金地色繪吉野山圖鐸表裏



銘後藤法橋一乘元治元甲子年應需米川元道君

東京 男爵 古河虎之助氏藏

一、安親、一乘及長常作 縁頭、鐔。

安親。赤銅、磨地、色繪高彫、近江八景の圖。



一乘。赤銅、七子地、色繪高彫、花鳥の圖。



小倉惣右衛門君藏

長常。四分一、丸形、色繪高彫。





(第七圖) 後藤泰乘大小鐘

(實物大)

其の作を見る時は如何に努力を費してあるか驚異に値する、然しながら其努力に對して世人が斯るものを餘り喜ばずして、前にあるつまらぬ圖案の甲冑師作を歡迎するのは何故か、單に古きを貴ぶ古癖眼からであらうか、さうではあるまい、此鐘は寫生でもなく圖案でもなく何等の逼真がない、古く腐つた徳川藝術の因はれた手法ばかり殘つてゐるがためではあるまいか。



(第五圖) 越後國春日住兼則刀

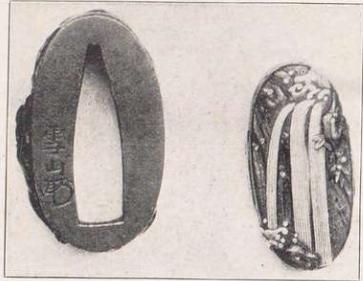
春日山は上杉謙信の居城、兼則は時代天正で謙信のお抱へである、更に吉右衛門尉造と俗名があつて、年號がない、中心の形状が如何にも異風で、やすりばちは楕圓である、刃文は關風の尖り刃、大切先で如何にも謙信の好みさな形である。



(第八圖) 赤坂透し鐺

(實物大)

鐵地丸鍔重ね楕圓く丸耳、人際の名歌「ほのく」と明石のうらの朝きりに鳥がくれ行ふねおしを思ふ」の文字を透したものを、大膽に文字を少しも損ぜず、風致を害せずして現はした所に、鮮な技巧を認める事が出来る、そして鍔全體の價値を少しも損じてない、此の技巧の源へは肥後にも京にも尾張にもない。



(第一圖)

一宮長常作縁頭

大暑の折柄銷夏の一法と涼しさうなものな少し出して見ました、鐵地へ銀で漉、ふちの方は虎の肉彫、銘は雪山とあります、之は京都の一宮長常の別號、真鍮其他の地金の時は此の號を用ひます、烏銅の時ばかり長常銘、之は一乘でも同じ事で、烏銅地の時一乘銘、鐵や其他の地金の時は伯應とが西田山人とか切ります、金や烏銅を尊び、其他の地金を卑しんだものと見えます。



(第六圖) 竹屋政照 六十五歳作

鐵地の透し鐶、竹屋政照は幕府の研師で「察刀規矩」といふ著書もある、當時の職人としては相當に學問もあり頭もよく、又器用な男であつたらう、世上に彼で作つた鐶が折々ある。



(第二圖)

渡邊在哉作鐵鐘

鐵地へ肉彫で鯉の漉上り、金銀色繪象嵌。
在哉と二字銘。在哉は安親と共に庄内の珍
久の門人で渡邊姓、東北の一片舎を一步も
出ないで細工の上手なのは、江戸へ出て來
た安親から常に作品やら粉本を送つて貰つ
て勉強したが故である。此鐘も庄内物とし
ては灰汁抜けがしてゐて、何處となく安親
の面影がある。



(第三圖)

大森英秀作鳥銅鐘

鳥銅地へ柳と流水の肉彫、金銀色繪象嵌の頗る美
しいもの。英秀は大森喜惣二と言つて、淺草御門
脇に住した名高い金工である、大森英高の甥で後
養子となり、大森一派の名を高からしめた、寛政
十年四月六十九歳にて歿。彼の作には浪の高影が
多く、又名作も多い。



(第四圖)

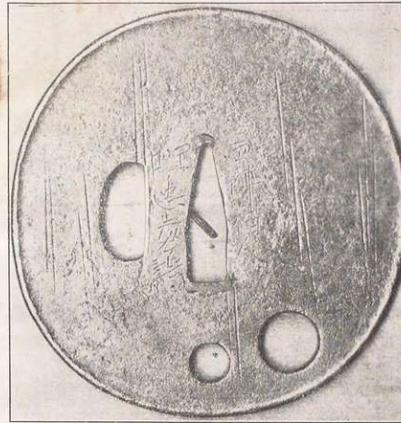
加納夏雄作鐵鐘

鐵地六角形の打返し耳、肉彫にて山間の瀧、水は銀葉嵌、銘は右下へ夏雄、斯うなつて來ると最初から鐘を作る頭ではなくして掛物の繪を鐘へ應用したゞけの事である。
夏雄は東京美術學校の教授として、明治三十一年二月二十七日七十一歳にて歿した、近代の名人である。第二圖の在説の鐘は此の夏雄の遺愛品で今は美術學校の藏品である。



(第七圖) 竹屋政熙鐘裏面

天明四年八月吉日とある、元より素人の愚み作で、之と云つて取り得のあるものではないが、圖案の工風、透しの鮮さなか／＼素人放れのしたものである、世上には斯如き無銘のもので何の系統に屬すべきや不明の鐘が澤山にある、恐らく斯ういふ物好きの愚み作であらう。

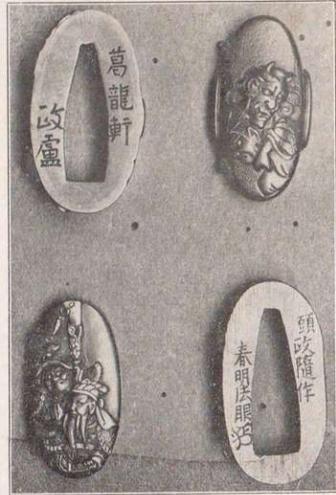


(第八圖) 西陣住人理忠彦左衛門

鏡地透き残し耳板鏡、立に時雨やすりの外は、室穴と腕抜き穴の外に何にもない、然し何等技巧なき中にもやすりと鐺の形、何となく垢抜けがして前の素人作に比して如何にも黒入らしい氣がするもの、こんなものならぬ鏡へ長たらしい銚を切るまでもないと言ふ人もあらうが、之だけ省略してあつて、然も刀にかけてしやんとする點は流石にと思はせる。

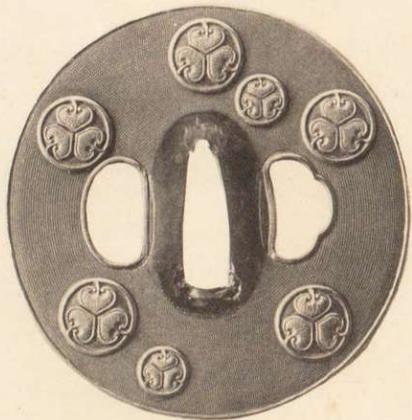
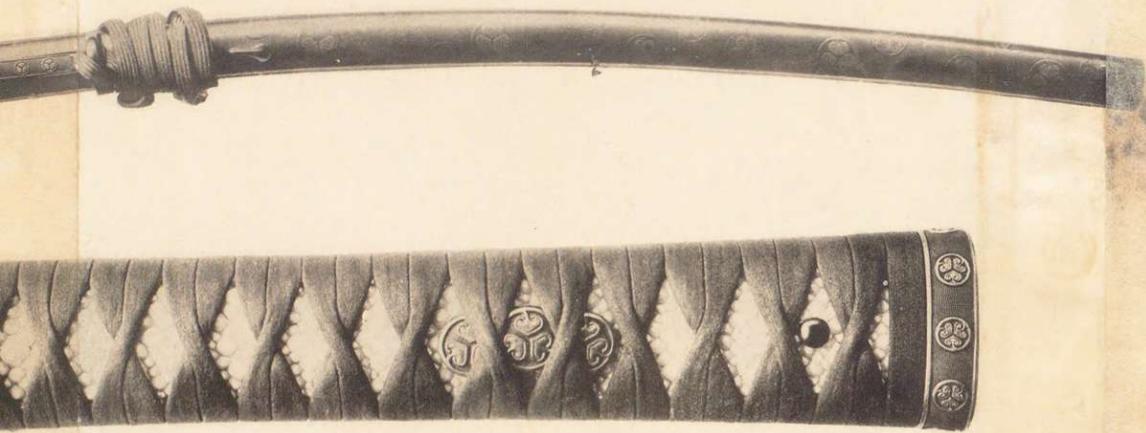
(第三圖)

政隨、春明法眼、政慮の縁頭



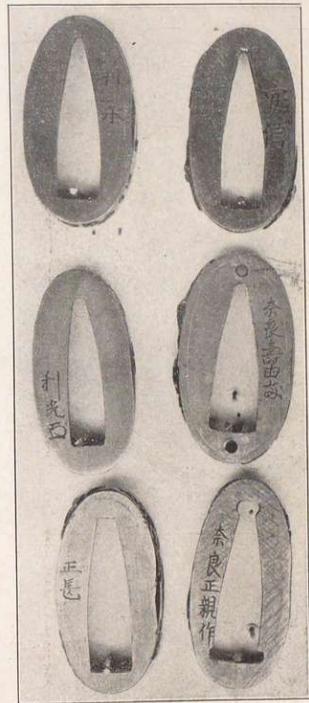
右の上圖は濱野政隨作の頭、烏銅石目地へ大森彦七の肉彫、金銀、素銅四分一の色繪此の頭だけあつたのへ、春明が縁を補作した、そして其事をちやんと彫りつけてある左下は岩間政慮作の唐人物、政慮は濱野直隨の門ではあるが、其作風は寧ろ政隨に

近く江戸趣味のものが多く、直隨は唐人物ばかりで當時如何に支那風謳歌時代であつたかは狩野派の繪を見ても、徳川家の官職にしても、府尹とか羽林とか武衛とか支那式ばかりである、此政慮は直隨門下の青年時代の作であらう。



一、葵拵刀 赤星鐵馬君藏
 頭、角金沃懸
 縁、赤銅小縁金七子地色繪葵紋
 目貫、赤銅色繪葵紋三双
 柄、白鯨菅蒲革卷
 小柄筭、裏咄金赤銅七子地色繪葵紋三双
 鐔、赤銅丸形耳金覆輪七子地色繪葵紋
 鞘、金沃懸地葵紋蒔繪
 鴨目、金
 下ケ緒、紫糸
 以上

時代元祿頃と見ゆる拵にして、徳川氏太平の世を謳歌したる風潮の表徴とも云ふべき物なり、殊に鞘の金沃懸地に紋の蒔繪は結構の極にして、金具も亦た美事なること實に善美を盡したる拵



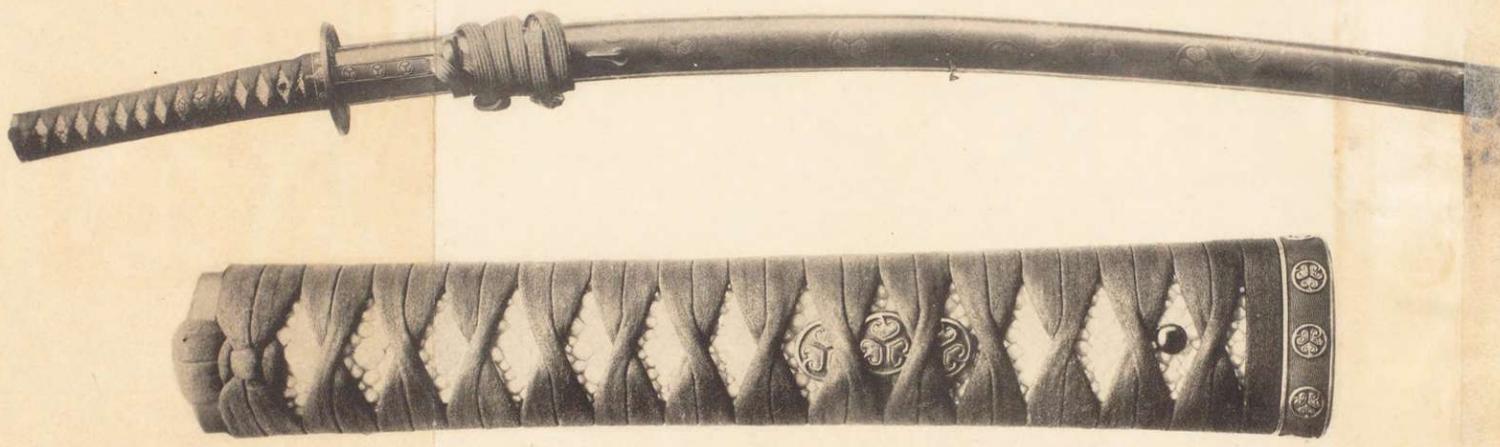
(第四圖)

奈良一派の銘

安信、安信は土屋安親二代の初名、作風は初代に似て稍劣る。
 謙由、奈良壽由は初代利壽の門、餘り上手でもなく在銘の珍しいのは常に下職でもやつてゐたのか。
 正親、奈良正親は正長の子後に正長とも銘す、初め乘意の門に入つて乗和とも銘す。
 利永、奈良宗有子、或は利壽の初名ともいふも不明、入道して知閑とも號すと。
 利光、奈良宗利子、七郎左衛門といふ、入道して宗閑といふ。
 以上、奈良正永は利長の子、利親の親である、作風は奈良風で餘り上手ではない。



安信、安信は土屋安親二代の初名、作風は初代に似て稍劣る。
 識由、奈良壽田は初代利壽の門、餘り上手でもなく在銘の珍しいのは常に下職でもやつてゐたのか。
 正親、奈良正親は正長の子後に正長とも銘す、初め兼意の門に入つて兼和とも銘す。
 利永、奈良宗有子、或は利壽の初名ともいふも不明、入道して知閑とも號すと。
 利光、奈良宗利子、七郎左衛門といふ、入道して宗閑といふ。
 以上、奈良正永は利長の門正親の親である、作風は奈良風で餘り上手ではない。



一、葵拵刀 赤星鐵馬君藏

頭、角金沃懸
 緑、赤銅小縁金七子地色繪葵紋
 目貫、赤銅色繪葵紋三双
 柄、白鯨蒲草卷
 小柄筭、裏哺金赤銅七子地色繪葵紋三双
 鐔、赤銅丸形耳金覆輪七子地色繪葵紋
 鞘、金沃懸地葵紋蒔繪
 鴨目、金
 下ケ緒、紫糸
 以上



時代元祿頃と見ゆる拵にして、徳川氏太平の世
 を謳歌したる風潮の表徴とも云ふべき物なり、
 殊に鞘の金沃懸地に紋の蒔繪は結構の極にして、
 金具も亦た美事なること實に善美を盡したる拵
 と云べし。

一宮長常

京都住一之宮越前大掾
古川善長弟子
虎平高長ト云者有
此高長ノ弟子アリ
天明六年歿



石山基董

從三位中納言後師香ト云
諸藝ニ堪能ナリ
享保十九年卒年六十六



埋忠就受

嘉治右工門宝曆二年卒七十五



大森英昌

初重光ト云與市宗珉
門人明和九辰年卒
年六十八



村上如竹

鎧之象眼師ナリ
初メ仲矩ト云



稻川直克

柳川直政弟子文四郎
宝曆十一卒四十二



後藤清乘

名ハ光長立乗次子
狩野洞雲ノ兄江都之位



吉岡豊前

東都兩國柳橋之位



橋部正貞

後藤益乘門人
治良左衛門又
久定ト云



古川元珍

初聖壽ト銘ス吉川ト云
鏑師ノ弟子後ヲ宗珉
ヲ學ブト云



奈良常重

川村市右三門重次ノ弟子ト云



奈良正長

利永門人正長子
清六初正春ト云銘云



奈良乘意

壽永弟子仙右三門初太七
一贊堂永春ト云
宝曆十一己年卒六十一



奈良政隨

利壽弟子濱野太良兵五十五
明和六年卒七十二歲
乙卯軒味墨驪風堂開經
遊壺亭中圭子



尾崎直政

孫光工門下貴鴨齋
天明二寅年卒又



奈良利壽

太兵衛ト称ス奈良
利永ノ弟子本所番
場ニ住ス
元文元年卒又年七十



細野政守

通称總左衛門京都久
相瓦小田原ニ住スト云



岩本良寛

宗乙ノ二男 幸八十云



横谷宗珉

治兵衛友常 遜菴云
京都、産江都ニ至リテ
宗知ノ養子トナル
名人
享保十八年卒



津 尋甫

八无衛門ハジメ野村
正道ノ門生後チ
後藤通乘之
弟子也
宝曆十二年歿
四十二才



奈良安親

庄内ノ産土屋弥五八
入道シテ東雨ト号ス
辰政門人延享元歿
年七十五



横谷宗與

友貞横谷伊右三門英精第十
宗珉養子十九
安永八亥年歿又



野村友喜

江府ノ産後阿州
二住ト云



IT-27-32

水戸通壽

切阿弥弟子矢田部氏彦六
明和五子年歿



會告

一、新入會員は會則による六ヶ月分の會費を前納せらるべし

一、會員外にして本會誌要望の向は左記により其の實費を前納せらるべし

一 部(郵税とも)金五十錢
六ヶ月(同) 金三圓
一ヶ年(同) 金六圓

一、會費並に本誌の實費其の他本會へ送金は振替貯金口座東京三〇九一九番へ振込まるゝを相方の便利とするも都合により爲替にて送金せらるゝも妨なし

一、會員及本誌要望の購讀者にして居所を轉せらるゝ時は其の旨速かに通知せらる

大正十四年四月二十八日發行

大正十四年四月二十八日發行

非賣品

發行所

東京市麹町區當土見町三丁目一丁目
遊就館事務所内

中央刀會

右代表者

末岡武俊

發行所

末岡武俊

印刷者

三浦 猪

印刷所

株式會社 秀一 舎

東京市牛久保市各町賀町一丁目十二番地

東京市牛久保市各町賀町一丁目十二番地

不許複製 嚴禁轉載

IT2T-32

昭和九年 貳月 壹日 製造

